343

344
553

# 滿洲縱橫記

條原義政著

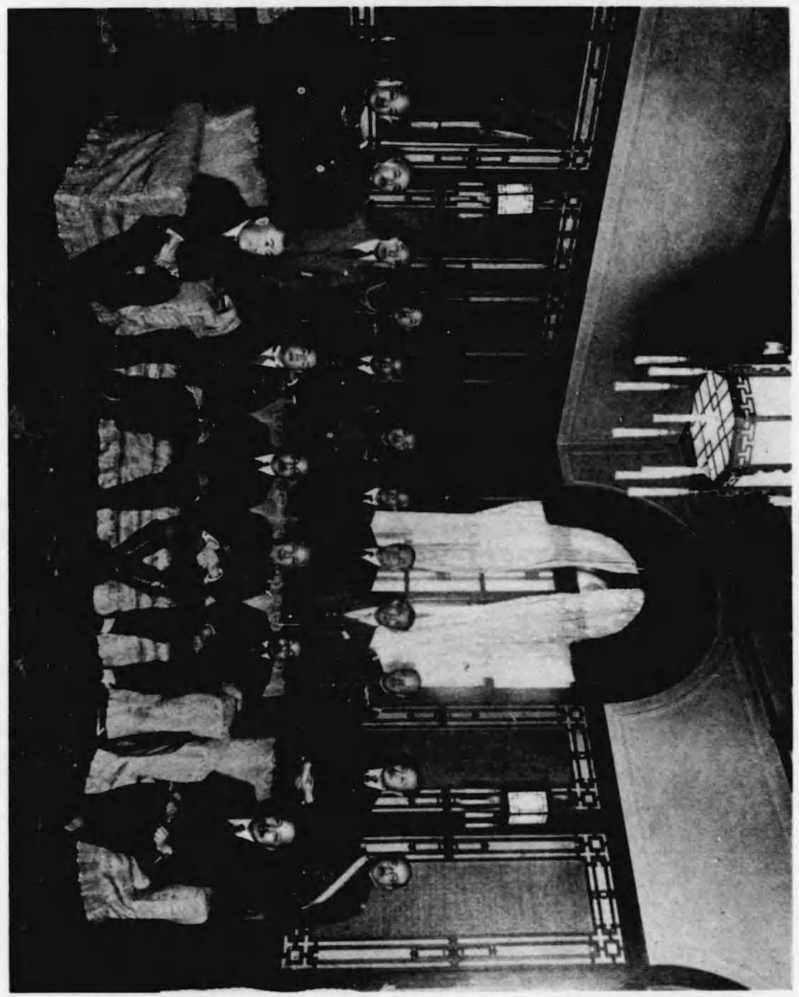
改訂版

始

特233
667

篠原義政著

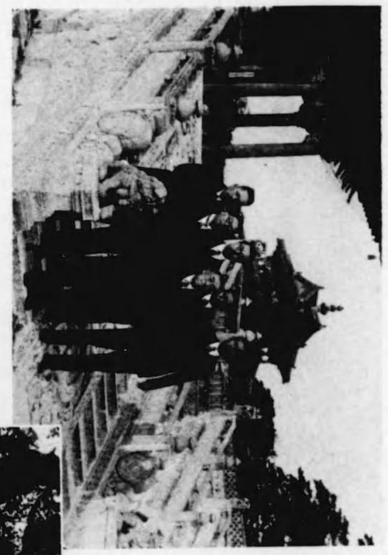
# 滿洲縱橫記



**武藤全權を圍みて**——昭和七年十月五日於奉天大和ホテル

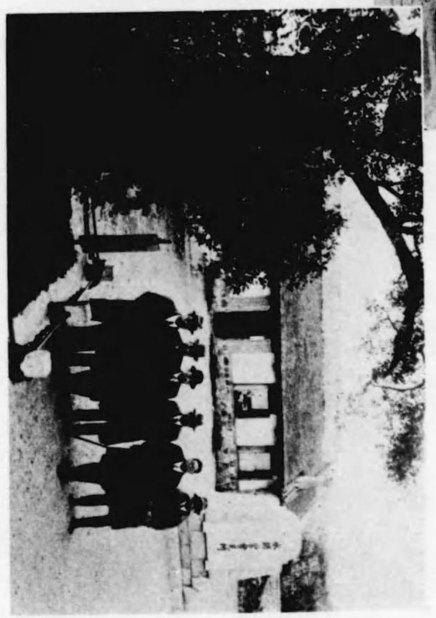
前列向つて右より……宮崎代議士、森代議士、武藤全權、篠原代議士、佐藤代議士、岡本代議士、

後列向つて右より……志波副官、梅原關東廳秘書官、岡村參謀副長、川越首席顧員、鈴木顧問、齋藤顧問、小磯參謀長、栗原書記官、齋藤大佐、鶴見全權秘書官、板垣少將、喜多大佐、



右二人目ヨリ佐藤、森、岡本、宮崎の諸氏及著者

昭和七年十月十七日
ステッセル水師營會見所に於て



右二人目より佐藤、森、岡本、宮崎の諸氏、著者

昭和七年十月五日
北陵に詣で、

# 自序

一、本稿は昭和七年十月一日東京發、同月二十一日神戸港歸着まで二十一日間の滿洲視察旅行日記である。

二、日記ではあるが、其の內容は普通の日記とはやゝ其の趣を異にし、全文の八割以上が此の三週間に亘り著者の會見したる在滿各階級の人物、溥儀執政、武藤全權、各出征師團長、滿洲國政府要人、滿鐵幹部、關東廳首腦部、出先外交官、民間各方面有力者等凡そ五十有餘名の談話又は說明を、殆ど速記者の態度で筆記した記錄である。元より著者は速記者ではない、從て全力を擧げて筆記に努めたとしても、到底話說の全部を誤謬なしに書き取ることは出來ぬ。加ふるに著者の淺學菲才を以てしては、可なりの誤記もあり得る、從つて折角の名論卓說の內容を曲解混濁せしめて居る點も少くなからう。此點深く談話者諸賢に御詫をする、又其の誤謬曲解の責

任は元より著者にある。たゞ著者としては、大學の學生當時の眞摯と努力とを以て、自己の最善を盡して出來得る限り談話者の意見を其儘表現することに努めた。

三、從つて若し讀者が此の書を著者と同じやうに、一學生になつた心算で熟讀玩味して吳れるならば、滿洲國の現在及將來に付き政治に外交に治安に移民に交通に農業に商業に工業に百般の問題に付き、大に得る處があらうと思ふ。何故ならば假令筆記は拙劣でも語る人は、其の經驗に於て、其の學問に於て、其の識見に於て、其の人物に於て、其の閲歷に於て、當代に於ける在滿第一流の人物（外交關係につき時間の喰ひ違いの爲め大橋忠一君の高見を聞き得なかつたのは殘念だ）を殆ど網羅して居るからである。

四、著者は忙しい旅の中で、此の筆記を完成するのに指に豆を拵らへた、どうかこれを讀まるゝ諸君、眼光紙背に徹するの明智を以て、思を潛めて一言一句を味つて吳れ、そして一人でも多く滿洲の實體を摑んで吳れ、それがどれ程御國の爲めになることか！　偉大なる滿洲を偉大なる大和民族は如何に處分すればいゝのか、誰が何と云はうと、全世界の愚劣な輿論がどうあらうと、大滿洲を大滿洲たらしめ得る者は大和民族の外にはない。滿洲をあるがまゝの偉大なるものに作り上げるのは、日本の興亡を賭しての大使命だ天職だ。これ敢て此の日記を世に公にする所以である。

五、此の日記は決して著者一人の力を以て作り得たものではない。これが出來上つたのは、同行、岡本、宮崎、森、佐藤の四代議士が各人士と對面の際、要領のいゝ質問を次ぎから次ぎへと出して吳れたからこそである。玆に前記四氏に對し深甚なる謝意と敬意とを表する。

十月二十九日夜

著　者

# 目次

**昭和七年十月一日**……一
東京驛出發——一
**十月二日**……二
朝鮮海峽を渡る——二
**十月三日**……三
釜山——三　鐵道沿線の植樹——四　朝鮮農家——五　朝鮮の墓——六　朝鮮服——六　朝鮮征伐、日清役の回顧——七
**十月四日**……七
安東稅關、滿洲時間、安東驛プラットホームの景越——八　滿洲第一歩の風光——八　覆下馬塘に匪賊現はる——九　奉天着——一〇　奉天市街見物、張學良舊邸、忠靈塔、奉天神社、奉天第一の支那

料理明淵春、馬車、カフエー——一一

**十月五日**……一三

川越全權隨員、林出二等書記官談……一三

滿洲に關する諸問題に付き——一三

滿鐵宇佐美氏談……一五

滿洲諸問題——一五

武藤全權挨拶……一六

齋藤顧問意見……一七

滿洲に於ける四大產業——一七　日本海の活用——一七　對國際聯盟態度——一八

北陵詣で、ラマ寺見物……一八

北大營戰跡に戰死者の靈を吊ふ……一九

洋車、支那服……一九

**十月六日**……二一



撫順炭鑛久保事務次長談……二二

滿洲の鑛業——二二　オイルシエール——二三

撫順景觀(木庭接待役)……二四

長谷川製油工場長談……二五

奉天民間有力者座談會……二六

奉天商工會議所會頭庵谷忱氏、奉天居留民團長野口多內氏、奉天取引所長平山萃氏、東亞勸業株式會社長向坊盛一郎氏、奉天取引所信託株式會社取締役金丸富八郎氏

**十月七日**……四一

公主嶺農事試驗場長中本保三氏談……四一

滿洲の地勢、林業、農業、牧畜業に付き——四一

畜產課長談……四五

羊、豚、雞——四五

公主嶺驛長談(驛の治安狀態)……四八

新京着……四九
十月八日……五〇
長春野戰病院長談……五〇
南嶺戰跡を訪ふ、滿洲國承認祝賀行進……五〇
溥儀執政面謁……五二
執政挨拶……五四
滿洲國承認祝賀會……五五
十月九日……五六
吉林行中止と其の理由……五六
參議駒井德三氏談……五八
治安維持——五八　移民問題——五九　統制經濟の問題——六二　對露問題——六三　王道政治——六四
市街散策、平康里……六五



大原萬千百氏意見……六六
國籍法、戸籍法、對滿政策——六六
十月十日……六七
飛行機にてハルビンへ……六七
生れて始めての飛行機——六七　大地の美觀——六七　着陸時の吃驚——七〇
を訪ふ……七一
ハルビン總領事代理談……七一
滿洲里邦人監禁事件——七一　鮮人保護問題——七二　白露人及赤露人——七四
沖、横川六烈士忠靈碑參拜……七五
の大縱横談……七六
治安維持——七六　滿洲一般——八二　對露關係——九四
ロシヤ情緒見物……九九
十月十一日……九九

鮮銀係主任談……一〇〇
伊藤公の遭難地を訪ふ……一〇一
ワンポーズの味……一〇一
十月十二日……一〇二
飛行機にてチチハルへ……一〇二
松花江の大氾濫——一〇二　北滿の曠野——一〇三　宣傳ビラ——一〇四　大沼澤地帶——一〇四
の挨拶及匪賊討伐談……一〇五
滿洲航空株式會社永淵三郎氏談……一〇九
飛行機にてハルビンへ……一一〇
宮崎君の散支詩——一一三
着陸後飛行士の談……一一五
野戰病院主務官談……一一五
ハルビン商工會議所佐倉毅一氏談（北滿取引の狀況）……一一六



日本人民會長濱政一郎氏談……一一二
キヤヴアレー見物……一一三
十月十三日……一一五
ハルビンよ、さらば！……一一五
飛行機は汽車よりも安全——一一六　低空飛行と冷汗——一一七
吉林行き……一一七
濱田滿鐵公所長談（木材）……一一八
長談……一一八
匪賊討伐戰——一一八　吾が將兵の眞價——一一九　愉快な蒙古軍——一一〇
吉林省公署警衛隊補佐官內田利平君談……一一〇
滿鐵本多靜氏談（木材其他に就て）……一一三
東京旅館投宿……一一三
十月十四日……一一三

新京へ……一三九
吉林見物——一三九　鮮農米取入れ保護の警官に遇ふ——一四〇
總務廳長阪谷希一氏談……一四〇
治安維持、移民問題、鐵道の將來、豫算、裁兵、外交、統制經濟——一四一　執政の地位——一四三
財政總務司長星野直樹氏談……一四二
統制經濟——一四三　稅制——一四五　財政——一四六
農耕科長横瀨花兄七氏談（米、養蠶）……一四七
總務科長兼特別會計科長古海忠之氏談（阿片）……一四八
農務課長談（移民問題）……一四八
水曜會座談會……一四九
在鄕軍人長春分會長四戸友太郎氏、長春商工會議所會頭永原岩雄氏、長春地方事務所長橘岡茂氏、長春地方委員會議長勘崎仙英氏、長春取引所長奥平廣敏氏、中央銀行顧問辯護士大原萬千百氏
長春の夜景……一六二



十月十五日……一六二
長春發大連に向ふ……一六二
附近の風物、大原君の言、遼陽の回顧——一六二　大石橋下車——一六三
營口着（矢島君一家の出迎へ）……一六四
荒川領事談（治安、英國婦人拉致事件、營口に於ける商取引）……一六四
矢島家の歡迎……一六六
二十三時十五分大石橋に向ふ……一六七
十月十六日……一六八
大連着及附近の見物……一六八
甘井子石炭積込埠頭——一六八　露天市場（泥棒市場）見物——一六九
滿鐵理事河本大作同山崎元幹兩氏談……一六九
各種問題に付き——一七〇　滿鐵の使命——一七四
碧山莊（苦力長屋を見る）……一七五

滿鐵理事村上義一氏談（事變突發直前の事態）……一七六
十月十七日……一七八
旅順へ向ふ……一七八
關東長官々邸座談……一七九
警務局長林壽夫氏、內務局長日下辰太氏、高等法院長土屋信民氏、久保田海軍大佐、事務官水谷秀雄氏、同松崎憲司氏、同伴東氏、同森本勝巳氏
旅順戰跡を見る……一八四
牧城子古墳を見る……一八六
大連市長座談會……一八六
市長小川準之助氏、陸軍少將岩井勘六氏、取引所長小林和介氏
向陵同窓生と會飲……一九四
十月十八日……一九四
香港丸大連埠頭を離る……一九四



武藤全權宛謝電……一九五
十月十九日……一九六
三宅中將支那軍閥を語る……一九六
最後の歡談……一九九
十月二十日……二〇〇
麗はしき日本の島山——二〇〇　余は香港丸にて一人神戸へ——二〇〇　瀨戸內海の風光——二〇〇
十月二十一日……二〇一
神戸歸着——二〇一　六甲雨に煙る——二〇一

# 滿洲縱横記

篠原義政

**昭和七年十月一日**

午後九時四十五分、燃ゆる壯心雄圖を胸に抱いて東京驛を立つ。

同行は何れも政友會少壯一年組壬申會の代議士、岡本一巳、佐藤洋之助、宮崎一、森昇三郎（イロハ順）及び余の五人。

見送りの先輩同僚の代議士、門田、高橋、小野寺、出井、上野、坂本、中野、田村、綾部、小高、藤生、勝又の諸氏、同窓香川の知事君島、金井、須賀、横田、中村、神戸、設樂、紋谷、西村、牧、本多、八坂、吉田、新藤、今井の諸氏及家族達大勢。

時も時、此の日、吾が東京市は人口二百萬の舊殼を破つて、隣接八十有餘ケ町村を合併し、人口五百三十萬、世界第二の大都會に躍進して、全市は歡喜と祝賀に湧き返つて居るではない

か、さては素晴らしくいゝ縁起だぞ、東京が二倍以上に膨らむ日に出發する吾等だ、天の啓示に曰く『此の縁起を押し通して東亞の天地に大日本をして二倍三倍に擴大膨脹せしめよ』と、いざ！　さらば！　挺身勇躍新天地に乘り込まむ。

**十月二日**

二十四時間の旅を了へて汽車は下の關に着く、直に聯絡船景福丸船上の人となる、午後十時半船は下の關岸壁を離る、海波立たず、月なく、暗夜なれども、滿天の星降らん許り、右舷、本州西端の燈臺は、青色に明滅して、吾等が行の一路平安を祈るかのやう。

皇國の興廢を此の一戰に賭したる日本海大海戰の戰跡朝鮮海峽を、寢ながらにして過ぐると思へば、何とも恐縮の次第である、たゞこの平安な旅につけ、染々と胸に染み入る皇恩國恩の有難さ、今更に、肅然たる心地にて、東郷大將の心事を思ひ、奮戰將士の辛苦を察し、心ひそかに戰歿勇士の靈を弔ふ。



**十月三日**

一夜明くれば釜山港外、初めて見る朝鮮の山々は、どんな形？　どんな色？　と好奇の眼を瞠る、所が案外山は綠に覆はれて內地と夫れ程の違いもない、港に入つて段々と岸壁に近づく、白い着物の呑氣そうな鮮人の數が比較的多く眼につく、其の間に赤紫青黃などの眼を射るやうな單色の着物を着けた子供や女が雜つて居る。

荷物を奉天行の車室に拋り込んで、驛前のタクシー三十分間二圓五十錢に飛び乘り、市內見物に出掛ける、町は汚ない、擔軍（チゲ）が先づ眼につく、チゲとは往來流しの萬荷物運搬屋である、二股の木を梯子に拵へて背負ひ、どんな荷物でも求めに應じて運搬する、これが盛に往來をウロついて居る。

次は鮮人婦女の頭に依る荷物運搬である、內地の大原女と同じやうに、芋でも、茄子でも、桶でも、皆頭に乘せて、往來をフラフラやつて行く、タクシーを飛ばす吾々はハラハラするが、

案外事故が起らぬ處を見ると、割合に要領がいゝらしい。

朝鮮家屋を見た、小さな低い家屋の上に藁を葺いてある形が、離れて見るとキノコのやうだ、これは至る處の農村家屋皆然りであるが、毛唐人はこれを豚小屋と間違へて『朝鮮では養豚業が盛だ』と云つて感心したそうだ、中には瓦葺の家もある、更に堂々（小さな）たる門構へで塀を廻らしたのもある。其の風格たるや實に立派である、奈良の唐招提寺や法隆寺に似た風格である、實にいゝ、然し又實に小さい、それで南一旅館なんて看板を掲げてるのを見ると、お可笑しくもあり、可愛くもある、料理屋待合などのある町を通つて見たが、全く豚小屋の陳列場のやうな處で、お話にならぬ、恐れ入つた、狭斜の巷とはよく云つた。

午前九時十分奉天行列車に乗る、所謂廣軌だ、堂々たる列車だ、食堂にはスマートな女ボーイが居る、食事なども日本食が内地列車のより遙かに立派だ。

沿道の山々は合邦以來、總督府が苦心慘澹して植樹させたものだそうだ、朝鮮は舊韓國政治に至るまで多年秕政の結果、國力民度愈々衰へ、山々の樹は各戸のオンドルに焚く爲めに根まで堀つてしまひ、皆素裸にしてしまつた、それを總督府が必死に恢復に努めた、何でもカンで



も早く樹を植えろと云ふので、大體は松を植えたが、松の伸びるのを待つて居れぬ處は、ポプラやアカシヤを矢鱈に植えさせた、川の岸、道の側、田甫の畦、どこでも構はぬ、植えさへすりやいゝと云つた調子で目茶苦茶に植え捲つた、古い歴史の朝鮮にモダーンなポプラやアカシヤが生ひ繁つて居るのは、一寸面白い不調和だ、今でも毎年四月三日は植樹デーだ、總督以下全鮮官民が必ず少なくとも一本づゝは樹を植えなけりやならぬ、斯くして沿線の山々は、略々綠に塗り返された、然しホンの一刷毛と云ふ程度、まだまだ綠樹鬱蒼とまでは行き兼ねる。

次は米の問題であるが、朝鮮は水が少ない、然し内地のやうに梅雨と云ふものがなく、暴風雨も少ないので、植付けさへ出來れば、比較的安全に收穫がある、京城から先は夜になるので分らぬが、南鮮地方汽車の沿線に廣がる水田は實に立派である、内地のそれと少しの違ひもないまでに立派に耕されて居る、其の外眼に付く農作物は豆である、太田以北に行くと木綿が相當作られて居る。

沿道處々に點在する農家は例の雨後のキノコ、屋根に眞赤な唐ガラシを乾してあるのが特に眼を惹く、二階家もなければ、倉庫らしいものもない、家の裏表の出入口の側に瓶が幾つも並

べたり積んだりしてある、瓶は漬物の容れもので、漬物を澤山持つてることは、ツマリ財産家のシルシだそうだ。

汽車の兩側、至る處に小さな土饅頭がある、鮮人の墓だ、墓は實にいゝ場所を占領して居る、鮮人の考へに從へば、祖先を立派な處に葬らなければ、其の家は繁昌しないのだそうだ、其の墓が普通の人間のは、たゞの土盛りだが、少し格式がよくなると、周圍に廣く樹を植え、其中に石垣を積み、其中に土饅頭を築く、こう云ふ墓が山の中腹の日當りのいゝ處などに澤山ある、恐れ多いが吾が國の御陵墓を模したやうな、ゆつたりした墓だ、誠にいゝ、そしてそれが處々に散在して居るので、目障りにならぬ、目障りどころか、寧ろ單調な農村に一脈の風致を添えて居る、支那に行くと此の墓が田甫の中にも澤山あるそうだ、故郷のことを墳墓の地と云ふた意味がよく頷かれる。

鮮人の帽子はどう考へ直しても間抜けだが、服裝は實にいゝ、白い綏やかな着物を着て、悠々歩く姿は實にいゝ、女の服裝も誠に立派である、どんな山の中の一軒家に行つても白い服を着て居る、たゞ驚くことは、この白い服のまゝ、男は牛車を馭し、女は頭に荷物を運ぶ、貧乏な



癖に衣服の氣前は實にいゝ人間だ、そして人間が一體にのんびりしてゐるせいか、牛の歩みが馬鹿に早く活發に見えるのは、內地の京都と同じ景趣である。

途に成歡の驛を過ぐ、車窓の彼方に記念碑を仰ぐ、日清役の激戰場、感慨無量、さるにても豐太閤は偉かつたなあと思ふ、鎧を着、草鞋を履き、馬に乘つて、槍を持ち、幾百里の山河を征服した加藤淸正、小西行長の故事が偲ばれて懐しい、國威は明治以來年と共に伸び且つ張つた、今や驛々の主要の町は殆ど內地化して、更に異國にあるの感がない、吾等は奉天行急行の展望車の窓から古き歴史を眺めつゝ走る、加藤、小西の諸豪も、恐らく地下に苦笑を禁じ得まい。

日暮れて京城驛を過ぐ、舊友田中武雄君わざ〳〵驛に出迎へらる、歸途再會を約してそのまま北行す。

十月四日

午前六時眠醒むれば早や新義州、安東稅關檢査に應ずる準備をする、やがて東洋一の鴨綠江鐵橋を渡る、安東驛、荷物檢査。

滿洲時間、時計を一時間引き戻す、新義州までの白衣は一變して黑衣又は藍衣となる。

プラットホームの景趣、日本兵、憲兵の鐵兜、腰の日本刀が軍國時代を思はせる、殖民地稼ぎの女軍七八名の一隊、ホームに降り立ち昇る朝日を拜んでるのが忙しい、聞けば男子の入滿者は志を得ずして引き返すものも可なりあるが、娘子軍は一度入滿した者は又歸らざるとか、悲憐の感、外に滿洲人紳士、黑衣楚々たる滿洲婦人、高島田繪羽の羽織の日本美人、等々。

市街の家屋は朝鮮に比し、ずつと立派になつて、洋風建築の間に支那風煉瓦建瓦葺の家が見える。

汽車進むにつれ沿道の風光やゝ異色を帶ぶ、山高けれど樹なし、沿線畑地には人と豚と牛と馬とが和氣靄々として共存し共榮す、馬は小さく豚は黑い、右手やゝ遙かに日露戰跡九連城を見る、原野を五頭立て六頭立ての荷馬車が通る、道と川との區別無用、惡路はそのまゝ拋つて置いて、必要とならば牛馬の數を幾らでも增して車を進める處に、此の民族の自力生活の姿が



ある、人としての滿洲國人に漫ろ畏敬の念を增す。

鳳凰城驛、ホームに防砦塹壕見ゆ。此の邊最近匪賊跳梁最も多き由、雞冠山驛、矢張り防砦銃眼を具ふ、驛の電柱其他にポスターの曰く『Dawn from the East, Peace from Geneva』『Co-operate to make Geneva of East』かと思ふと又『打倒惡軍閥記念日』なんてのもある。

更に北に進めば、トンネル橋梁次ぎ次ぎに連らる、トンネル橋梁の側には石又は煉瓦積みの歩哨小屋がある。

處々に滿洲豪族の邸宅を見る、四圍城壁を廻らし、四隅には望樓を設け、銃眼を設備す、誠に堂々たるものだ。高粱畑漸く多くなつて來た、鮮人に依る水田も處々に見ゆ、楊柳亦多い、白樺の林見ゆ。

十時二十分連山關を過ぎると、車掌が來て『今この先きの舊下馬塘に匪賊が現れ、村民が避難中です、それで此の列車に先行して今裝甲列車が進發し、後から討伐隊が參るとのことです、若し銃聲がしましたら頭を伏せて下さい』、そろ〳〵滿洲の臭ひがして來た、車窓から避難民の姿が見える、子を抱へ馬を曳き荷物を負ひ蹌踉と逃げて來る、汽車停る、巡警の曰く『今舊下

馬塘に四百の匪賊が居るので討伐中です』、汽車下馬塘驛に着く、避難民續々と集まつて來る、下馬塘驛の巡警は云ふ

『これから約二里半の處へ匪賊が千名位現はれました、今裝甲列車が次の驛まで進みました、匪賊にも掠奪隊、襲撃隊、殺戮隊などの分擔があります、此の地方は今夜無事に過ぎればもう安心です、當方の兵力は十分の一あれば討伐出來ます、以前は大抵夜か曉方かに出たものですが、近頃は圖々しくなつて晝間でも出て來ます。』

下馬塘を出でゝ暫く行く、沿線に吾が守備隊の將兵機關銃を据へ應戰準備中なるが見ゆ、感謝敬仰の念深し。

橋頭驛、吾が將兵を滿載せる軍用列車とすり換ふ、ホームに日本の學童二三百手に手に日の丸の國旗を打ち振つて之を歡迎す、涙ぐまし、驛舍の前に鹿砦鐵條網の作られたのが見える。

沿線至る處、日露戰役の戰跡、皇軍奮戰の跡、感いとゞ深し。

沙河戰跡を眺めつゝ奉天に近づく、山漸く盡き、平原遠く開く、愈々本當の滿洲に來た氣がする、十三時やゝ過ぎ奉天安着。



奉天驛より大星ホテルに入る、一休みして滿鐵公署長栗野俊一氏を訪ひ、奉天及附邊の視察順序を聞く、先づ舊張學良邸を視る、滿洲王の邸宅としては規模狹少、風格伴はず、さてはこんなケチ臭ひ家に住んで居るから、到々王様に成り損ねて、今北平の空に王様ルンペンの儚ない生活を送るやうになつたのだな、と頷く、庭前に山砦様の築石あり、父作霖馬賊より身を起し遂に滿洲王となつたが、昔戀しい銀座の柳と云ふ譯で、馬賊時代の山砦から石を運び、わざわざ日本の庭師を呼んで、之を作らせたのだそうだ、第一夫人の控家を見る、インチキな安建物、南大門は神宮繪畫館の大山將軍奉天入城の圖とそつくり同じ、吉順絲房は奉天の三越に當るものであるが、余り感服せず、轉じて忠靈塔、奉天神社に參拜、國威國力の有難さを感銘して宿に歸る。

奉天市街の瞥見、驛前は堂々たる歐風都市、ペーブメントあれども風吹けば黄塵直に萬丈、洋車（人力車）の外に馬車（マーチョ）ブラブラ往來を流す、滿洲國人紛然雜然、土人の町は呆れる程汚ない。

夜栗野氏の招宴に行く、場所は城内の明湖春、張作霖、楊宇廷等の恩顧深き純粹支邦料理、

料理の名はとても六ケ敷いので忘れたが、味は素晴らしく美味かつたので忘れ兼ねる、滿洲藝者三人來る、その歌木遣音頭にさも似たり、男一人胡弓をひく、突拍子な金屬性の高音をキーキーやるので、これには參つた。

歸りに奉天の銀座春日町通に出る、宮崎君と二人で馬車に乘る、十錢、馬はミイラのやう、車もミイラのやう、堅くて尻が痛い、馭者臺の傍にバケツ一つ、馬の食器だ、馬も車臺も馭者もすさまじく汚ない、乘るには乘つたが、言葉は一向分らず、どつちへ行つたら宿へ歸れるのか無見當、關はねえ、あつちへ行け、そつちへ行けと飛ばせて居たら、突然偶然宿の前へ出た、オーイこゝだと呶鳴つて見たがさつぱり通じない、馭者の尻を小突きたいが、乞食よりまだ汚ないので、手が出せず、オーイオーイと足踏み鳴らしてやつと止めた、汗をかいた。

カフェーを一寸覗いて見た、酒を一杯飲んで出て來ると、後から支那のボーイが追ひかけて來て『箱々……持つて來たらう』と來た、奉天に來ていきなり〇〇〇と間違へられて眼を白黑。



**十月五日**

十時領事館訪問、**川越大使館參事官**(全權隨員)、**林出二等書記官**其他と對面、要領『綿絲輸入關稅問題、上海の業者の陳情あり、或る期間免除を希望す、中々面倒、安東地方の木材に付ても二重課稅の問題あり。

間島の問題、最早大したことなし。

日露の關係は此の際衝突の危險は先づなきものと思はる。

滿洲國の版圖、張學良が北平に頑張り居る限り、熱河、コロンバイル方面の境界は明かとならず。

無計畫入滿者の結末、滿洲先住者の處へは食客多く閉口の態、商賣は事件の前後に依り異らず、移住は武裝團體移住ならば可能なり、何としても治安維持が最も大切、滿洲の繁昌は大豆の繁昌、これが盛にならなければ滿洲は榮えず、大豆は日本へ來るのは粕、いゝ時は日本へ丈で年額一億圓を越ゆ、諸外國へは、油の原料、工業原料、人造バターの原料(獨乙)として大豆のまゝ輸出、高粱は大部分は土地住民の食料、最近は日本人も麥と同じやうに食用

に供す。

滿洲の將來を如何にするや、根本方針が未だ決らず、大體は日本の製品を成るべく入れるやうにする、或る程度までは日本の資本を滿洲に入れることも必要、但しこれは抽象論、日本の經濟を壓迫せざる程度。

吉會鐵道の經濟的價値、木材搬出、終點は清津か羅津か、清津は小さい、且つ水深く防波工事困難、吉會線完成して距離は大連へよりも百里位短縮か、但し大連を如何程壓迫するかは問題、吉會線は勾配多く、この勾配を避けんとすれば、距離遠くなる、果して大連が威やかされるかは疑問、且つ敦賀までは可なりとして、あれより鐵道で大阪へ行くのが大變。

水田は問題、無暗に金をかけて水田を作るは不可、滿洲人と競爭出來ればいゝが、それは到底不可能、然らば稻を作るは考へもの、日本の移民が自分の食べる丈の米を作るのは可ならん。

然し日本の移民は余程問題、不安な氣候の惡い土地に、日本移民を求むるは無理、日本の過剩人口を滿洲にて解決するは不可能に近い。



鐵、輕金屬、製油、石炭等皆研究の價値あり。

果樹園の如き特殊の農業は日本人によし、綿花、これは問題、研究を要す、これが出來れば非常にいゝ、牧畜も疑問。』

次いで十一時滿鐵の宇佐美氏に面談。

『滿洲里とは未だ一向連絡取れず、ロシヤを通じてもいゝ連絡なし、特務機關、滿鐵の主要書類押收されしや否や不明なり、公主嶺の農事試驗場は視察の要あり、羊毛は餘程確信がついた、製鋼所は按山に決つたらし。

ロシヤはどうしても不可侵條約を望むらし、結局ロシヤに對しては、何時でも○○が出來る、又何時でも手を握れる、と云ふことが必要ならん、石油の協定は歐露の問題。

滿鐵は滿洲里の附近に石油を發見した、調査する心算であつたが、今度の滿洲里事變と且つ結氷期が近づいたので延期、尙ほ石油は熱河が有望、撫順のオイルシエールは經濟上の問題、必要の際には出來ぬことはない、熱河のは打開と云ふ湖の畔にあり、ロシヤ人が先づ手をつけた。

北滿には白金なし、露領にもなし、金鑛は濱海沿線？　にはあり。

滿洲國官吏其他滿洲に働く人間は、要するに質のいゝ者を入るべし。

鐵道は從來借款關係のあつた鐵道丈は事變前と同じく滿鐵より人をし派て支配す、其他の鐵道は滿洲國鐵道（齊克線、打通線等）として滿洲國に於て直轄す、奉山鐵道、濱海鐵道、吉會鐵道、呼海鐵道、洮昂鐵道（工事請負鐵道）には顧問を入る。』

正午武藤全權の招宴に列す。

出席者、（主人側）武藤全權、小磯參謀長、岡村參謀副長、板垣少將、川越大使館參事官、齋藤顧問、鈴木顧問、喜多大佐其他幕僚及書記官。

（客）同行代議士五人。

**武藤全權**挨拶要旨

『こゝに滿洲國正式承認直後に諸君を迎ふるは時期最も適當である、今や建國創業の際であり、當方に諸事不行屆の點が多いのは遺憾であるが、各方面を充分視察せられて、國政審議



に貢献せられんことを望む。』

尙ほ全權の談片、

『滿洲國成立に付き良民（眞面目にして善良なる人民）は衷心之を歡迎して居る、一般蒙昧の者は元より問題外である、歡迎しない者は從來の搾取階級と掠奪階級と丈である。

將來北滿が經濟上の中心となる時期があるかも知れぬ、然しこゝ當分は奉天が中心であらう。』

**齋藤**顧問の意見、

『滿洲及日本の行詰りの將來を救ふものは滿洲に於ける左の四大工業だと思ふ、タール工業、油脂工業、鹽工業及鐵工業、滿洲を視察に來て高粱許り見て歸るのは無意味だ、又日本內地に居る者も右の四大工業にアダプトする內地事業の發展を考ふべきだ。

更に日本は半分（裏日本）が死んで居る、何故日本海を活用せぬか、北滿との聯絡を緊密にせよ、日本海々港の築港など騷いで居る時期でなし、どこからでも小船を出して充分活躍せよ、日本海をして眞の日本の海 Sea of Japan たらしめよ、吉會線の開通を眞に意義あら

しむること必要なり。

國際聯盟のリツトン報告に付き、日本が法律的立場を採つて、理非を爭はんとするのは、策の得たるものではない、何となれば聯盟はどうかして本問題を法律問題にしやうと努力して居るのであるから、此際若し日本が法律論的立場を取つて、聯盟と曲直を爭ふならば、正しく彼等の罠に陷るものである、日本としては飽くまで、過去の歴史と現在の事實とに重點を置いて、吾が正當なる立場を主張すべきである。』

午後大星ホテルから大和ホテルに引越す、北陵見物に出掛ける、道は元張學良の別莊行の專用道路、處々に二尺置き位に二尺大の角穴を横列に掘つて、人間なり牛馬なりで引いた車が通らうとすると、車か人馬かどつちかが落ち込む樣に出來てる、車輪を穴に落すまいとすれば人馬が落ちる、人馬が落ちまいとすれば車輪が落ちる、と云ふ寸法、うまく考へたものだ、それで學良の自動車丈は悠々と通る、尤も誰の自動車でも通れる譯だが、當時奉天では一般庶民は自動車などに乘つて歩かなかつたのだ、北陵に詣づ、日光廟程巧緻ではないが又別種の趣き、低徊之を久しうす、ラマ寺に詣づ、陰陽佛を祭る、題して天地渡化と云ふ、名句だ、お賽錢を



せしめられまいとして寺男二人が鍵を別々に持ち、お開帳にはその二つの鍵がなければ開かぬ樣になつてるのは滿洲式珍案だ、途に舊東北大學校庭を過ぐ、學良時代排日の策源地、今は臨時兵舍となり二三日前より某混成旅團の宿舍に當てらる、ありし日の大學教授等の舍宅、寂しく閉鎖されて浮世の變轉を語る。

午後五時夕陽正に西に沒せんとす、眞紅、あゝこれぞ『赤い夕陽の滿洲…』だ、自動車の走るに從ひ砂塵濛々眼口を襲ふ、北大營を見る、昨年秋滿洲事變勃發卽夜の激戰地、唯二人の戰死者、新國伍長、增田上等兵の墓前に詣つ、そゞろ當夜奮戰の樣を想起し、寂しく眠る忠魂に對して感慨無量、手向草三首いと粗末なる板片に記され靈前に捧げあり。

亡き友に手向の花と思へども
　　綠だになき野邊ぞ悲しき』

ますら夫のいさほは高し新國の
　　いしづえ固くゆるがざるらむ』

尊くも護國の神と鎭ませし

み靈拜しぬ雪のひろはら』

木の香尙ほ新らしき碑前に瞑目すれば、涙おのづと湧き來りて止め敢へず。

歸らんとすれば筋骨逞ましき日本青年二十餘名、一日の農事を終つて安らかに家路に急ぐに遇ふ、見れば北大營の練兵場は已に農場と變つて居る、聞けば茨城縣友部の農學校出の青年とかや、青年よ、希くば滿洲開發の先驅者たるを忘るゝ勿れ。

黃昏れ道を自動車を走らす、道々に公安局巡警多數、鐵砲肩にと云ふと如何にも嚴めしそうだが、誠に以てお粗末な木綿の軍服で（後に三宅中將の話を聞いたのであるが、こゝの人に立派な軍服や鐵砲を持たせると、賣つて仕舞ふそうだ）、心無しに右と左に手を上げ下げして居る、こんなのに比べると日本の兵隊は實に雄々しく立派である、その姿勢を見よ、その服裝を見よ、その動作を見よ、最後にその生々と輝ける眼を見よ。

道の兩側を人力車や自轉車が一列縱隊に並んで行く、よく見ると皆細い紐で珠々繋ぎになつて居る、規則違反で引かれて行くのだそうな、呑氣な圖だ。

洋車（ヤンチョ人力車）に乘つて見る、日本の人力車に比べて、箆棒に梶棒が長いのと、座



席が低いのが特色、汚ないことは云ふだけ野暮、而かも車夫の服裝は千差萬別、靴をはいて菅笠の者、ゴム足袋で中折れ帽の者、いやどうも誠に珍、乘つて車を引き出すと、客の頭と車夫の頭の高さが同一、佐藤、宮崎、森、岡本、何れも無鐵砲の氣短連中が、如何にも恐縮そうに、退窟そうに、納まつてる恰好は是非寫眞に撮つて置きたかつた。

服裝と人種との間に如何なる關係があるか分らぬが、朝鮮人の白に對して滿洲人は概ね黑と藍とである、殊に日本人と違ふのは色に於て男女が共通であることだ、日本人は男の黑つぽいのに對して、女は華やかな美しい色彩と模樣を持つてゐる、利用質實の點から云へば彼に一日の長ありと謂ふべしか。

**十月六日**　朝六時半奉天發撫順に行く。

**久保事務次長の說明要旨**

『元來此の撫順は要害の地だ、北には渾河を距てゝ山、南方も又山地がある、たゞこゝは發電所があり、奉天、遼陽、開原方面に送電する重要地點である關係上、學良よりの懸賞地であり、發電所破壞は賞金五萬元なりとの由、迷惑至極の話です。

アルミニューム工業は相當可能性あり、鐵は朝鮮の茂山から按山へ連り一度沈んで遼河の西より山海關にて亦表面に現はれて居る、朝鮮の北から間島附近渾州にかけて金がある、但し文明の企業として成立するや疑問なり、私の金鑛開發の意見としては、黑龍江方面で大規模にやるのは、やつて見ねば分らぬ、飛行機があるから連絡はやさしくはなつたが、冬は途方もなく凍る故、機械を使ふことが出來ぬ、又警備の點に於ても、八百人の人が働くには百人の人が鐵砲を持たねばならず、と云ふ譯で、まだ分らぬが、小さい產金は方々にある、此の近所にもある、小さいやり方、今アメリカで流行して居るアマルガメーション、これは資本金二萬ドル位で携帶用の簡單な設備をすることが出來る、滿洲人など之で食つてる、簡單にやれば儲かりそうだ、然し濡れ手で粟を摑むやうなうまい事は却々あるものでない、要は人の問題だ、夜の眼も寢ずに働くやうな人がなければうまく行かぬ。



オイルシエール工業、撫順炭層の上に四百尺の厚さのオイルシエールがあると云ふが、最もいゝ岩で含油量は五・五パーセントに過ぎぬ、內地人は撫順のオイルシエール五十五億トン、油量がその五・五パーセントあると聞いて直ぐ約三億トンの油があると呑込むが、之れは間違ひだ、アメリカのコロラドやエストニヤ邊には、含油量二十パーセントのオイルシエールがあるが、これでさへ工業になつて居らぬ、撫順でオイルシエールが工業として實施され得るのは、露天堀の關係で、當然取り拂はれるオイルシエールを、發堀後の坑內に充塡する、其の途中で油を拔く必要からオイルを取る、こう云ふ一過程としてのみ成立して居る、又其の必要ある場合にのみ成立する、世間で思ふやうな夫程大したものではない、現在はバラフイン七千トン、ガソリン一千トン、重油四萬二千トン、硫安一萬二千トンを製造する程度である、現在の坑內堀二百五十萬トンではこれ以上オイルシエール工業を擴張出來ぬ、五百萬トンも坑內堀をやるときには、もう一つ設備を增すことが出來やう。

石炭採掘は世界第一、現在では年產六百萬トンであるが、將來これを一千萬トン（日本の全產額の三分の一）まで增額することは出來る、價格は露天堀の關係上世界最低である、最

大露天堀の今後の永續年限は二十五年、現在撫順の從業員日本人三千人、滿洲人二萬八千人、然し現在は當所の石炭は內地からは反對され、上海方面は駄目なので、中々つらい次第です。

滿洲國の鑛山は大抵滿洲國又は滿鐵に歸屬して居る故、將來の統制は可能である、宜しく生產を統制合理化して、國家百年の爲めに自然資源を失はぬやうにすることが肝要である。

更に人間資源がなければならぬ、幸に撫順には二十五年來養成した人間がある、これを各方面に分布せよ。』

撫順の町は人口十萬、豪勢なのは舊市街は町の下の石炭を堀り取つた爲めに二三米沈下したので、今の新市街を大正十三年以來建設したのだそうだ、舊い町の舍宅など堂々たる煉瓦造だが、空家のまゝ放つてある、東京住ひのケチな量見から見ると勿體なくて咽喉から手が出そうだ、炭鑛用鐵道全長百八十哩、此處から大連までの長さ、使用滿洲人の賃銀一日三十錢乃至七八十錢平均五十錢、彼等の生活は至極安定、喜んで其の業にいそしむ、在住日本人總數一萬八千人。

**木庭接待役**は云ふ、



『撫順炭田の炭層は厚さ六十尺より四百尺に及ぶが、次長の說に依れば、もと此の地方から支那大陸へ亘り一大森林があつた、此の大森林が地質學上の何かの力で、此處撫順の地に集積沈澱して、今日の石炭を造成した、西部の厚い層は主として樹幹の部分、東部の薄い層は概して樹葉の部分か、炭質を見るに西部はネバリ氣なく堅く、東部はネバリありタールを作るによし、そして推算によれば四百尺の炭層が出來る爲めには、少くとも樹木千三百尺以上の堆積を必要とすると、以て大自然の働きの如何に偉大であるかを想見出來やう。』

自動車を走せて、音に名高き露天堀を見る、東西一里、南北十餘町、たゞ見る、偉大なる黑船の底を渫へるが如きを、中に働く人蟻の如く、汽車蟲の如し。

**製油工場**を訪ふ。**長谷川工場長**は云ふ。

『オイルシエールは撫順炭層の上層全部を約四百尺の厚さを以て覆ふて居る、含油量は炭層を離るゝに從ひ、卽ち上層に及ぶに從ひ順次增加す、これに依り石炭に含有する油と何等關係なきこと明瞭なり、察するに動物質のものが堆積したものか、現にオイルシエールの層よりは大きな貝の化石發見さる。』

尙ほ工場長はオイルシエールの乾餾法に付き詳細なる說明をなせり、午後奉天に歸る。

夜、左記諸氏の招宴に列す。

奉天商工會議所會頭庵谷忱氏、奉天居留民團長野口多內氏、奉天取引所長平山萃氏、東亞勸業株式會社長向坊盛一郎氏、奉天取引所信託株式會社取締役金丸富八郎氏。

**平山氏**

『嘗て現內閣書記官長をして居る柴田氏が滿洲視察に來て、歸つた後手紙を寄こして、どうもよく分らぬと云ふて來たが、吾々長く居てもどうなるか分らぬのですから、分らぬと云ふのが本當だと思ふ。』

**野口氏**

『治安維持に就て、之が最大急務です、昨今では匪賊の被害は軍部發表以外は揭載禁止されて居るが、發表されぬことが澤山ある、非常に不安、附屬地から一歩も外へ出られぬ、何時これが肅正出來るか問題だ、見當がつかぬ、軍部に云へば、今後十年や十五年はかゝるかなあ、然し大體は今年中で出來る、少くとも滿鐵沿線から東の方は大體出來そうだと聞いて居る。



匪賊は學良當時のものと今日のとは違つて居る、其當時は十人か五人、遠くへ出れば直ぐ傳はる、早耳早馬だ、それが今日何故に通ぜざるか、それは滿洲國と諸機關との關係が、びつたりして居らぬからだ。

昔の匪賊は眞實の馬賊であつたが、今日のは何れかと云へば軍隊だ、眞崎參謀次長の云はれるやうに、今日日本は宣戰布告をして戰が出來ぬ、と云ふのは支那は表面宣戰布告をせずに排日抗日で騷ぎ、學良一派が蔭から糸を引いて居る、然し實際は立派な日支兩國の戰鬪だ。』

**平山氏**

『昔は匪賊三萬と稱せられた、郭松齡の當時は七萬あつた、今日は集團と散隊と半分づゝで郭松齡の時より多からう、匪賊の原因は四つある、學良系のもの、學良の威嚇に依るもの、食ふに困るもの、政治的のもの。』

**野口氏**

『現在では鴨綠江右岸八縣程の分は全部匪賊となつて居る、爲めに領事館の引上を要すると

は奇々怪々である、極最近討伐の豫定の由なるが、附屬地以外は今夜でも危險と云ふ狀態だ。』

**向坊氏**

『私は十四五日前北陵見物に行つた、ゴルフ場の側を通ると、煙草を吸つてた百姓らしいのが、通行人にピストルを向けて何か奪つて居た、これには驚いた、學良の策として今度は外國人を捕へるとの風說が立つたので、外國人は驚いてる、市中では日中は出ないが、場所に依つては市中でも夜は嫌がる、附屬地以外は危ない、附屬地でも危ない、こんなことは滿鐵創始以來初めてだ、切めて學良時代位治安維持を望む。

學良時代には軍隊を集團せしめ、幾ケ月目には給料を拂つて居た、軍券によつて生活を保證されて居た、處が北大營事變の結果、學良の軍隊は滿洲全土へ追ひ散らされた、其の中で目星しいのは段々に討伐される、すると大きいのが更に小さく分散する、結局こつちを追へばあつち、あつちを追へばこつち、と云ふので仕末がつかぬ、丁度蜂の巣を叩き潰した、代りの巣を作つてやらずぶつ潰した、そして家中へ蜂が散らばつたと云ふ狀態、蠅を追ふやうだと云ふ言葉があるが、蠅ではない、蜂だ、刺す、それに學良の使嗾も勿論あらう。



この蜂にやられて、農民は食へなくなる、女は强姦される。馬も食料も奪られる、これが結局馬賊になる、今丁度取入れ期になつたから、多少は歸つたかも知れぬが、馬賊を副業とするものが相當にある、この無數の蜂を三ケ師團や四ケ師團で、この廣大な地域に亘つて討伐が出來るか、出來ない、私は彼等を如何にして惹き付けるかが問題だと思ふ、これも中々六ケ敷しい、が要は兵隊や馬賊が食ふことが出來ればいゝのだ、そして鐵砲を取り上げることが必要だ、鐵砲を買ひ上げろと云ふ意見もあるが、買上げなどしたら、幾らでも無限に出て來て、仕末がつかぬ、そして彼等を食はす方法としては、道路工事なり、土木工事をやるのもいゝ。

亦現存兵力以上に、どうしても軍隊が增せぬなら、一部づゝ固めて行くべし、例へば先づ奉天省を固めるといふ調子に。』

**平山氏**

『學良時代には歲入七千萬圓の中六千萬圓を軍事費に使つて居た。』

**向坊氏**

『私は五ケ師團は入らぬ、いゝ加減な處で止めて置いて、あとは二ケ師團分の金で、奴等を片端から買つて仕舞へ、と云ふ意見だ。』

**平山氏**

『軍事費問題、これに付ては國民の考へ方が違つて居りはせぬか、これは滿洲國鐵道の費用では出來ぬ、然らば日本でそれ丈を後援し得るか、將來十年十五年に亘つて、この臨時事件費を負擔出來るか、國民のこれに對する誤りはないか、この費用丈は國民に出して貰はねば困る。』

**向坊氏**

『私は福岡だが、福岡に歸つて或る座談會で、滿洲大に開發すべしとの議論を吐いた處が、頭のいゝ青年から色々質問された、日清戰爭で日本は幾ら使つたか、まあこんなもの、日露戰爭では如何、これ位、日露戰爭で恩給退職其他軍隊に關聯する金は幾ら位使つたか、まあ全部で一寸百億、滿洲へ注ぎ込んだのが二十億、誰が負擔するか、兵隊は農民ではないか、然らば吾等は血稅を拂つてる、今度も又やつて居る、今度は年二億、十年間に二十億、これ



丈け金をかけて、滿洲は日本に何を與ふるか、吾等は自分の生活が大事だ、滿洲は日本に何を與へるか、滿洲を棄てゝ仕舞へ、と云ふ論鋒、これには參つた、私は結局農民に與ふるものは、移民以外にないと云ふた、この考へ方はマルキシズムの系統を引いたものは、皆持つて居る。』

**金丸氏**

『夫れは議論だ、今はもう乘り出した船だ、どこまでも行け、もう引けぬ。』

**平山氏**

『今日は生產者保獲の時代だ、そこに經濟統制の問題が起る、消費者を中心とすれば、物は安いほどいゝ。

滿洲國に於ては通貨は過去の問題だ、今度中央銀行が新國幣を出した、そして舊紙幣を新國幣に依つて標準をつけて交換することになつた、今日は之れで落付いて來た、けれども日本朝鮮の金と滿洲國の銀とは色々の問題が起る、今日は外國爲替で左右されて居る、爲替相場は支邦からのと、アメリカからのと、縱にも横にも馨いて來た。

爲替相場は今日どこまで引き返せばいゝか、購買平價から云へば三十三ドル位、それが今日當りは二十四ドル二十三ドル位で十ドル位違ふ、銀相場は色々問題、世界の大勢からは銀は問題、そこへ滿洲には近來、殆んど一の件で動かし得る問題がいくらでもある、どこにも貨幣を人爲的に動かす材料がある、昨年の高いときは日本の一圓が向ふの三十四五錢で買へたことがあり、今日では金對新國幣は九十二錢が向ふの一圓位になる。

金本位制、これは容易でない、支那貨幣の根本的本質は『物で銀を買ふ』にあつて『銀で物を買ふ』のではない。

新國幣の引換へは二ケ年間である、在來主なる貨幣の流通高は一億四五千萬圓、其の十五種許りに標準が出來て、この標準に依り引換へる。

問題は、政府發行の紙幣なるが故に、赤字が出れば、余計に發行しはせぬかと云ふ心配の點にあり。』

**庵谷氏**

『從來滿洲には、奉天に東三省官銀號(元の奉天官銀號)、邊業銀行、吉林に永衡官銀號、ハルビンに黑龍江省官銀號があり、之が金融の母體を爲す、外に中國銀行及交通銀行の紙幣も流通して居たが、之は中國の銀行で全然別物だ、邊業銀行は張家の銀行だ。

所謂奉天票と云ふものは東三省官銀號、邊業銀行、中國銀行、交通銀行が各々發行したもので大洋と小洋との二種がある、東三省官銀號及邊業銀行は財政の紊亂と第一奉直、第二奉直、廓松齡の反亂等で盛にインフレーションを行つたので不換紙幣が增加した、吉林の永衡官銀號は吊文票を出してる、之は明錢を本位とし、之に代る札を官帖と云ふ、ハルビンでは黑龍江省官銀號、東三省官銀號、中國銀行、交通銀行が哈大洋を發行すると云ふ狀態にあつた、之を統一した滿洲中央銀行が出來た(東三省官銀號、邊業銀行、永衡官銀號、黑龍江省官銀號の四つを統一した)中央銀行の兌換準備金、銀行の資產は、中國交通を除く他の四銀行にあつた金、銀などが八千萬元あり、然し此の額は時に變化する、今は七千二三百萬元あり、以上舊學良時代に發行したるもの全部合計十四五億もあつた、これ等のものは向ふ二ケ年間に一定の比率を以て中央銀行券と引換へることになつた。

中央銀行は寄合世帶で、總裁は吉林の財政廳長榮厚、副總裁山成喬六(元臺銀副總裁)理

事鷲尾磯一（正金）、同武安福男（鮮銀）、同五十嵐氏（滿鐵）及滿洲國側より理事三名と云ふことになつて居る。

尙ほ奉天吉林黑龍江の三省に存在する支店は百四十余ある。

以上が中央銀行の大要である。

**向坊氏**

『移民問題は六ヶ敷い、從來は大體農業移民を考へて居なかつた、滿鐵其他の機關は高等移民、鐵道資源開發の移民に全力を擧げた、貿易關係――資本移民、資本に依つて經濟的に發展しやうとした、僅かに大正四年福島安正氏が、金州に山口縣の移民十七八名を入れて、先づ水田をやらそうとした、處が水がない、色々苦心してやつて居る中に段々行きつまる、此の二三年前からやつと水田が出來た、然しもう此のときは借金が山のやう、結局何とか助けてやらなければ駄目、年々の計算はないと云ふ狀態、一般にはあれは失敗だと云ふことになつて居る。

次に滿鐵が考へた、滿鐵には附屬地がある、これを利用して何とか移民したい、それには



分る者をと云ふので、鐵道守備隊の退役兵を使つた、初めは非常な興味を持てやつた、段々色々な原因で止めた、今では二十何名初めたのが七八戸になつて居る、相川村がそれである、止めた原因は病氣のもあるし、又は眞面目にやらうとしたが、何時滿鐵に土地を取られるか分らぬと云ふのもある、止めずに眞面目にやつた者は皆いゝ、中には自分の土地を他に貸して、外の仕事をした者もあるが、之れは矢張り失敗した、之れも一概に不成功とは云へぬ、眞面目な人は成功して居る、金州のときも同じだ、眞面目な連中はうまく行つてる。

外に山本条太郎氏が總裁のとき、私は業務課長をして居たが、滿洲の農業は如何かと聞かれ、滿鐵を離れれば仕事は出來ぬと答へた處、そんなら日本人の手で本氣にやつたことはないのか、と云ふから、農事試驗場は試驗許りやつてると答へた、それは大問題だ、どうしても二三十年間は農業だと云ふので、その時滿鐵農務課で松岡氏の手許に案を出し、何とかやつて見やうと云ふので、總裁が思ひ切つて犧牲とする心算で、五百萬圓を出して會社を作らせた、大連農事會社がそれである、この會社は關東州に土地を買ひ、出來て二三年になり、移民を取扱ふこと三回になるが、まだ成績が上るまでに行かぬ、地面が高いものについて居

るので、ソロバンが悪く、そこで失敗だ失敗だと云はれて居る。

私の會社が二三回計畫したが止めた、可能不可能は議論がある、處で今度は軍が出て來た、日露戰爭で獲得した權益を擁護する爲めに、再び今日戰爭をすると云ふのは、これは政策の誤りである、滿洲在住日本人二十萬人の內、働く者は其の半分、殘り半分は家族、これは滿鐵社員で馘られれば內地に歸る、官吏も止めれば內地へ歸る、商人も失敗すれば歸る、滿洲に居付かうと云ふものはない、工業方面にしても人間を植え付けるには役立たず、矢張り地面に足の生へる者でなくてはいかぬ、滿洲の權益を永久に確保する心算ならば人間を植えろ、現在は斯ふ云ふ狀態なのだ、そこで軍部は大計畫をした、年々一萬戶を移住させる、十年に十萬戶（五十萬人）これは紙上のことであるが、兎に角、この種の熱を出すことに努めて、新聞紙又は在鄕軍人方面に宣傳させた、處が之は少し早手廻しであつた、やつて來ても入れる所がない、私は軍部や拓務省に水を打つて來た、今の時代に人間を入れるのは考へものだ、大體日本人を、あの氣候のいゝ處から、逆のコースを取つて、こゝに入れるのは中々大變だ、先づ第一の條件は土地があるか、三千萬町歩の地面があつて、其の半分が未墾地だとか何と



か云ふが、どこにあるか、土地を手に入れるのに個々に手に入れやうとすれば大變である、土地を買ひたがれば足もとを見られる、先づ國有地、逆產土地（舊學良政權の下に勝手に手に入れたもの）がいくらあるか、此の內を必要なるものを分けて貰ひ、之を移民に與へるやうにせねばなるまい、大體國有地官有地逆產土地が、いくらあるのか、それが分らぬ、この調査が一つ、そしてその內から移民へ分ける、それまでの間、移民を入れぬ譯には行かぬ、それは土地を買ひ逆產地を與へることにする、その爲めに特に注意して質のいゝものを入れることが必要だ、これは所謂パイオニーアで、先づ初めにいゝ先達を作れ、これを入れて置けば、後から悪いのが來ても、右へならへ！　でいゝ者にすることが出來る、夫迄に先達を早く作れ、拓務省はそんな悠長なことをしてたら、移民熱はどうなるんだと云つたが、私はそれに水をかけろと極說した、拓務省も成程面倒だね、面倒だからこそ今まで二十萬しか入らぬ、悪い者を國家が入れれば、どこまで國家が負ンぶされるか分らぬ、そこで在鄕軍人會より『滿洲は、目下交戰中だから、移民策確立するまで待て』と云ふ通牒を出して貰ふた、土地にしても千五百萬町歩の未墾地があると云ふが、誰も分らぬ、この土地がどこにどう云ふ

風にある地面だかよく考へろ、北の方にあると云ふ、何故に現住三千萬民衆が、之を棄てゝ置くかを考へて見よ、成程餘つた地面はある、然しソロバンに當てれば駄目の地面だ。

それから新國家の國有地が少ないとの理由は、滿洲の地を拂下げる、役人が拂下げる、鐵道を引く前に皆役人が拂下げる、兎に角大抵は拂下げ濟である、今地主がないと思ふても、さあやると云へば、地券を出して來る、土地が中々安心して買へぬ、先づ新國家の手に入れて、新國家から渡して貰へ。

もう一つは日本の農業は滿洲の農業とは違ふ、日本の百姓は水田を耕す外、色々の副業が多い、滿洲では先づ耕作期間が短い（奉天百二十日、新京百五日、ハルビン百日以下）、寒國農業は狹い、早作を作る必要がある、寒いから農業の巾が狹くなる、仕事は夏丈なので品種が自ら制限される、五ケ月六ケ月働いて一年分食はふと云ふ勘定、副業も滿洲には成立たぬ、マーケットなく從てソロバン勘定惡くなる、それから農法が違ふ、滿洲は畜力農法、これは日本人の不得意とする處だ、又支那人よりも生活費が高い、風呂にも入りたい、新聞も讀み度い、子供は學校にやり度い、と云ふ風に何事も金錢經濟で行く、同時に之等の者が要



するにうまく育つと云ふには、その土地に居付くと云ふことが肝要だ、處がこれが問題だ、日本では山川草木如何にも愉快、氣候は非常にウエッドだ、滿洲は木はなし、水はなし、川はなし、鳥も歌はず、花も咲かず、人間住めと云ふても、永年我慢が出來るものでない、それも考へる必要がある。

もう一つ體質、これが滿洲にどれ丈アダプト出來るか、子供も生れやう、妻君の身體が保つか、現に脚氣を起してるものもあり、風土病たる猖紅熱、赤痢、これに堪へ得るか、これが相當心配だ、假りに一人二百圓の利益があつても、妻が病氣をすれば何にもならぬ、衞生上の問題も調査を要す、困難は多い、それを征服して日本人が鄕土を建設するは非常な努力を要する。

もう一つ、日本人の居る內地が近い、ブラジルは日本から何千里、一度行けば否應なし、こつちはそうは行かぬ、滿鐵沿線には二十萬の同胞がウロウロして居る、あそこへ行けば何とか出來やうと云ふ了見、これが恐ろしい、だと云ふてまさか興安嶺の向側にもやれない、二十萬の文化生活、ジャズ、これが困る、色々な方法を講じ、總ゆる研究をせよ、水田少な

く畑地で行かねばならぬ、皆内地と事情が違ふ、こゝに此際大量移民を入るゝは困難である、先づ試驗をしつかりやれ、バイオニーヤを入れる爲めに、南滿北滿に亘り、タバコ、麥、何でもよく試驗せよ、そしていゝのを粒撰りして、二三年の中に二千なり三千なりを植え付ける、これで大體の策が決まる、こゝに初めて新國家から土地を求めて大移民を爲し得る。

先程出たから云ふが、滿洲の農民が米を作つてはいかぬと云ふ問題、これは朝鮮に懲りてはいかぬ、少くとも四五年前までは米不足で騒いだぢやないか、移民の仕事は五十年百年の先のことを考へねばならぬ、少くとも移民を植え付けると云ふ大問題だ、私の見る處では滿洲には水田三十萬町歩（現在十萬町歩あり）出來れば結構だと思ふ、それ丈出來るには少くとも二十年はかゝる、二十年かゝつて三百萬石、それ位のものは食ふことになる、安いものを作れば高粱と對抗して食つてもいゝ、何もそう心配する必要はない、現に日本だつて三百萬石位輸入してるじやないか、且つ滿洲の特色として、粃のまゝの貯藏なら三年位は出來る、而かも野積で出來る、枕木を置いて屋根を乘せる、その野積が日本の米のアヂヤスメントに必要ぢやないか、よく考へて貰ひたい、米と云ふ問題にそんな重要性はない、且つ放つて置



いても朝鮮人は作ります、米を作る爲めに金をかけると考へずに、移民の爲めに金をかけろ、容易の處から手を付けることが肝要だ。』

**十月七日**

八時半奉天發公主嶺に向ふ、珍らしく雨降る、車中デスクの準備あること朝鮮鐵道に同じ。盛に内地へ通信を書く、昌斗驛にカムフラーヂしたる軍用列軍、土囊を用意したる貨車、機關銃等物々し、聞けば此の附近毎夜匪賊出沒する由。

公主嶺驛に着き農事試驗場を訪ふ。

場長**中本保三氏**。

『滿洲の地勢、東半部は良い、西半部はソーダ及砂地となり居れり、西には大興安嶺、北には小興安嶺、東は長白山脈、南は？山々脈で圍まれ、中が一大平原をなして居る、其内既耕地千五百萬町歩、未墾地千七百萬町歩、森林地三千五百萬町歩、放牧地（西部）二百五十萬

町歩、劣等地二千五百萬町歩で、大體一億一千五百萬町歩である。

森林地帶の木材約五十億石、年々五百萬石を伐採する、約千年分あり、今後は造林の要あらん、殊に蒙古地帶に造林し度し、之れに依り氣候自然に緩和し、農業も從つて發展せん。

平原地帶では大豆年產一千萬石、粟二千八百萬石、高粱二千七百萬石、外に小麥が吉林より東北へかけて一千二百萬石、唐黍が山岳地帶に一千二百萬石、敦化、海龍には煙草產すれども品質惡し、南部には果樹（林檎、梨子）栽培三千町歩。

綿花の栽培は熊岳城、關東州、金州地方、今は陸地綿？の奬勵に努む、陸地綿成績よし、奉天以西山海關方面へ普及の豫定、研究、奬勵に努めつゝあり。

水稻、これは問題、これは鮮人が主に作るが、南方では滿洲人がやつて居る、安東の近く、五龍背、熊岳城等で出來る、種類は南部には山形縣の種類、中部は朝鮮種、公主嶺より北方は青森縣のもの、吉林及山西地方は北海道種、年額百五十萬石、耕地面積十萬町歩、この邊一反當り一石五斗乃至三石、南部地方は一反歩五石とれる。

陸稻、年產百七十萬石、長春及其附邊並に南よりもチョイチョイ出る、乾くから滿洲とし



てはよくないが、歷史が古い故、馴れて居る。

水稻に付て滿洲と日本との關係、私の考へでは將來百萬町歩になる、勿論それは徐々に開拓される、日本移民及之について他の移民も來る、最近は支那の上流も米食が段々盛になつて來た、故に心配の必要なし、無理に奬勵しなければ問題はないと思ふ。

蓄產、牛二百五十萬、馬三百萬、羊四百萬あり、豚は八百萬ありと推せらる。

第一が羊、之を改良して一頭六ポンドの羊毛を得るとしても、日本の總輸入量の三十パーセントしか補給出來ぬ、更に夫以上奬勵せんとすれば、他の農業の副業としてやる外なし、從來滿洲では毛よりも肉を重んじて居た。

降雨量、西北に行くに從つて少なし、公主嶺は日本の最少量の半分なり、西北に行くに從つて更に少なし、然し今年は雨量が多かつた。

土地は窒素分少なし、加里、燐酸多し、故に窒素を補へば何でも出來る。

土地はいくら堀つても土だ、長春では千尺堀つても土である。

亞麻、纖維工業が起れば出來る、亞麻油はハイカラ住宅に用ゐられる。

高粱（粳、糯）、粳が主である、粳は食用、釀造用、馬糧用に供せらる、又其の莖は燃料となり、家根葺に用ゐらる、高粱こそは滿洲人の生活の第一必需品である。

粟、之は目下奬勵して居る、其の實は食用釀造用となり、藁は馬糧となる。

小麥、北部は適地（敦化以北）、但し穗は小さい、たゞ滿洲の小麥はネバリが強いので、パンの製造によし、余り惡く云ふて貰ひ度なし。

羊毛、メリノー種ならば一年一頭八キロ、然るに蒙古在來種は一キロ半に過きず、之を交配せしめて一回種四キロ、二回種六キロ半まで漕ぎつけた。

甜菜、北方はよし、南方は惡し。

ホツプ、日本では年額百萬圓を輸入しつつあり、之は吉林の奥で相當出來る。

大麻子、此の油は飛行機のエンジンに用ゐらる、下劑用、大部分は滿洲より行く。

蘇子、この油は天麩羅に用ゐらる。

麻、吉林の奥から二千萬斤出る。

煙草、產地は吉林、短く葉は十一二枚しか出來ぬ、臭氣あり、辛し、アメリカ種に代へん



として居る。

當試驗場の區域五十町歩、蓄產の部百八十町歩、計二百三十町歩で此處の試驗をやつて居る、經費年額十三萬圓。

公主嶺は旅順の二百三高地と同じ高さ、此の附近が遼河と松花江の分水嶺をなして居る、分水嶺の高さ僅かに二百三十米、以て如何に平原なるかが分るであらう。

此の附近に見ゆる樹木は大抵白楊、柳、楡が主なるものだ。』

次いで畜產課長に面會す、

『先づ羊の研究に努めた、四百萬頭の羊ありと云ふが、毛粗し、主として蒙古人が飼育す、彼等は肉本位だ。

改良種を毛中心、肉中心、毛肉兼用に分ける心算、そこで佛國のメリノー、サウスタウン、シロツプを入れて交配せしむ。

先づ一番大事な毛の試驗をやつた、メリノーは綿毛許り、之と蒙古種とを一回交配せしめ

た結果は、粗毛が多少殘る、毛量は二倍半となる、更にもう一度二回交配をやつた處、一回種とメリノー種とが半數宛出た、この二回のメリノー種同志をかければ永久に之が續く（メンデルズムの法則通り）ことが明らかとなつた、行く〳〵は四百萬頭以上に增したし、試驗所は三ケ所あつた、內二ケ所は蒙古方面にあるが今閉鎖して居る、右の試驗の爲め十二年かかつた。

見込は今急には付かぬ、今日日本の輸入は年額一億ポンドであるが、これを滿洲から補ふのは困難である。

たゞ從來は個人的に普及に努めたが、今度は官が奬勵する、官民合同すればずつとよくなると思ふ。

困ることは蒙古人は智識が少ないのに、雜種は幼時弱い、そこで飼育が中々六ケ敷い、ここに苦心がある、從つて春に交配せしむれば育て易い。

當方は獸疫が多い、故に牧畜を專業とするのは危險性が多い、專業は獸疫豫防が出來た曉を待づへし、移民の副業としては豚、羊は有利である、幸に大豆は耕作地の三分の一を占めて居る、この大豆の粕が飼料としていゝ、將來四百萬頭全部を改良種に置き代へても、二千八百萬ポンドであつて、日本の需要の四分の一にしか當らぬ。



毛皮としての羊の研究、蒙古種にカラクール種をかけ合せて見た、一回雜種の中黑はいゝが白は駄目であつた、二回種は段々よくなつて來た、然しまだ判然分らぬ、三回雜種以上は相當よくなつて居る、色は樺色、白色等、いゝものは一枚三十圓位する。

豚、在來種七百五十萬頭あるが不恰好、これは支那人により入れられたもので蒙古人は關係せず、大、中、小の型あり、大型は二年位を要す、何れも腹下り肩頸痞せ巾なし、肉用として損なり、これをバークシヤー種のやうにしたい、これは元來南支那の豚が英國で改良されたものなので、寒さにも强い、この雜種を作る、一回、二回、二回以上はバークシヤー種と殆んど同じ、たゞ分らぬのはこの一旦よくなつたのが再び退化することなきやの問題である。

鷄、大骨雞、これは金州と安東縣とを結んだ以南の濕かい地方にある、卵は大きいのになると百二十グラムある、普通の卵の倍以上、味は普通のと同じ、たゞ黃味小さし、卵は大き

いが數は少ない、年額八十個位、中卵は年二百位は生む、之を多産性にしたいと思つてる。』

最後に畜産課長は豚のために其寃罪を辯じて曰く『豚を不潔動物とは誰人の暴言か、豚は非常に清潔を好む、飼育場に入れて置くと一定の個所にのみ排便し、決して自分の寢床に放便せず、牛馬等は皆放便しばなしなり。』

十七時公主嶺驛に引返す。

**驛長**曰く、

『驛は驛として停車場構内を防備す、この驛へも小銃二十挺、拳銃三挺あり、三週間以前農事試驗場使用人（滿洲人）二人拉致さる、大洋七千圓（金に換算して六千三百圓）を持ち來れと要求されて居る、まだ歸らぬ由、其後の消息不明なり、殺しはせぬらし、八月十七日にはこの隣驛の日本人二人拉致された、金をいくらかやつて歸つて來た。

公主嶺の日本人二千三百人、滿洲國人は約八千人。

日本人の拉致されたものは一日中歩かせられた、常に眼隱しをされて居た、歩くときと飯を食ふとき丈僅かに下部の方が見えるやうにされた丈、すつかり痛せて歸つて來た。



女子は余り拉致されぬ、女子では營口で英國婦人がやられた。

此の間、首切りがあつた、內地の押し切り、あれで首を切る、夫れは伊通縣の市街を馬賊が占領したので、附近の縣に對して應援を求めた、日本軍が來て爆擊をした、逃げる、途中で縣知事が馬賊を捕へた、調べて見たら元の使用人であつた、それでこれを處罰した。

この公主嶺でも昨年首四十七を獄門にさらした、中に女二人あつた。』

十七時五分、驛夫來りて告げて曰く、烏數萬現はると、一寸內地に見られぬ光景、雨珍しく降る。

十八時五十五分長春著、總務廳長代理、交通總長代理、領事其他の出迎を受け滿蒙旅館に投宿す、新都の第一印象『雜然たる活氣橫溢す』。

夜、大原萬千百君に會ふ、同君は一高帝大當時の同窓、長く神戸大阪に於て辯護士事務に從事す、滿洲國成立するや、逸早く長春に來り、在野法曹の第一人者として活躍、現に滿洲國中央銀行囑托たり、同君の如き人格識見卓拔なる士が民間人として活躍することは、日滿兩國の爲めに眞に慶賀に堪へざる處、切に自重自愛を祈つて十二時近く宿に引返す。

**十月八日**

朝九時、滿鐵地方事務所庶務主任小野寺兵右衞門氏に案內されて、先づ野戰病院を訪ふ、院長は云ふ、

『唯今は收容患者二十名に過ぎず、將來百四五十名收容の豫定、始めより總計すれば千五百名位治療した、目下病室增築中、事變勃發當時は非常に忙しかつた、主なる患者は凍傷患者なり、今は四洮線等により患者は南方へ送る故、此處は割合に少なし、凍傷患者はサイベリヤ出兵當時は治るには治つたが、足や指が無くなつた、今度はその當時の經驗から考へて、足や指を切斷することを極力避けて居る、脫落するまで待つと云ふ方針を採つて居る。』

次いで飛行場を見、南嶺戰跡を訪ふ、吾れに數十倍せる敵兵を追擊爆擊身を賭して完全に擊退したる勇猛無比の吾軍の行動が、眼に見えるやう、砲兵舍は燒け、障壁は崩る、これ丈の大仕事をよくも二個中隊位の兵でやつたものだと、驚嘆する許り、更に轉じて步兵舍練兵場の方へ步を移せば、彈丸雨飛の間を眞正面より突擊せる當時の勇戰苦鬪の樣、人間業とは思へぬ、敵兵舍の數米近く吾が戰死將兵の新らしき墓標、各々其戰死場所にポツリポツリと並び立つ、嗚呼、この寂しき北滿の野邊に、彼等の忠魂は永遠に眠れるか、御國の爲めに、吾等の爲めに、尊くも流したる彼等の血、吾等はこの尊き血を以て彩られたる滿洲をどうすればいゝのだ、斷じて離してはならぬ、生命をかけて、國をかけて、斷じて彼等の血潮を、死を無氣味に終らせてはならぬ、折りから天も此の忠魂を弔ふか、悲雨蕭條として到る、車を下りて倉本少佐の墓前に立ち、香華を捧げて總ての戰死將兵の靈前に額く、君を思ひ、國を思ひ、遺族を思ひ、涙滂沱として止め敢へず、低徊幾度、たゞ御靈の安かれとのみ念じつゝ去る。

今日はこゝ新京では、滿洲國承認祝賀の式がある、朝から滿洲國軍隊が樂隊先頭に步武堂々と市內を行進する、顏は餘程呑氣そうだが、足並はちやんと揃つて居る、遠くから見ると立派な軍隊だ、男女學生が手に手に日滿兩國旗を持つて行進する、雨が降るのに皆傘を持つて居らぬ、雨量の少ない土地だから傘などないのかも知れぬ、支那では兵隊でも傘を背負つて居ると聞いたが、あれは南支那のことで、滿洲は今や支那ではないのだから、傘を持たなくても苦情

を云ふべき筋合ではない、然し何にしても小さな女兒まで雨に濡らすのは可愛そうだ。

午後一時、溥儀執政に面謁す．秋田議長と電報交渉の結果、衆議院代表の資格に於て。

執政府は、元鹽稅處とかの建物、餘りいゝ建築ではない、先づ秘書處に誘かる、壁間に書あり、『閑人免在本室內』、いゝ文句だなと思ふ、係りの者數名室に居る、室の內側周圍には高い緣臺やうのものが並べてあり、其の上に毛布が厚く敷き並べてある、さては連中閑なときには此の緣臺の上に寢そべつて居るのだな、そんなら閑人免在本室內は自家撞着じやないか、と考へて居ると、どうぞこちらへと云ふので、細雨の中を頭を抱へながら奧の建物に入る．控室に入る、背の高い堂々たる滿洲國武官に會ふ、茫洋悠然として居るので滿洲國人かと思ふたら、日本人だ、執政府侍從武官陸軍中將工藤忠氏だ、代議士葉梨新五郎君が居た、そこで執政に奉呈する祝詞の件を相談する、葉梨君から中島諮議に打合をする、原文を出して見せる、これは少し簡單だ、それはいゝが書き方が少し粗末だと云ふ、尤もだ、何しろ、出かけるまでに後五分しかないと云ふとき、岡本君が宿の二階の疊の上で尻を逆立ちさせて書いたものだ、書上げて之でいゝと讀んで見たら、王道興起の起が脫けてると云ふ騷ぎ、流石勇敢な岡本君も書き直そ



うと云ふ、いゝじやないか形より誠心だ、と云ふことに衆議一決して起の字を傍に入れて持參したものだ、粗末なのは當り前だ、そこで後から丁寧に書いて引き換へることにして、一先づ之を奉呈することに決める。

軈て此方へと誘かれる、狹い階段を上つて行く、廊下の兩側に侍從見たやうな人が幾人も立つて會釋して居る、執政室に入る、室の大きさ四十疊位か、長方形、執政は稍々入口に近い處に立つて居られた、身長五尺五六寸位、瘠身、ロイド黑色眼鏡、ダブルカラー、薄茶鼠色の背廣服を着て、赤の單靴と云ふ容姿、總じて青年貴族の感、日本で云へば近衞公と云ふ處、諮議中島比他吉氏の通譯で左の祝詞を呈す。

祝　詞

滿洲國
建國ノ大業成リ衆庶嘻々トシテ業ヲ勵ム王道興起センコト期シテ俟ツヘシ

執政閣下ノ德澤洽被寔ニ盛觀タリ

大日本帝國衆議院議長秋田清敬テ祝詞ヲ呈ス

昭和七年十月八日

之に對し執政は左の意味の挨拶をされた。

『皆様が日本衆議院の代表として御出で下され、滿洲國成立に對し祝詞を賜はつたことは余の深く喜びとする所である、日本の衆議院は滿洲國承認を卒先決議された、これに依つて貴國は列國の群議を排し敢然として吾が國を承認して下さつた、余は王道主義に依り滿洲國三千萬民衆の幸福を計り、且つ日滿兩國の徹底的融合の實現を期せんとして居る、余が敢て執政として出馬したのは、此の二大使命を實現せんが爲めである、決して余一身の爲めではない、余一個の利害榮辱は元より眼中にない、たゞ余は年尙ほ若く才學もない、果して此の重大使命を達成し得るやを怖れて居る、さりながら一度執政となりたる以上、一命を賭しても此の大目的達成に邁進するの決意を持つて居る、皆様は御歸國の上は一般國民諸君に此の旨御傳へを乞ふ、亦衆議院議長にも宜敷御傳へを乞ふ、そして更に今後とも强力なる御援助と御厚志を賜はりたい。』

次いで各自執政と堅き握手を交はし辭去す、挨拶の音吐朗々、握手の力又極めて强い、新滿



洲國の前途洋々たるを感ず、控室の窓より執政起居室の屋根見ゆ、極めて簡にして素、建國創業の景趣。

次いで午後三時長春高等女學校に於ける滿洲國承認祝賀會に行く、先づ小六ケ敷い招待狀の文面を後學の爲め記錄して置かう。

拜啓者金風挹爽玉露滴秋仰日月之光華丹流桂子覩山河之壯麗采煥黃花欣逢友邦承認我國朝野騰歡同聲慶祝謹訂十月八日（陰曆九月九日重陽節）午後三時假西公園陸上運動場（雨天改爲頭道溝高等女學校）擧行慶祝宴會屆時務希臺駕早臨是幸耑此奉達順頌時祉

大同元年十月　日

新京特別市市長　金璧東謹具

何しろ日本が滿洲國を承認して呉れて、大に愉快だから御祝ひをするから來い、と云ふのらしい、美辭麗句を一々讀んでる暇はない、行つて見たら立派なコンクリート造りの女學校の講堂だ、滿洲國高官品川主計君の取計いで日本議員席と云ふ所に陣取る、後から貴族院の御歷々が來て眼を白黑させながら吾々の後方へ着席したのは氣の毒だつた、立食の宴で酒と折詰の肴

が出る、赤飯のないのが內地と違つて居る、市長金壁東、實業總長張燕卿、其他の祝賀挨拶又は演說があり、次に餘興に入つて支那奇術はよかつたが、次に內地の何處から來たか、巡業レヴュー團が現はれて、橫綱の子のやうな太つちよのガール許り、七八人出て來て低級な白粉と紅とを塗りたくつて、踊り出したのには恥しくて見て居られず、咄！　先進國の面汚し！

こゝに於て吾等一同旗を卷いて退却。

**十月九日**

吉林行の豫定だつたが、日曜なので折角行つても充分調査出來まいと云ふので中止、然し後で聞いたら貴族院の御連中は行つたのだそうだ、さては連中、吾々を出し拔いたな、大體貴族院の御連中は意氣地がない、昨日だつてそうだ、一昨夜吾々が此の長春に着くと、接待者側の方から斯う云ふ申出があつた、『今夜は貴族院の方々も到着されますが、就ては明日執政に御面謁され又南嶺其他の新戰跡を御覽になるのに、貴族院の方々と御一緒でよろしいでせうか、何



か御差支へがあれば御話し下さるやう』とのことであつた、吾々は勿論何等差支へはない、貴族院の諸公と一緒でよろしい、其の方が御案內の御手數も省けるでせうから、と答へた、處が後で貴族院の方々は一緒では困る、吾々は貴族院代表だ、政友會代表と一緒は困るとの話があつた、困るものなら、こつちも一緒になつてやらぬ、よろしいと云ふので、秋田議長宛電報で八日執政に面謁する、衆議院代表の資格に於て面謁し度し、御承認を乞ふ旨紹介してやつた、これに對し議長から、然るべく取計らはれ度し、との返電が八日正午過ぎに到着したのだ、さあ大變だと云ふので、大急ぎで祝辭を書いたから、昨日のやうな仕末になつたのだ、考へて見りや忙しい譯さ。

執政の面謁はそれでいゝとして、南嶺の戰跡を弔ふたり、吉林視察をするのに、資格も何もないじやないか、誠心籠めて勇士の靈を慰め、各地方の狀況を研究する、成るべく一緒になつて彼此研究題目を交換し合ふこそ國家の爲めだ、と吾々は考へる、そしたら森君曰く『お互に自分の人相をよく考へろよ、貴族院の殿樣から見れば、屹度ブルドツグ位に見えるぜ、まあ放つといてやれよ、お前なんさ、天〇君の仲間ぢやないか』、ようし、然らば吾等の旅行の內

容がどの位價値があるか、見て居ろ！。

宿にあつて盛に通信を書く。

午後一時參議**駒井德三氏**を訪ふ。

『滿洲國は中々大仕事です、差當り治安維持が第一です、政府及軍部はこれに力を注ぎ、この暮れ中遲くも來年初めまでに全部片付けて仕舞ひたいと思つてます、然し世間では匪賊だ馬賊だと騒ぐが、これは滿洲名物です、私は青年時代から滿洲に來て、あつちこつち旅行して人から屢々危ないからそんな處へ行くなと忠告されたが、たゞの一度も馬賊に出遇つたことがない、話が事實より大袈裟に響くのだ、此の間の奉天の襲擊にしてもそうだ、先方は宣傳の具に使ふ、それこつちに二十人出た、そらあつちに三十人出た、と云ふ風に混亂させる、新聞に出す、そしてこれを種にして張學良から金を貰ふ、だから私は平氣で田舍を歩く、何でもないのです、然るに此の宣傳に怯えて停車場に土囊を築く、鐵條網を張る、何の態だ、あれは守勢ぢやないか、從來滿鐵は土民が觸らぬことになつて居たのだ、これに觸つたら拳骨を食ふのだ、あれを防禦するなど云ふのは錯覺だ、あんなものは斷然止めて貰ひたい、そ



して若し鐵道を犯したら徹底的に懲らせ。

元來〇〇〇は非常に眞面目に働く、塵一つ誤魔化さぬ、こう云ふ狀態が四五年續く、そこですつかり信頼してるとバツとやる、銀行員等も長年忠實に働くので大に信頼する、そして大金を持たす、バツと逃げる、これは〇〇〇の性質です、少しも油斷のならぬ性質です、これを知らねば〇〇〇の統治は出來ぬ、〇〇〇〇を始めとしボーイに至るまが皆同じ、荒らく抑へるとか何とか云ふが、氣を許せば直ぐ引つくり返されるのだ。

移民問題、これは簡單には解決出來ぬ、初め福島安正の時、滿鐵附屬地にがら空きの處が七十萬坪あつたので、多少共滿洲に通じて居る者を入れろといふので、鐵道守備隊で滿期になつた者を、司令官に推薦して貰つて植え付けた、處が始めの四五年は眞面目に働いたが、何時の間にか夫等の者が半商賣人になつた、百姓と商賣とを双方やるからそれは儲かる、それを覺えた、それで女房子供を呼ぶ、風土病の猖紅熱にかゝつて子供が死ぬ、秋になつて計算すると百姓の畑ではソロバンが合はぬ、そこで同じ苦勞するなら故郷へ行かふと云ふことになる、これに支那人が付け込み支那人の中の力のあるのが、これは私の方へどうだと云ふ

交渉になつて皆引上げた、だから普通尋常では農業移民は成功出來ぬ。

たゞこれを成功せしむる二つの方法がある。

一は○○○を押へ付ける、內地では日本人が滿洲政府に入つて○○○○と云ふ、○○も實質的に○○○る、こうせねばこの○○○かぬ、內地ではどうも○○○は○○○が動かす、あれを○○したらどうかと云ふ、然し僕は○○○を知つてる丈にこうせねば仕事は出來ぬと思ふ、張作霖の時、本庄將軍は違ふが、其他の者は皆○の○○○を取つた、その結果はこんなになつたのではないか。

それが嫌なら實質的に○○○了へ、それがいかぬなら一度やらして見ろ、然しその○○は○○は負へぬ、同じことを繰り返へすに過ぎぬのだ。

○○○つゝ○○○る人物が必要だ、然しこれが嫌なら○○○○○○を引く。

餘り日本の新聞が書き過ぎる、移民は非常に金がかゝる、學校病院其他の設備をするとせば一戸當り少くとも三千圓乃至四千圓の金がかゝる、支那人をどかすことにすればもつと入る、而かも失敗に終つたらどうする。



そんな金があるならば日本內地で農民を救へ。

移民をするには別に學良から沒收した逆產土地に日滿合辨の開發會社を作ること、これは彼等に響かぬ、そして機械農業をやる、これは支那人には出來ぬ、結局日本人をその○○○入れろ、これなら儲からぬとも計算は立つ、下には支那人も使ふ、僅かな給料の支那人を使ふ、これならよし、然し支那人と一緒に鋤を持つて働けと云ふこと、これは出來ぬ、又○○○は困難、歷史上事實上之れは○○○。

二には、こゝの國防は條約に依り日本に任せられた、肥沃な土地が邊境にある、この邊境に屯田兵組織を作れ、そして現役から屯田兵に編入する、四年から六年位、若い元氣のある者が入る、半分兵隊、半分耕作、こうすれば直ぐに學校を作る必要なし、子の出來るまでには數年かゝる、其の間には相當力が出來て來る、これなら軍籍にあるのだから我儘を云つて歸ることは出來ぬ、且つ經費が節約出來る。

この二つの外には移民は出來ぬ。

要するに此の國を固めるためには○○○の血を入れる外なし、入つた○○○の國籍は○○

○○○を取つて○○○とする、其の子は又滿洲人、これが○○○と競爭するのだ。

もう一つ社會問題がある、こゝに二十萬の日本人が居る、子供を學校に入れやうとする、男の子は日本に歸りたがる、女は親が傍に居る故そうでもない、こゝで學校をすませる、處がこゝに勤める青年官吏などは、內地から嫁を貰ふ、すると此處に生れ此處に育つた女子のやり場にこまる、この女子を前に述べた屯田兵移民の配偶者に選べ。

前に述べた福島將軍の相川村では、亭主は半ズボンをはいて自轉車に乘り、女房はオベラバックを下げて外出すると云ふ狀態、これでは山東移民と競爭出來ぬのが當り前ぢやないか。

統制經濟の問題、これは斯う思ふ、○○と競爭になるやうなものは絕對に奬勵するな、すぐに衝突するやうなものはやつてはいかぬ、然し石炭の如きは滿鐵の株は誰が持つてるか、彼等はそれでも利益を得やう、亦國の方でも利益を得やう、そんな我儘は承認出來ぬ、たゞ筑後川の勞働者、これはどうする、これはこつちへ連れて來い、そしてこゝの勞働者と入れ換へろ、斯うして十圓の石炭が五圓となる、卽ち日本炭が安くなる、一面利益となる、大阪の事業家は非常に之を歡迎する、筑後を榮えしめて日本の心臟たる大阪を苦しむることはよ



くない、之に就いては各關係の寄合ひで統制經濟委員會を作れば、必ずうまく行く。

對支那の問題、これは支那を忘れて滿洲は解決出來ぬ、支那要人の眞の腹は別にある、彼等は○○○反對してるのだ、然し實質的には反對○○○、これに付ては○○に對し○○○○○をとりつゝある、張學良の立場はどうだ、馮玉祥其他が居るではないか、國民政府はどうだ、共產討伐に專心してるではないか、蔣介石は共產匪の討伐に成功すれば主權者になれる、廣東はあまり遠すぎる。

關稅は强制して取れ、關東州關稅も取れ、すると外務省でギヤンギヤン云ふ、無茶だと云ふ。○○すらそんなことを云ふ、何を云ふのか、紙の上の議論などするな、支那は二重課稅で弱つて居る、やれ、大連を○○○○の○○としたらどうなる、大連でジヤンク○○○○○○沿岸のどこへでも持つて行けるぢやないか、私は之を○○○○せる、大阪は必ず繁榮する、今の繁榮は北○○だ、これへ○○○をやれ、實は○○○○、それで大阪はよくなつて來た。

對露國の問題、今○をしてはいかぬ、ロシヤは國境を守る方針、滿洲はかまはぬ、滿洲國

には非常に好意を持つてる、今や事實上の承認も同樣だ、然し○○○○い、だから國境に兵力を集めて居る、今一番邪魔は○國と○國だ、○○○○○○○が出來るか、スラブと手を握れ、充實○○○○○○、不可侵○○○○○○○○、○○○はチベットへ○○、彼等は喜んで行きつゝある。

待つことは產業五ケ年計畫の完成を待つことにならぬかと云ふ意見があるが、それは○○の○○擴張の宣傳だ。ロシヤもそう世界を席捲出來ぬ、滿洲里にはロシヤは關係して居らぬ。

衞生に付ては醫者を田舍へ入れよ。

女教員を田舍へ入れよ、女が家庭教師に入ると、その家は日本に對し特殊な尊敬を持つやうになる、斯ふ云ふことを大に考へよ、それなしに單に武力許りでは彼等の心を捕へることは出來ぬ、カトリック僧は云ふ『日本の政策はいかぬ、ロシヤの沒落を見よ』と。

王道政治、民衆はどうすれば王道政治の恩澤に浴するか、支那人は間接稅は何とも思はぬが直接稅は嫌がる、政府から云へば僅か一千二三百萬圓の問題だが、個々の支那人から見れば大變な負擔だ、故に向ふ二年間直接稅の免除をやれ、これは非常に王化の聲を盛にする、



事實今年から眞實の金（カネ）が出るのだから向ふ二ケ年間負擔の免除をしてやれば、購買力が出て來る、この購買力は結局大阪に向ふのだ、日本の景氣がよくなる。』

宮崎君と二人で町の景物視察に出る、『男女時靴』と云ふ看板を見て、はアテ男女時靴とはうまく考へたものだ、コレハてつきり○○○に違ひない、念の爲め聞いて見やうと、店に入つて筆談で聞いたら、男女流行靴と云ふのだそうな、ハハーン。

平康里（ピンカンリー）を見る、彼等自らは名付けて何々書館と稱す、堂々たる名前だ、扉を排して入ると中央にホールがある、このホールの周圍が夫々、開盤子（カイパンツ）の居所になつて居る、圖體の大きなタコ入道が開盤子の數より多さうだ、宮崎君頻りに此の入道を怖がる、其の內に此のタコ入道が吃驚するやうな奇聲を擧げると、開盤子がぞろ〳〵一室に集つて來て顏見せをする、撰擇がすむとその室に行つてお茶を飲むと云ふ順序だ、汚なくて陰慘な面構への者が大部分だ、早々退却。

カフエーあれども既設諸機關に對抗するの力なきものの如し、小雨寂しく暗く降る。

夜六時より大原萬千百君の招宴に行く、同行代議士全部、場所は長春第一の支那料理賓宴樓。

**大原氏の意見要領、**

『國籍法の眼目、一人にても多く日本系滿洲國人を作れ、今の原案は官吏たる日本人にのみ官吏たる間、滿洲國人たる籍を與へんとす、斯くの如きは悔を百年の後に殘すものだ、當局者は此際世間體もあるからと云ふが、此の重大時期に於て何が世間體だ、もつと露骨なことを盛にやつてるではないか。

今は戸籍法もない現狀だ、此の際思ひ切つて百年の計を定むべしだ。

自分は〇〇の心をよく知つて居る、滿洲に小さな日本を作るな、ありのまゝの滿洲を育てよ、第一、稅金を免除せよ、第二、住民を匪賊より救へ、それで最大の幸福なのだ、やれ道路、それ學校、ほら病院、斯くして朝鮮はどうなつたか。

功を急ぐな、よく實情を視察研究せよ、現に國幣は極つた、然し中央銀行の札より哈大洋が流通してるではないか、漫漫的（マンマンデー）にやれ。

日本の立場を力强く押し通せ、同時に彼等にも敬意を以て接せよ、大方針を極めて後は彼



等の立場も考へてやれ。

滿洲國は貸すに時を以てし、之に渾身の努力を加へるならば、立派な國土になる、寒いと云ふがハルビンはあの寒地に人口四十萬の大都會が出來たではないか。

加ふるに資源はあり、土地は廣い、日本はどうしてあれ丈の富が出來たか、日本に何があるか、米と生絲丈ではないか、結局は生絲丈ではないか、その生絲も日本の財政上の見地よりすれば大したものではないのだ、それに比して滿洲が開拓されれば、大きくならざるを得ないではないか。』

**十月十日**

八時長春飛行場より出發、生れて初めての飛行機、七分の好奇に三分の不安、機の胴體に乘り込む、發動機の爆音、ペロペラーの回轉、機は悠々滑走を始む、やがて猛然驀進するよと見る間に、機は何時の間にか飛揚、車輪空中に回轉を止むる頃は二百米の上空、たゞビビビ……

と云ふ音響丈、何等の抵抗動搖なし、齋藤恒中將偶々同乘、隣席にありて種々說明して吳れる、畑、村、鐵道が綺麗に見える、牛も見える、霧が下を飛んで居る、實に愉快だ、川の水に時々太陽がキラキラ光る、川沿ひにある楊が苔のやうに見える、遠くは朝靄で見えぬ、畑が短冊のやう、高さ三百米、村がオモチヤの樣に可愛い、小さい川が目茶苦茶に曲りくねる、大地は綠、茶、黑、銀のダンダラ模樣、太陽が川の水に寫つて下に見える、三百五十米、實に安定、快適、動搖更になし、時々多少の上昇下降を感ずるのみ、八時二十分、八時二十五分、オモチヤの部落、水溜りが澤山眞下に見える、稍々大きな川が、畝々畝つて居る、何となくすつきりして、堂々となつたやうな氣がする、ビビビ……、細い川が素晴らしく曲つてゐる、川の岸の處々に楊柳が綺麗な苔になつて見える、匪賊も糞もない、一面たゞ大なる平和と云ふ感じ、八時三十分、右下に汽車が走つてる、小さな百足のやう、遲々として匍匐してるのが、いぢらしい、齋藤閣下云ふ、もう少し行くと松花江が見えますよ、四百米、綺麗、綺麗、絲の縺れたやうな川の畝り、小さい家、村、四百五十米、土地が縞模樣、五百米、處々に朝日に照り映えて輝く水溜り、張家灣の町を右下に見る、やゝ大きい川、やゝ大きくうねる、八時三十五分水溜り非常



に多い、五百五十米、中位の川百尋のやうにうねる、思ふに此の邊水濕地ならん、北滿の大天地に堂々大鵬の翼を張りて進む、壯快、壯快、六百米、齋藤中將云ふ、此の水のつかりは水害です、ナール程と思ふ、ユラリと來る、オヤツと思ふ、多少動搖、八時四十分、汽車の線路絲の如く見ゆ、白い雲が横又は下に悠々飛ぶ、愉快、愉快、六百五十米、八時四十八分、第二松花江朦朧と見え出す、悠々たる大河、鐵橋が右下にオモチヤの如く見ゆ、川の直上、水に映えて太陽の光黃金色に輝く、水の氾濫、丁度鏡を槌で叩き壞して拋り出したやう、見渡す一望、鏡の破片、東萊城の上に來る、機の車輪が町の模型の上を大きく動いて行く、赤土の廣野無限に續く、遠くは霞んで見えず、大地はよく耕してあり、小さな土塀の家が桝形に見える、家は皆塀で圍まれ馬賊の襲擊に備へてる、村々町々は廢墟のポンペイのそれのやう、何とかの町が綺麗に見える、人は見えぬ、停車場に汽車が小さく停つてる、九時七分、車輪の土が凍つて見える、高くて寒いからだ、九時八分、拉林河、相當なる川、本支流縱横にうねる、水溜り多し、水害廣大、五百二十米、九時二十四分、五百五十米、紙片來る、

『右下は雙城子です、此の附近は何時も多數の匪賊を見ます、二十分餘でハルビンに着きま

す。』

雙城の町、模型そのまゝ、四百米、更に、

『左下に馬賊が五六名居ります。』

見ると馬に乘つた蟻のやうなのが見える、九時半、三百米、九時三十二分、紙片、

『十分でハルビンに着きます。』

右下に此の飛行機の影が大地に寫つて見える、二百五十米、ハルビンの元防塞が五陵廓のやうに見える、左下に沖、横川諸烈士の石碑白く見ゆ、紙片、

『有名な志士の墓が見えます。』

グランと來る、二百米、グングン下る、胸から心臓が引き切られる氣持ち、百五十米、ハルビン市街、ハルビン飛行場、綺麗だな、と思ふた瞬間、突然、大地が左に傾く、アッと云ふ間に、今度は逆に右に傾き、乾坤轉倒！　グラグラッと來て、何が何だか一切目茶苦茶！　着陸九時四十五分、一寸吃驚した、時計の針を二十六分進めてハルビン時間とする。

滿鐵伊藤氏に迎へられ、自動車を驅つて町に行く、新設中の建國紀念大道路を通る、ロシヤ



人悠々馬車を驅る、町はロシヤ色非常に濃く雄大の風あり、名古屋旅館に入る、松花江には千六百貫、價格一萬圓の大鯰が居たと聞いて呆れ返る。

晝食後、第、　中將を司令部に訪ふ、閣下は十餘年以前よりの辱知、余の往訪を喜び、今夕四時より　邸に於て、吾等五人と共に晩餐を取り、且つ大に談ぜんことを約す、余は武運長久の明治神宮の護札を送る、閣下喜んで之を受く、一先づ辭す。

領事館を訪ふ、總領事代理と對面す、曰く、

『滿洲里の情報は死者六人、居留民四人、國境警備隊員たる日本人二人が殺された、他は十人は町に居る、百五十八人は領事館内に居る、食糧は今後二十日間はあるとのこと、此の十人が特務機關及警備隊長牧野氏ならん、百二十五人が叛軍の監獄に居る、内百十六人が滿洲國側の雇傭者、殘りが普通の居留民なり、健康狀態は皆よし、これは露國領事館を通じての只今の情報です、露領へ引揚げに付いては、叛軍側と交渉しても許されず(十月七日の情報)。

私は一月二十五日に當地に着任し、二十七日に籠城、二月日本軍が入るまで籠城を續けました、居留民は正金、東拓其他市内四ケ所に避難いたしました、私は昨年の五月迄は吉林に

居た、今は以前とは打つて變つて威張れる、當市はロシヤ人八萬で、赤と白とが半分づゝで す、赤は赤露の勢力で東支鐵道をひかへて威張つて居る、丁度南滿で云へば滿鐵の庇護を受 けると受けざるとの差があるやうなものです。

滿洲里の問題に付ても、露國に頼る外なし、露國で知つてることを皆知らせて呉れるかが 問題です、先に申した情報も山崎領事の始めての傳言で、チタ、ハバロウスク、浦鹽を通つ て來た電報です、色々な說があつて、叛軍もロシヤが半分擔いて居ると云ふ者もあるが、そ の邊は分らない。

此處は先づ戰地だ、私は「何が起るかは誰も云へぬ、何でも起ると云ふことは誰でも云へ る」と云ふ氣持ちで、いつ何時、どんな事件が起つても之に應ずる決心を持つて居る、兎に 角危險の狀態である、此の町には鐵條網を張つてある、吉林では鮮人の米穀取入れ保護に警 官五十名派遣された、此の町で今朝鮮人を救護してるのが四千五百人、東部線に千八百人、 之等に食費を給して居る、但し救護者は二種に限る、一は事變に依る者千人、二は水害に依 る者三千五百人。



之等の者の冬籠りをどうするか、家を建てゝ呉れと云ふ希望があるが、一時的のもの故そ んなことは出來ぬ、家賃を貸して助けてやる、どうしても仕方のない者二千人は家を借りて やる。

朝鮮人の保護は今は過渡期にある、今までは支那人が多數あつて、鮮人を日本が庇護する ことを邪魔されて居た、そこで日本は「保護の意思はあるが、事實上邪魔が入る」と說明し て居た、處が今度支那側はなくなつて、いくらでも鮮人の保護が出來る立場になつて來た、 彼等は當然「もつと保護して呉れ」と要求し出した、殊に鮮人が迫害を受けるのは日本の政 策遂行の犧牲なのだ、之を助けるのが當然だ、と云ふ理窟を持つて來る

朝鮮人の對日感情、時代的に見ると、日本の勢力が强いときにはいゝ、今頼るのはいゝ、 然し頼り過ぎる樣子はないか、結局稻の刈り入れをして馬車に積んで持つて來る、つまり必 要の程度までは仕方がない、が手心が面倒だ、鮮人は滿洲進出の先驅者だ、大に援助するこ とが必要だ、然したゞ食はせては嘗けぬ、厄介な問題だ。

邦人、在留民としては事變前よりいゝだらう、昨年頃は空家だらけだつたのが今は一杯だ、

殊に水害があつたから家屋は拂底だ。

白系露人は日本に賴るか、それは非常に賴る、彼等は支那人に虐められる、支那人を非常に嫌ふ、今年の正月、白系露人が支那巡警と衝突して露人を殺した、すると露人は之を日本の領事館へ持つて來た、そんなことは受付けられぬ、筋が違ふと云ふと、筋は違ふてるが何とかして呉れ、正義人道の立場から助けて呉れと嘆願して來た、日本軍の入つたときは、日本人は勿論たが白系露人はトテも喜んだ、赤露は白露に日本が好意を持つのを嫌がる、日本は心持としては個人的には白露に對して同情して居る、たゞ國としては、多少赤露に遠慮の氣味である、吾々は白系露人丈に交際する人はない。

然し露人は實に人がいゝ、呑氣だ、それは惨めなものだ、町で見すぼらしい姿をして居るものは大抵白露人だ、白露の妙齡婦人三千人、之等はピアノ、音樂等を教へる外に生計の方法がない、實に氣の毒だ、給料などもとても安い、語學の教師が一ヶ月銀三十弗（金にして二十四五弗）保姆、小學校の茶汲み、七弗、食へないから朝は黑パンとコーヒーだけ、然しそれでも愉快そうだ、どうして愉快かと聞けば、悲觀しても仕方がないから樂觀してると云ふ。



此の邊の白露人は帝制時代の相當のものが多い、彼等は赤露のために肉親を殺され、財産を取られた、其の恨みは感情的に來て居る、何時までも消えぬ、白露人の娘なども日本人とは云ふても、將來何時變るかと云ふ心配もある、壁の役を何時までもさせるのなら、日本語なので、赤露が何かしやうとすると直ぐ分る、つまり防護壁になつてる、然し又、感情的も少しは助けたらいゝじやないかと云ふ主張もある。

白露人の獨立陰謀、これは始終あるが、希望の程度を超えず、亡國の民で力なき模樣だ、實際から云へば白系露人は國際的團體ではなくなつて居るやも知れず、白系露人には活氣がない、遠くから見て米人などと違ふ、直ぐ分る、こゝへ來て露人を優等人種としての白人だと思ふたのは、ほんの一寸の間であつた。』

辭して沖、横川等六烈士の忠靈碑に參拜す、領事館より武裝巡査二名をして護衛せしむ、風寒きハルビン南郊、想ひ起す日露戰當時、松花江鐵橋破壞の使命を帶びて潛入し、事成るの直

前、發覺して拉致せられ此地に銃殺せらる、爾來二十幾星霜、春秋轉じて新滿洲國創建せられ、來りて志士の遺烈を仰ぐ者漸く多からんとす、烈士よ、卿等の流したる血潮こそ、今脈々として日本國民に蘇りつゝあり、今や懸軍遠くハルビンを超え、チチハルを越え、國軍の威容、將に北滿を風靡せんとす、忠魂、恐らくは會心の笑を湛えなむ　碑前に頭を垂れて瞑目追想多時、胸の血潮の高鳴りて、吾も又、君を思ひ國を思ふこと切々。

午後四時、迎へを受けて　　「邸に行く、　　「喜んで迎ふ、直に、　　の抱負を聞く。

『治安、滿洲一般、對露關係に付き私の考へを申上げて見やう。

先づ第一に治安の問題、滿洲は到る處騷がしかつた、最も激しかつたのは今年五六月の候であつた、治安を亂す連中は三種類ある、第一、反政府軍、第二、匪賊、第三、馬賊、之れである。

反政府軍と云ふのは、元張學良麾下に於ける張作相、吉林の萬福麟などがそれ、又元正規軍がある頭領に引かれて寝返つたもの、主なる頭目は丁超(師團長)、李杜(旅團長)、これは二ケ師團に相當する兵力がある、馬占山も一部の正規軍を從へて居た、最近の蘇炳文、之れ



も反政府軍である。

匪賊とは、紅槍會、大刀會等種々な名前があるが、皆大同小異なもので、宗教的迷信に依る團結である、導主は山伏の樣なもの、事の起りは、概して云へば、山東省方面から來た農民が、あゝ云ふものを維持して村落の自衛をやらす、そして村では若干の金を提供する、會員は常には農業にも從事して居る、農村の子弟も入つて居る、專門の會員は少なくても、農村の若者が相當加入して居る。

馬賊これは石川五右衛門式の奴です。

反政府軍は、九月十一日以來、南方のものは張學良の方へ逃げた、新京以南には居らぬ、朝國塘、(?)奉天間に少し居る、反政府軍の居るのは主として北方、丁超李杜は依蘭地方、(一番いゝ土地)馬占山は黑河に行き馬賊を合せて正規軍も併せて居た、蘇炳文は西北方。

反政府軍は素質よく、武器、被服、訓練もよく、將校兵士もよし、之に次ぐものが武裝からすれば馬賊、匪賊は武裝は惡し、人數三百人に付き八十挺しか銃を持つて居らぬ。

討伐方針、本年三四月以降、全滿洲に脈絡ある宣傳が行はれ、全滿洲が騷亂狀態であつた、

私は四月十八日に來たが、一歩出ると志士の墓にも行けぬ狀態、鐵道は自分等の泥棒の必要上彼等も極端には破壞しないが、どこから手をつけるやら分らぬ、

、

、

、

、

、

。

そこで先第一に反政府軍の而かも一番優秀な巨魁を狙ふ、次は軍用金、糧食、通信聯絡の要地を取る、そうすれば總て缺乏するから、彼等は動きが取れなくなる、そして一方ではウンと討伐するが、無條件で降參すれば、各私有財産は許して降參は容れやう、と云ふことに方針を定め、先づ着目したのが北滿では呼蘭河方面の馬占山、松花北下流方面の丁超、其の東、牡丹江地方の王德林、馬憲章等であつた。

先づ船に依つて四月二十五六日出發、依蘭、佳木斯（チャムス）、富錦（フウキン）をやり、丁超、李杜を生捕らう



としたが逃げた、敎化方面へも兵を出した、東方が六ケ敷のは當時四月頃は日露關係が惡かつた、東支線の汽車でも日本軍隊の輸送に便宜を計らぬ、間違つて事を起せば面倒になる、國境の近くへ行くと境界が不明瞭、どこへはいつたか分らぬ、そこで國境近くでは或る程度以上出られぬ、こう云ふ狀態であつた。

一方馬占山は　　が東方へ行くと、直くその空虛を突く心算で出て來た、そして部下からハルビンを取つたと云ふ電報が行つたので、喜んで手兵を提げて出て來た、之を第〇〇と第〇〇との部隊が包圍攻擊をする、　　は退路を絶つ、と云ふ譯で到々馬占山は安古鎭の地域で仕末した。

斯くして大物は勢力がなくなつた、今丁度勃利の討伐に行つて居る、現在は間島を仕末してそれから東北へ出る順序、ロシヤとの了解も今はいゝ。

匪賊は寧ろ氣の毒な點がある、頑迷ではあるが生來泥棒ではない、滿洲國建設の主意を了し、日本軍出動の本旨を解すればよくなり得る、之は好んで討伐することを避けて居る、彼等は反政府軍の首魁から、誤まつた宣傳を受けて動いて居る、勇氣もあり、確かりして、身

體もいゝが、何しろ想像も出來ぬ程無智で時事に暗い、例へば滿洲國が出來て、元の宣統皇帝が執政に來たと云ふ話をすると、それは溥儀サンは牢屋に入つて居る、そして日本から高松宮を連れて來て居るんだと云ふ、ボツケの討伐の時も日本兵を日本兵と知らずに、奉天政府が廣東の兵を傭ふて來て居ると云ふ風に聞く、奥地では滿洲國の出來たのを知らず、又二十幾年前の清國の滅亡を知らず、今でも清國がある心算で居る、そして東南方面は日本とロシヤと戰をして居ると云ふことは聞いてたがこゝまで來たか、と云ふ、輕機關銃、小銃の並んでる奴の前に平氣で來る、日本軍が十倍居つても怖がらぬ、そして三百、五百の人數で、喚聲を擧げて進んで來る、文字通り全滅する、山伏見たやうな隊長から祈禱して貰つて、何か飲むなり、又は祈禱したジャガ芋などを一つ懷中して來れば、決して死なぬと云ふ强い迷信を持つてるのだ、夫れ程無智なのだ、たゞ殺すのも可愛いそうなので、無用の討伐は避けて居る、順次歸順しつゝある。

かくして要所要所を日本軍に占領されて、浦鹽、コロンバイル方面を經て、學良から金は來もするが、頭目の處以下には所かぬので、ドン〳〵歸順する、又食物も段々無くなつて居



る。

處が六ケ敷のは、支那では裁兵すれば泥棒となる、元の正規軍で歸順するものは、暫くハルビン、長春で訓練する、そして氣心を知つて改編出來るから世話はないが、正規軍の五百に馬賊千人が雜つてるといふやうなのは困る、匪賊は根が泥棒ではない、今は泥棒せねば食へぬが、これは自警團をやらせれば仕末はつく、馬賊はどうしてもいかぬ。

馬賊は今も歸順を申出て來る、歸順を世話するブローカーに若干手當をやる、馬賊にもいいのもある、歸順を許すが五百人にして來いと云ふ風にする。

龍滿海(?)と云ふ馬賊の頭目が歸順を申出て來た、許して見た、三百人組が八組か九組あつた、海倫中心に配置して食ふ丈のものをやつた、どうせ警備費が入るのだから滿洲國から出してた、處が王德林あたりと連絡して相變らずやつてる、そこで七日から突然武裝解除をして、昨夜頭目を打ち斬つてしまつた。

以上大した心配はないが、現兵力では治安を完全にする爲めには、相當時日を要する、然し少し張學良方面に壓力が加はれば、元の作霖、學良時代の程度にはなる、勿論もう四五師

團あれば、片端から討伐出來る、經費は吾々の師團で一ケ年〇〇〇〇萬圓乃至〇〇萬圓あればいゝ、四師團增すとして一ケ年〇〇萬圓あればいゝのだ、一度增師して片付けて、それからがいゝじやないか、然し今の通りでも、五月以來騷ぎの後ではあるが、來年の二三月頃までには學良時代位にはなる、それでいゝじやないか、昔から馬賊は滿洲の付きものだ、そう一時に治安を解決しても直ぐ産業は起らぬ、開發に伴ふて治安を擧げて行くでいゝじやないか、と云ふ說もある。

全般から考へると一年〇〇萬圓は相當かゝる、第二案でよからんと私は思ふ。

たゞ、蘇炳文などは直ぐやりたい、が何とも仕方がない、ハルビンにはたつた五百人位しか居らぬ、八十里百五十里先きに一中隊、と云ふ位の配置だ、遺憾はあるが今の通りでもよからう。

蘇炳文は收入はないが、昔の大名だ、一萬五千人位は、優に自活出來る。

次に滿洲國の一般狀態、實は滿洲國は今年の五月六月頃は悲觀した、匪賊の方は悲觀せぬが、殆んど滿洲國の總ての方面が支離滅裂であつた、近來大部諸方面の統一も取れ、綱紀も



立つて來た模樣だ、例へば出先の方で犬のやうに兎を追ふてるが、中央政府は無定見無方針無統制、例へば私共が二月下旬に師團長會議に出席する、初年兵が使へるやうになれば出すと云ふ〇〇も受けた、そこで滿洲に付ては政府はどうする考へかと云ふことを聞いて見る、陸軍大臣は俺はかう、外務大臣は俺はかう、政府はどうか、二月の二十五日頃は滿洲國の出來るのはいかぬ、學良に代る他の政權を擁立するのはどうか、二十六七日頃は總理、外相同じ、他の方面では滿洲を日本で作ればいかぬ、(白鳥氏は別の意見)滿洲國の國民がやれば、それは獨立政權でも新國家でもいゝ、と云つた風にすつたもんだの有樣、從つて關東軍に對しては一つも訓令は來ぬ、何とかやれと云ふので到々新國家は出來てしまつた、軍隊も十一月以降增兵はせぬ、第〇師團一つしかない、其の間にすつかり總ての反政府軍、匪賊、馬賊の脈絡が取れて、準備する餘裕があつた、之等も早く廟議を決してもし四月に第〇第〇第〇〇を增兵したなら、五月の騷ぎは起らずに濟んだのだ、夫等も中央の滿洲に對する方略の極らぬ爲めだ。

もう一つは滿洲國が出來てから、滿洲政府が〇〇〇〇に陷つた、滿洲國の要人は配置され

た、然し〇〇は今後の滿洲に付ては自信は一つもない、日本の腰が壞けると〇〇〇は立場がなくなる、四月五月までは〇〇は本氣の者はない、たゞ溥儀氏に對しては二十餘年來、日本は親切に世話してる、溥儀氏は喜んでる、一昨日此處に承認祝賀會があつて、二萬の行列があつた、衷心慶祝（〇〇〇〇〇〇〇〇）して居る、處が三月の――これは高橋民團長がつくづく云ふが――十日、建國成つたとき、〇〇〇では祝〇〇、張景惠は特別區（附屬地域）行政長官だ、高橋君が日本人を百名集め、旗を立てゝ長官公署に御喜びに行つた、公署では〇〇〇〇〇〇〇〇〇、長官は〇〇だ、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇と云ふ、〇〇〇〇〇萬歲を云はうと云ふ狀態、皆〇〇〇〇〇〇てる、四月頃でも〇〇の態度は違つて居た、日本の顧問、官吏を入れる必要が起つた、その時非常に素質の劣等な者が入る、〇〇は陸軍の少佐か中佐位、人間は中の部、それが一躍して〇〇總監、滿鐵からの者でも係位で一躍勅任官、そこで閲歷、經驗、手腕、人格、何れよりするも、惡い者〇〇〇〇、長春はたつた一人の少佐が世話する、初め顧問官吏は百人位の豫定、處が新京丈で五百人も入る、軍司令官も知らぬ者が入つてる、〇〇は不渡りでも勝手に金を持ち出して、電話の交換手でも自動車で乘り廻す、



これぢやいかぬ、何故か、吾々も惡かつた、日本人も何度となく偉い人を寄こす樣に指名してやつて、本人に來て呉れと云へば、少し考へてと云ふ、政府へ行つて行くとすれば政府の了解方針も欲しい、と相談すれば、まだよく分らぬといふので、一人も來てがない、これは政府を全部一掃されたことは實にいゝ、前の軍の中心はいゝ人だが、建設方面ではいかぬ、と思ふものは〇〇〇〇君一人、軍も困る、入れねば脈が止る、仕方がない、そこで今度中央破壞時代の人だから、色々人には因緣と云ふものが出來る、これが代る、そして練達堪能の士が見えたことは誠にいゝ、これ等の混亂の爲めに、滿洲の秩序の立つことが二年三年四年後れたと思ふ。

今後は滿洲に於て、一番氣を付けねばならぬことは、〇〇經略だ、これは二十年三十年を要する、二度三度政策を變更することゝなる、差當りは滿洲國の人がなるべく、日本に對して好意を持つやうにせよ、その爲めには、滿洲の政治狀態は日本の法制の論者から云へば不都合だが、內政は其の儘滿洲國人にやらせる、日本は權益を〇〇、〇〇せよ、彼等が〇〇や〇〇や〇〇をやつても關ふことはない、吾々は日本の〇〇を〇〇すればいゝ、滿洲國の國民

を相手にして、これを○○○○○○○○すればいゝ、○○などはどうでもいゝ、有司要人の○○をすればいゝ、彼等は制度を改正し、秩序を整然としてやれば飯は○○○、何でも出來るやう穴を○○○置け、いゝ政治を行ふ○○○○○○喜ばぬ、例へばこゝでコレラが流行する、大變心配して豫防注射をしてやる、これは非常にいゝことだ、が住民は非常に嫌ふ、舊に依つて法三章で治めよ、で一方では要人は自分の欲するやうな○政をやつて、始めて滿洲獨立の意義はある、愉快で○○もは入つて來れば、彼等の人心が日本に向ふ、この外はない。

甚だしいのは○○の官吏が會計檢査をやる、處が大福帳で○○○○○居る、すぐボロが出る、馬占山が寢返りを打つたのも一つはそれだ、馬占山に向つて會計の收支報告をせよと云ふ、之れには先生は參つた、稅關長の給料三十元、實收は五百元あるのだ、日本から來た顧問は、碁を打ち麻雀をやつて○○で居ろ、たゞ若干の有力なる者が入つて○○○。

滿洲國には資本を入れなければ仕事は出來ぬ、これを追ひ拂つた、これは具合が惡かつた。

今後の滿洲の眞正の發展に害あることは、滿洲の權益を日本は買ひ被り過ぎてる、滿洲に



行けば砂金がざく〳〵あると云つた調子、何等の研究もせずに、たゞ滿洲に無限に不眞面目な者が入つて來るのは困る、今居る不良の一萬や二萬は追ひ返せ、現に鹿兒島から移民團が來た、聯隊區司令官が世話したと云ふが、吾々には何の相談もせずに來た、鐵道請負工事をして移民になる心算だと云ふ、武器がないとか何とか云ふてる內に大洪水となり、この間、散々惡いことをして居た、隊長を呼んで貴方等軍服を着て居る以上は軍の統制に服せ、何事か、團員の統制が出來なければ退去せよ、といふてやつた、何の通知もせずにたゞ五百人ポカツと來た、滿洲の方はまだ測量が出來て居らぬ、雪、防寒具に付き考へなし、移民の方面も頓と分らぬ、仕方がないから或る場所を至急やつて貰つた、二日居ると喧嘩を始めた、一圓や一圓五十錢の日給は怪しからぬ、と云つて脫走した、何とも仕方がない　片岡と云ふ男が何とかしやうと云ふて來たから軍隊の方では拒ね付けた、眞面目の者が困つてるのなら如何樣なこともする、其の中には○○○○をする者も出て來た、憲兵に命じて　團員の軍服を脫がせ帽章も襟章も取れと云ふ處へ日渡と云ふ偉い人が來て、二週間の間、向ふと此方を往復して、百五十名殘つた者は是非やるから承認してくれ、逃げて來た者は歸る者は歸れと云

ふことになつた、まづいことには悪いことは日本人に對してはやらぬ、滿洲國人に對してやる、滿洲國人は滿洲國の警察に訴へるが警察は遠慮して日本側に云はぬ。

元來こゝには滿洲ゴロが澤山居る、これに內地から似たやうな者が流れ込んで來る、段々悪くなる、此間も雇が入るので豫備の軍曹を一ケ月雇つた處、金を一萬五千圓持つて逃げた、そう云ふ大物は出口が決つてる、田舍へは匪賊が居るので行けず、直ぐ捉まつてしまつた。

此の程度のが來て侵越感を持つ、支那人と伍して同じ生活をしやうなど云ふ者はない。

此處の金持ちや大官が日本のゴロに困り切つて居る、盛に金を貰ひに來る、此の間日本の辯護士が來たら、日本人ならいゝ、顧問になつて呉れ、用はないが日本人からの用件を皆引受けて呉れ、と云ふ頼みであつた。

更に悪いのは吾々は向ふも尊敬するし、こちらも謙遜する、處が悪いのは紳士も苦力も見分けなく支那人を侮辱する、これが爲め四月以來反日の氣分が漲つて來た、吾々の感覺に移つて來た、町の中で支那の立派な婦人にからかふ、停車場で入場切符も買はずに入る、何だ俺の顏を見ろ日本人だぞ、と嘔鳴る、汽車の一等室へ入る、私の所の參謀長が見て來た、食



堂車を占領して大酒盛りをやる、拳を打つ、歌を歌ふ、又此の間私の友人が奉天から來て、全く吾々も同感だ、あるとき日本の商人が大風呂敷を背負つて乘車しやうとした、滿洲國人の相當な服裝をした男が行き合ふた、双方客車の入口に暫く立つて居た、するとイキナリ商人がポカツと打擲つた、向ふは別の方へ行つた、といふ話、又斯う云ふのがある、ハルビンの郵便配達が居た、日本人が來て、その中に俺の郵便があるだらう、見るから下せと云ふた、それはいかぬ、と云ふことから毆つて大怪我をさせた。

朝鮮でも排日氣分あり、滿洲ではまだ內心あつても表面には出ない、まだ日本人がひよツと頭を出した處で、一般ではないが鐵道沿線では見えて來た、滿洲全體にこれをやられてはどうにもならぬ、彼等は權益を〇〇れるのは覺〇〇〇、要人が侮辱されたら終世忘れぬ、私は以前經驗がある、シベリヤ旅行をしてるとき、米人の子供が私が出さへすりや私にカラかふ、二三日すると私に唾をする、氣持ちは悪いが相手は子供だ、親が見れば止めるだらうと思つて我慢してる、或る驛で外に出るとそこへ例の子供が親と居た、私に子供が唾をする、親がそれを見てニコニコ笑つてた、それ以來私は米人に心から憤慨を覺える、これは困る、

これは軍が强硬な政策をとる、領事館警察は日本人に對しては弱いものだ、一方眞面目な日本人を入れる、國權の○○はグングンやれ、個人は大事にしてやれ、それでなくても二三年たてば反日が來る、蘇炳文の反逆がそれだ、原因は三つある。

第一は、滿洲國境警備隊として、日本の在鄉軍人を雇つてやつた、甘粕等が、これは大失敗だ、山海關の方でも困つて居る、それが稅關の監視をやり、國境警備をやる、これが蘇炳文の兵を殊に將校を拘留した、虐めた、と云ふことが非常な反感となつた。

第二に、護路軍は密輸入に依つて○儲けをして居る、この密○○を絶つた、○○○○○○○○○○○○○、稅關は○○○○を通し、其の外部を馬車で密輸入するのが從來の常例なのだ、この密輸入を押へた。

第三に、日本の少壯の連中が仕事をせんとする弊害、興安嶺の向側に居る大官を辭令一本で動かさんとした。

移民問題、私は北滿を一昨年の春全部歩きました。土地丈は相當に知つて居る、昨年十一月以後移民問題が矢釜しくなつて來た、移民の本も十種位讀んで見た、その中で專門家の書



いた、實驗家の方面は殊に多いが、投資移民は有望だ、勞働移民は困難だらうと云ふ意見が半分、あとの半分は方法宜しきを得れば、勞働移民でも成功すると思ふ、何分にも土地が嫩江、呼蘭、河富錦、牡丹江の流域、すべて實にいゝ、假令一年一作でも、銀貨が成ると思ふてはいかぬが、山の天邊まで耕す決心でやれば、土地も安い、政府が世話をすれば、無償提供も出來やう、そうでなくても、安くていゝ土地を取つて集團的に入れて、日本で一町歩が、こゝでは五町歩と云ふ風にすれば、移民は出來る、これは然し無準備では出來ぬ、滿洲人と伍して競爭するやうでは駄目です、彼等は體力强健で、如何なる粗衣粗食にも甘んずる、ロシヤの鐵道はこゝから長春迄ぁる、長春までは運賃が高い、然し高いと云ふても鐵道です、それを滿洲人は冬になると馬力でやる、實に偉い、とても伍してはやれぬ、そこで彼等と伍しないやうに集團で入れろ、夫婦者でなくてはいかぬ、鳳と云ふ人が十八年間やつて居る、松花江の下流で、其の人の話を聞いても、冬五ケ月は死んだ滿洲、冬籠り、慰安も何にもない、だから夫婦者でなければとても住めぬ、入れる以上學校を建てろ、警備の設備もしろ、よく在鄉軍人ならすぐいゝやうに云ふが、個人は滿洲人より强くはない、軍隊として行くか

ら強いのだ、軍律だから強いのだ、たゞ在郷軍人行つてもそう強くはない、何を作るか、例へば北の方で五十萬トンも大豆が出來るが、大連相場で七十圓内外、これの三割しか作つた者には入らぬ、邊鄙のいゝ土地、作つたのをどうして販賣するか、蠶はいゝか、日本内地との關係如何、山本条太郎サンのとき蠶を飼ふこと教へるのは怪しからん、滿洲で桑は全部拔かせてしまつた、こゝで百姓をするにしてからがそれを考へねばならぬ、明日東北地方から依蘭に移民が來るが、それは來た以上は出來る丈のことはする、來たら討伐に使へと云ふから、いやそれはいかぬと云ふた、來た以上は全力を擧げて助ける、まだ土地も極らぬ。

私は先づ軍と政府と共同して、山東移民百萬入つて六十萬居付くと云ふが、それを先づ○○、金とトラホームを條件とするのだ、森林、畑等を買占めて、大官に○○をやれば直ぐ呉れる、鐵道も付けて、準備成つた所で移民を入れる、それも名古屋や京阪地方の贅澤な者は駄目、○○○○では駄目、山岡君はルンペンを此方へ送つて教育してると云ふが、これは大變だ。

北方の鶴立炭鑛、ムーリン炭鑛は撫順よりもいゝ、石炭なんざ今は駄目だ、こう云ふ方面



を考へてやれば、投資の方は出來やう、私見を申せば、移民に依つて人口過剰は解決出來ぬ、日本人が八十萬づゝ殖える、いくら移民出來る、これは解決出來ぬ、然し出來る丈はやるがよろしい、七月八月頃は一日に二人位は移民問題にやつて來た。

それ程移民熱が高いのに何故臺灣朝鮮を忘れてるか、朝鮮はまだ千五百萬はは入れると云ふことだ、千萬と見て半分を入れても五百萬だ、然るに朝鮮移民は二十年來寧ろ勞働移民は減りつゝある、臺灣領有以來四十年、殆ど初め五六年間に二十萬は入つたきり、あとは少しも殖えぬではないか。

臺灣が土地としては一番いゝ、中央山脈の西方はいゝ、まだ百萬位は入れ得る、集約農業も出來る、處が皆本島人でやつてる、何故支那海に面した方へ相當入れぬか、官憲に賴ると云ふが、官憲に賴らぬものはあるまい、米國や濠洲ではインヂアンを獵銃で打ち殺してやつた、そんな風にやるなら兎に角、そうでなければ官憲の世話が必要だ、臺灣の土人を幸福にするための官憲○○○○○○、朝鮮は全く甘やかして今ではもう日本人は食へぬ、今では○○の○○が出來ぬとか云ふ、臺灣では眞僞は知らぬが、バナナでも高雄地方から千二百萬圓

の收入があると云ふ、その土地の大部分は皆泥棒されたものだ、それを總督府は何にも云はぬ、よろしく臺灣朝鮮の政策轉換をやれ、臺灣の泥棒を地券で追拂へ、朝鮮も政策轉換せよ、ヒリツピンを米國が持つてるが、あれは全く國防の爲めだ、その行政でも朝鮮臺灣などゝは全然違ふ、ヒリツピンに大學はない、日本が臺灣朝鮮に大學を置くのは○○違ひだ、官吏になる○○○○、法制や文學を敎へて何になるか、不平分子を養成する○○○○○○○

英國あたりの總督はストライキをやると全部退校を命ずる、そして一年生から募集してる、日本のやうに仲裁したり、謝らせるやうなことはせぬ、決して甘やかしてはならぬ、軟弱な政策や人道問題などを考へるなら○○は駄目だ、滿洲には一層猛烈な排○が來る、人間も優秀だ、片端から○○でやる決心でなければ滿洲移民は出來ぬ、それならば一番いゝのは臺灣朝鮮の政策を改めよ、と私は考へる、よろしく政治家はそれを考へて呉れ。

對露關係、今年の春日本軍が始めて北滿に入つたときは○○○は吃驚した、東支鐵道も○○○、沿海洲も○○○○と云ふので、全車輛を擧げて沿海洲へ移つて行つた、日本が軍隊の輸送請求をすると、モスコー政府へ請訓するとか、まだ返事が來ぬとか、一列車丈はいゝ



とか云ふ調子、向ふも疑心暗鬼を生ずれば、日本も敵意を持つと云ふ譯で、双方睨み合ひの狀態、その頃は東京にも○○○○○○の外なしと云ふ空氣がある、そう云ふ時に私はハルビンに來た、こゝは奉天以上の大都會だ、相當上の人の考へも聞いたが、東京でははつきりした觀念がない、○○○○○に協議して、兎に角日本としては○○○○の最後の完成には○○○○だ、然し今の處そう○○○○○に○○○○ことは有利ではあるまい、と云ふことに意見が一致した、そこで私は談話の形で『日本軍が來たのは治安回復の爲めである、外國人の既得權は之を尊重する、又滿洲國の境域以外も決して犯さぬ』と云ふ意味の宣言を出した、又外國領事（ソビエツト）にも會ふ、又鐵道輸送の御禮だと云ふので、宇佐美氏を介して總領事以下要人五六名を呼び、一杯飲んで胸襟を開いて會談し、又日本の料理屋へ藝者を呼ぶと、云ふ具合に段々話した、日本はほんとうはロシヤを犯す氣はないか、ない、けれども日本の陸軍大臣はこう云ふ演說をしたではないか、うそだ、いや日本は東支鐵道を取る心算なのだ、その證據にはその準備をして居るではないか、いやそれは吾々が北滿に活動する、その爲めに若し東支鐵道がそれでも吾々の希望に應じなければ（汽車を動かしてくれねば）一

時的に取る、そうでなければ決して犯さぬと云ふ譯で、大變よくなつて今では請求すれば、三時間もすれば必ず車が來る。

先方も國境に〇〇師團を置いた、それで國境に近づくと貴國の神經も刺擊するし、當方も色々苦心して居ると云ふ話をよくしてやつた、そしてもう何時反軍等を討伐してもいゝやうに了解出來た、又滿洲國の領事を入れていゝ、日本人の旅行も許す——今までは入れなかつた——と云ふ風になつて來た、ロシヤは五ケ年計畫をして居るなどと云ふが、今では西部が非常に窮迫して、外國と事を構へると內亂が勃發する、だから向ふでも事を構へる考へなきこと明瞭だ、そこで向ふでは日本と不可侵條約を結ばふとする、日本の領事も不可侵條約さへ結べば承認すると云ふ、處がロシヤは不可侵條約をしても、共產宣傳をやらざるを得ぬ、それと〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇必要がある、と云ふ譯で、今不可侵條約には〇〇〇〇あるならん、そこで吾々は不可侵條約の如きは國論一致を要する、もう少し待てといふてる、これも〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、大體は右のやうだ。

そこで今年〇〇〇が見えたとき、出先は〇〇論者があると云ふがどうかと云ふから、いや



斯々だ、〇〇〇とは暫く間違ないと思ふと云ふて置いた。

日本の主なる權益は北滿にある、どうしても〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇覺悟せねばならぬ、〇〇〇も知つてる、そして匪賊〇〇〇〇〇〇〇を出す、けれどもそう云ふことはないと吾々は云ふてる。

ロシヤの軍隊整備七十二師團はたしかだ、その後が續くかは問題だ、科學兵器も用意出來て居る、その金は？　國民が食ふや食はずは問題でない、全部を軍備と產業計畫につぎ込んで居る、少くともこちらの方面の軍隊は立派である。

鳳友造と云ふ人が湯原の北北東二十里程の處に事業をやつて居る、砂金は出る處では出るが、それを取りきると、二年たつて出るか三年目に見付かるか分らぬ、砂金丈では仕事にならぬ、農業が必要だ、そこで鳳氏は鮮人八十人を連れ十年かかつて湯原の奧地に農業を始めた、連れて行く者は夫婦者だ、あの地方には支那人でもなく、ロシヤ人でもないゴート族と云ふのが千人位小興安嶺の一部に居る、それが遊獵をする、それをマツチ、雜貨で物々交換をやる、冬は自分はハルビンに居る、今一寸千人程鮮人を入れて居る、三ケ村出來て學校を

作つて、鮮人中六人の世話人を作り、その上に鳳君が居る、十八年間に六度黑龍江省の官憲が調べに來た、それが來ると澤山賄賂をやる、稅金を拂はぬのだからやつてもいゝのだ、官憲先生が歸つて若干鮮人が居る位に報告する、それで今日まで壓迫を受けなかつた、馬賊も大規模のものは來ぬ、二三十人のは來たが之は追拂ふ、日本人は一昨年の秋、陸軍の看護長であつたものを二人入れた、日本人は鳳君と三人きりだ、何故日本人を入れぬかと聞いて見たら、日本人も考へて見たが、權利は主張するが義務を守らぬから、すぐ喧嘩をする、日本人は私には統御出來ぬと云ふた。

呼蘭河の流域には四尺乃至六尺の肥泥あり、肥料は不要。

松花江の本流々域三百五十里、嫩江、牡丹江の流域を合すると、日本の本來の領土より少し小さい位だ、チチハルに增水したと云ふ報告があつて、十日を經てハルビンに增水する、チチハルからハルビンまでの水の行程十日を要する、以て其の雄大さが想像出來やう、此の邊を大平原だといふが、それでも此のハルビンなどは多少土地の起伏があり、所々に樹木を見ることも出來る、これが洮南地方へ行つて見ると實に驚く、まるで平べつたい土地の海だ、



それに樹木など云ふものは一本もない、あの邊で戰をするのは中々六ケ敷い、師團の二つや三つ並べても、どこを目標として進んだらいゝか、又射擊したらいゝか全然見當が付かぬ、呆れ返つたものだ。』

熱辯滔々、二時間有餘、說き去り說き來つて盡くるを知らず、將軍の若き大佐時代を知る余は、往年の意氣尙ほ消磨せず、漸く圓熟せる風格の中、烈々たる壯心燃え、溢るゝ情愛の溫かさに觸れて、身の遠く朔北にあるを覺えず、食堂に誘かれてロシヤ料理の珍味に舌皷を打ちつつ歡談數刻、あゝ思出多き此の一夜よ、九時將軍の武運の多幸を祈りつゝ辭して歸る。

宿を出で案內人露人ワロージヤーに導かれ、ロシヤ情緖を見物す。〇〇〇〇、〇〇〇〇、更に朝日キアヴアレーを見る、居る者大半は日本人。

## 十月十一日

朝井ノ子商店のお神がエハガキや寶石類を賣りに來る、寶石などは凡そ緣のないものだ、冗

談を云ひ乍ら冷かしてる内に畫近くなる、一寸ロシヤ町の見物に出る。

午後、朝鮮銀行を訪ふ、係主任から取引の話を聞く。

『こゝでは哈大洋と云ふ銀の紙幣が流通して居る、張學良は哈大洋を制限した、この土地に於ける哈大洋の流通額は三千五百萬圓だ、これでは足りぬので朝鮮銀行券が約五百萬圓程流通して居た（この土地丈で、滿洲全體では鮮銀券流通高は四千萬圓）、今度東三省、邊業、永衡及黑龍江省の四つを合併して中央銀行が出來た、そして向ふ二年間に國幣と引換へることになつた、國幣と哈大洋との相場は百圓に對する百二十五圓だ、將來漸次國幣にする考へ、然し國幣は數が少ない、そこで元の東三省や邊業の紙幣に國幣の判を押して流通せしめて居る、然し現在は國幣は使はれて居らぬ、國幣勘定は設けぬ、目下の哈大洋の日本の金に對する比價は百圓に付き七十三圓六十錢位です。

然し個人は國幣を嫌がる、と云ふのは八錢を拂ふのに八錢やれぬから損をするので嬉しがらぬ。

預金は大口預金は支那人、小口預金はロシヤ（白系）人、支那人です。



商賣の模樣、大口取引は十月初めに初まり翌年四五月頃に終る（結氷期）。

運輸系統は今までは浦鹽經由、今は浦鹽線止まり、南方大連行き貨物多くなつて來た（今まではハルピン長春線をウンと高くした）。

軍部の通貨は千萬圓位朝鮮銀行券を現送して來て使つて居る、軍部の方針は朝鮮も滿洲も一體とする、故に絶體に哈大洋を使用せず。』

朝鮮銀行を出で他の同志と別れ、宮崎君と共に松花江の流を見、轉じて伊藤公遭難の地を訪ふ、ハルピン驛のプラツトホーム、案内人に指示されて此處ぞと云ふ個所に立ち、英雄の靈魂を弔ふ、伊藤公も今や地下に微笑んで居るならん、出來得べくんば英雄最後の地に目標の印石を埋めなん。

一寸晝食をしやうと云ふので支那料理に飛び込む、取急ぎ簡單にと云ふ注文が、待てど暮せど出て來ず、性急の宮崎君愈々おさまりがつかず、督促をすると、凄まじい大聲で料理場の方へ合圖をする、すると又、これに負けぬ大聲で向ふからどなり返す、偉い景氣のいゝ聲にびつ

くりして安心して居ると、さつぱり手應へがない、痺れを切らしてブツブツ云ひ乍ら待つこと一時間、悠々簡單料理ワンポーズがテーブルに運ばれる、漫々的だ、大國民だ、料理は日本で云へば寄せ鍋だ、羊の肉だ、鳥の肉だ、牛だ、馬だ、豚だ、茸だ、筍だ、何だ、斯だ、と目茶苦茶に抛り込んで、ゴトゴト煮て、さあ食べろ、と來た、食つて見ると馬鹿にうまい、すつかり氣嫌が直つて納りがついた。

夜はワロージヤーを連れてロシヤ町の研究に行く。

**十月十二日**

今日はチチハル訪問の豫定、天氣晴朗、風相當あり、十時十分前ハルビン發、飛行場の空に日本空軍の戰鬪演習を見る、壯快なり、日本軍の威容幾なるを染々と感ず、離陸、南より西へハルビン上空を進む、市街日に照りて眼も醒むるやう、町の彼方を見渡せば、松花江は一面の大氾濫、巾十數里に及ぶ水の大鏡、松花江對岸のハルビン別莊地は人家水上に點在す、名に負



ふ松花江大鐵橋は右下に眞田紐のやう、汽車は水の中を走る、廢墟の村、其處此處に見ゆ、水のうねり、渥のうねり、見渡せば四方無限の大曠野、十時十分、まだ廢墟の村點點、畑は一面の大茶褐色、水溜り至る處にあり、高度七百五十米、左手には松花江流域の大海原、右手東支線の北方にも水溜頻々、停車場部落全滅、滅亡慘憺の大荒原、十時十三分、高度九百米、風あるらしきも殆ど動搖を感ぜず、人馬車蟻の如く動く、幾らか畑地に綠見ゆ、水害を受けざる原野は茶に覆はれたる綠、黄、前後左右、眼の屆く限り無限の大平野、山一つもなし、十時十七分、左手後方遙かに鏡の如く松花江氾濫地域見ゆ、九百五十米、此の邊に來ると部落や家の周圍又は西北側に綠樹あり、而して部落や家々の周圍は方形又は長方形の防禦壁を圍らす、右下に小流の氾濫を見る、左後方銀色に輝く松花江の氾濫、動搖殆どなし、『ロシヤは北國、果て知らず……』の感、村水にひたる、畑の上を舟の行く見ゆ、十時二十五分、一面の廣野殆ど樹なし、到る處大滯水、左後方松花江の銀色依然たり、直下に東支西部線、眞直に糸の如く伸び、一直線に水平線に入る、鏡を叩いたやうな大滯水、白く乾きたる處、茶褐色と水色の交錯、十時三十分、出發後四十分、依然として左右滯水を絶たず、十時三十五分、右手前方に青青泡の青き

を見る、機に宣傳ビラを積載す、曰く、

◎江省軍民大家看看

●聽說這回滿洲里附近有搗亂的事情、這實在是可憾可悲的、想必是有甚麼誤會纔起來的。

●現在我們正講究善後的事情哪、所以各方面亦要愼重、亦不要輕舉妄動纔好。

●倘或有加害日本人的事、那就事情越發重大、所以大家總要小心、不要胡鬧纔好。

●現在日本軍部、亦向各方接洽商酌、想這回事情快要圓滿解決、務望大家各自愼重不要聽信謠言纔好。

●滿洲國國運　現已隆隆騰升

線路の左右に處處に可なりの湖水あり、水溢れて大きさ、二倍三倍になり居るらし、褐色の大地に青藍色の湖水の斑點、十時四十五分、高度九百米、動搖更になし、出發後一時間、安達街の上空、高度千百米、眞藍の湖水、其の間に薄色の滯水地、泥色の新湖、湖の上空を渡る、湖水蓮形に氷結して居る、多少動搖、十時五十八分、千米、小さき圓形の泥色の新湖幾つも見ゆ、右手に大なる青藍の湖、小さな停車場、オモチヤより小さい汽車が停つて居る、十一時十



分、右手に大なる湖を見る、それより西方南北に亘り青又は茶褐の湖水の斑點無限に連らなる、十一時十五分、八百米、一面の滯水地、青藍と茶褐の斑色、左右の廣野に擴がる、耕作の跡も見えず、白い鳥が下の方を飛んで居る、五百五十米、機影が日の光を受けて、鮮かに大地を滑つて行く、嫩江の氾濫地帶と覺しき水の色左手先方に見ゆ、左右何れを見ても、駄々つ廣き藍水と褐地との交錯、十一時二十五分、六百米、部落のある附近、耕作地も見ゆ、部落は一の城廓を爲す、十一時三十分、多少の動搖、五百米、白き鳥一列に下方に舞ふ、搖れると云ふても自動車程搖れず、十一時四十分、部落段々多く見ゆ、チチハルに近し、高度六百五十米、部落の周圍には土塀を築きあるが見ゆ、十一時四十五分、七百米、チチハル見ゆ、四百六十米、チチハルの上空を一週す、街路に人多し、十一時五十分着陸、時計の針二十六分を引き戻す（南滿洲時間）。

直に第〇〇〇〇〇〇令部に〇〇〇〇〇〇を訪ふ、

『衆議院からは軍に對し感謝決議を送られ深謝に堪へませぬ、尙ほ國民各位から銃後の御後援の挨拶を頂き感銘いたして居ります、實に之を思ふと涙ぐましき心地いたします、兵員一同たゞこ

の儘では歸れぬと思つて居ります、兵員も皆丈夫です。』

以下、　、　交々語る。

『一時酷いときには、　　が馬占山を追ひ廻したときは、水溜のドロドロの水を飲んで、馬に飲ませやうとしたが、馬が飲まなかつた、夜飯を炊くので川から水を汲んだ、朝見るとその水の中に馬が死んで居た、それ程惡い水を飲んでも、御蔭で病氣もしなかつた、輕い赤痢はあつたがこれは歩いてる中に治つた、チブスも疑似、四五人出たが死亡者なし、傳染病で入院者はない、あれ丈の雨で風邪を引いたものなし、國民の後援で充實してゐるから病氣などせぬ、此の、　では脚氣なし、衞生狀態はよしと確信して居る、馬も飲まざる水を飲んでも丈夫、風邪も引かず、三週間位風呂にも入らぬ、七日の日から嫩江の對岸富拉爾基を攻擊す、その時も泥の中、胸、乳まで浸す處で戰をした。

我が、　は黑龍江省全部に配置されて居る、今は匪賊は大物から片付ける、今度　のやつた李海青が馬占山の次の大物だ、武器は相當持つて居る、蘇炳文の寢返りは前から計畫があつた、北方には鄧文が居る、チチハルには二十萬元の懸賞がかゝつて居る、誰が出すのか



知らぬが、兎に角二十萬元の懸賞があるので此處を狙ふのだ、兵隊も戰は上手になりました、[illegible]の任務は、黑龍江省、奉天省の洮南方面の兵匪討伐、治安維持にある。

目下、

。

海倫、克山邊は土地甚だよろし、　　、之は

[illegible]、將來北滿の物資は－　　、もう一つはチチハル、洮南を經て大連へ、出ることゝなる、そうなると〇〇〇は用を爲さぬ。

匪賊は第〇〇[illegible]管下に二萬乃至四萬居る、此の間の李海青はチチハルを襲擊せんとした、鄧文は依安以南東支線の方まで居る、蘇炳文の反亂は始めから滿洲國に反對の意思だつたのだ、俸給の問題は大したものでなし、二十七日に反旗を翻した、之に對し軍は今あれを叩くとロシヤとの關係がある故、出來る丈政治的に解決せんとす、それと共に李海青、鄧文をやつつけるならばよからんと考ふ、蘇炳文系は富拉爾基に二三千迫つて來た、我軍の一擊に依

つて死者五六百を殘し敗走した、改めんければ蘇炳文もやる。

馬占山の戰死場所は、海倫から東方二十五里の山奥です、　　の李海青擊破は實に愉快であつた、十月一日李海青軍約二千がチチハルを目ざして洮昂鐵道の東を北上した、

の一　　とが先づ迎擊し李軍は死體を殘して南方へ退却した、そこで其の夜の中に　　とが、洮昂線で先廻りして今度は南方から猛擊した、李軍はすつかり面喰つて、到々逃げ場を失ひ東の沼澤地の島の中に飛び込んだ、全く袋の鼠だ、十月二日の早曉、上から飛行機で爆彈を落す、大砲を打ち込むといふ猛擊で二千位あつた李軍が千六百の死體を殘して散亂した、李海青は放々の體で逃げたらしいが、何でも頰の肉を取られて、馬鹿を見たと云つてるそうだ、遺棄した馬や死體の所持品は土地の支那人や〇〇〇の軍隊が皆奪つてしまつた、滿洲國の軍隊は此の戰鬪で戰利品を取つたと云ふ科で二千元の褒美を貰つた、御蔭で褒美を貰つたと云つて私の處へ御禮に來た。』

余は携へた明治神宮の武運長久の護札五を呈し、內一つを[illegible]へ傳達されんことを乞ひ、吾等一同衷心より全軍の健勝と武運長久と祈つて辭す。



引返して飛行場に到れば、只今此の地の南方へ陸軍機が不時着陸をした故、一時間許り救援に行つて來るから待つて呉れと云ふ、あゝ勿論、勿論、お國の爲めの陸軍だ、早く行つてやつて下さい、と云ふので暫時事務所に待つ、其處に丁度滿洲航空株式會社の總務次長運輸課長永洲三郎氏あり、其の話を聞く、

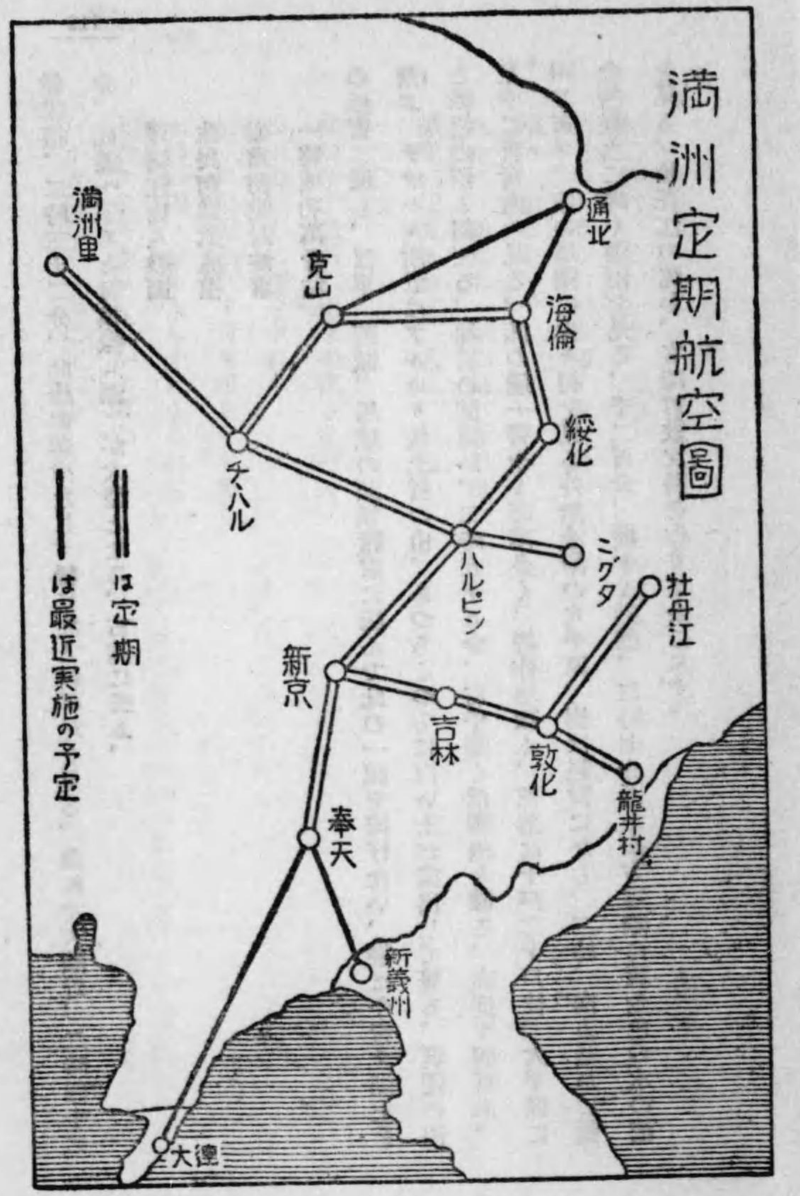
『滿洲航空株式會社は現在一ケ月三萬キロを飛んで居る、其の半分が定期飛行で、他の半分が軍の命令に依る臨時飛行です、地形の關係上か此方の人は勇氣がありどんどん飛行機に乘ります、料金は汽車の一等を目標とし、こゝからハルビンまで十八圓です、飛行機發動機の償却は困難です、補助でやつてる次第です、飛行は奥地の方が盛です、夜行列車がうまく通る地方は少なくしてます、此の會社は國務總理の令息鄭垂氏が社長で兒玉大佐が副社長です、將來は機體は此方で作る豫定、發動機は中島飛行機製作所のものを用ゐて居ます、心配なのは酷暑酷寒で、技術上の心配はなくなりました、此處の邊チチハルでは冬は零下四十度です、航空會社の　　、開始以來約十ケ月間全然無事故です、今日は日滿合辦の滿洲航空株式會社として活躍して居ります、飛行場は四十ケ所、こゝの飛行場も一年前

からやつと使へるやうになりました、滿洲の飛行場程安い飛行場はない、こんな譯だから資本金三百五十萬で出來たのです。

これは　　の結果出來たのです。』

二時五分出發、墓が澤山見える。烏の大群、大鏡を打ち叩いたやうな大滯水地、さらばよ、チチハルよ、さらばよ、第〇〇師團よ、國防第一線の勇士に心からなる敬意と感謝を捧げつゝ東に向ふ、五百米、實に廣い、空晴れたれど東南風やゝあり、イボの如き墓點々、二時十二分、七百米、クラリと來る、ヒヤツとする、相省みてニヤリツ、二時十五分、八百米、まだ依然として見渡す限り沼澤地、二時二十分、まだ沼澤地、八百五十米、東支鐵道右手に一線を引く、これ丈が僅かに文化の香、大地は子供の水惡戯の後のやう、湖の粒が大きくなる、耕作地チラホラ見ゆ、沼澤に沒したる村落見ゆ、右手に太陽照照として偉大なる平和の姿、下は一面の銀色の破れ鏡、來るときは氷結した湖水、今度は漣波美し、部落を繋ぐ道子供の惡戯書きの如し、

二時二十五分、高度千米、右手やゝ沼澤地薄らぐ、左手は依然として青き水と茶褐の大地との交錯模樣空の彼方に繋がる、右手も稍々疎らなれど、之れ又雲に入るまで銀色と黃色との交



錯模様、二時三十二分、此邊部落少なし、稀に家と耕作地を見る、呆れた大曠野、二時四十二分、此邊へ來ると青模様（湖）が大型となる、古詞に云ふ、

澤國江山入戰圖
生民何業欲漁樵
勸君勿說封侯事
一將成功萬骨枯

の感實に深し、反軍、匪賊、馬賊の頭領諸君に謹んで此の一詞を捧げたい、機は今青き湖上を飛ぶ、チチハル附近はアルカリ性土質の由、あつちこつちに白い土が露出して居る、眞藍の沼と泥色の沼と相交る、地質の關係か、二時五十五分、右手漸く沼澤地を離る、高度千四百米、左手に青青泡を見る、此の邊一帶やゝ部落多く、耕作地續く、部落は十戸二十戸位、大平原にポツポツ、家の周圍に少々樹を見る外無邊際の大平原、樹は絶對になし、三時、南方遙かに黄金色銀色に輝く湖沼を見る、千二百米、機やゝ動搖、三時七分遙か南方雲際に黄金色の水の流を見る、松花江の流か、宮崎君散文詩を作りて余に示す。



（一）

枯野原に　海の如き　湖沼
めぢのかぎり　枯野原　夕日は
沼々の水にかゞやく
山なく　岳なし　陸の海　夕日は
機翼にて見えねど　入るに山なし

（二）

機は今千三百五十米の高さを行く
夕日燦として機を射れり
脚下に民家點在す青き垣あるもあり
土塀の内　家も人も土にまみれて
見わたぬもあり　車かよはぬ
レール淋しく　南に走れり

（三）

秋の織物　地のつゞく限りつらぬ
コバルトの水　隨所に散かばかくありなん
今機ゆれつゝあり　晴れたる空地に
接するあたり白雲たなびき地の際を見ず
眼下の村　家も垣も水にあらはれしか人を見ず
ノアの昔見し洪水の
あとをまのあたり　見る思ひあり

（四）

チチハルの官舎に松木中將と見えての歸途なり
嫩江を距てゝ我軍小兵を以て蘇炳文の
大軍と對抗しつゝ黑龍江州の治安を維持しつゝあり
今機上下にゆれつゝあり千三百米前後



日暮るゝ早きか地平線茫としてかすめり
三時二十分、千米、機やゝ動搖、左右一面の氾濫地帶に入る、九百米、砂に水を打つかけて、目茶苦茶に撒き廻したるが如し、三時二十五分、ハルビン上空に來る、三時半着陸、時計を二十六分進める。

着陸後飛行士の談

『往航安達城の上空にかゝりしとき、兵匪三千町の中を行進しつゝあつたので、高度を高くしました　今夜ハルビン方面を襲ふ話もあります、ハルビン、チチハル間直線二百七十五キロあります。』

四時半第〇師團の野戰病院を訪ふ、主務官の說明、

『こゝは始め第〇第〇〇混成第〇〇のものを皆入れた、今は第〇〇はチチハルでやつてる、水害の爲め患者は增加しました、明日遺骨を內地へ送ります、今は病兵六十九名居ります、多いときは百四十名、東支南部線不通のときは多かつた、最初（三月十七日からこゝでやつてる）から累計千五十八名延人員一萬を越えて居ります、內地の二等衞戍病院の二三ケ年分を

取扱つた、勤務員は職員六名、藥劑官二名、看護兵四十七名居ります、患者は駐軍長びくと戰傷なく病氣が多くなります、現在は戰傷十三名、傳染病三名、平病（外傷多し）五十三名居ります。』

ハルビン商工會議所を訪ふ。

**佐倉毅一氏**

『四月以後の最近の輸出入取引の具合を申上げる、特産物はこゝに三井、三菱、日清其他の個人が來て居り、其外にロシヤ側の易貿機關、デンマーク等の商人が來て取扱つて居る、取引關係は大連許りでなく、こゝへもドン〳〵來る、豆粕などこゝから直接輸出される、物に依つては大連商人から注文もある。

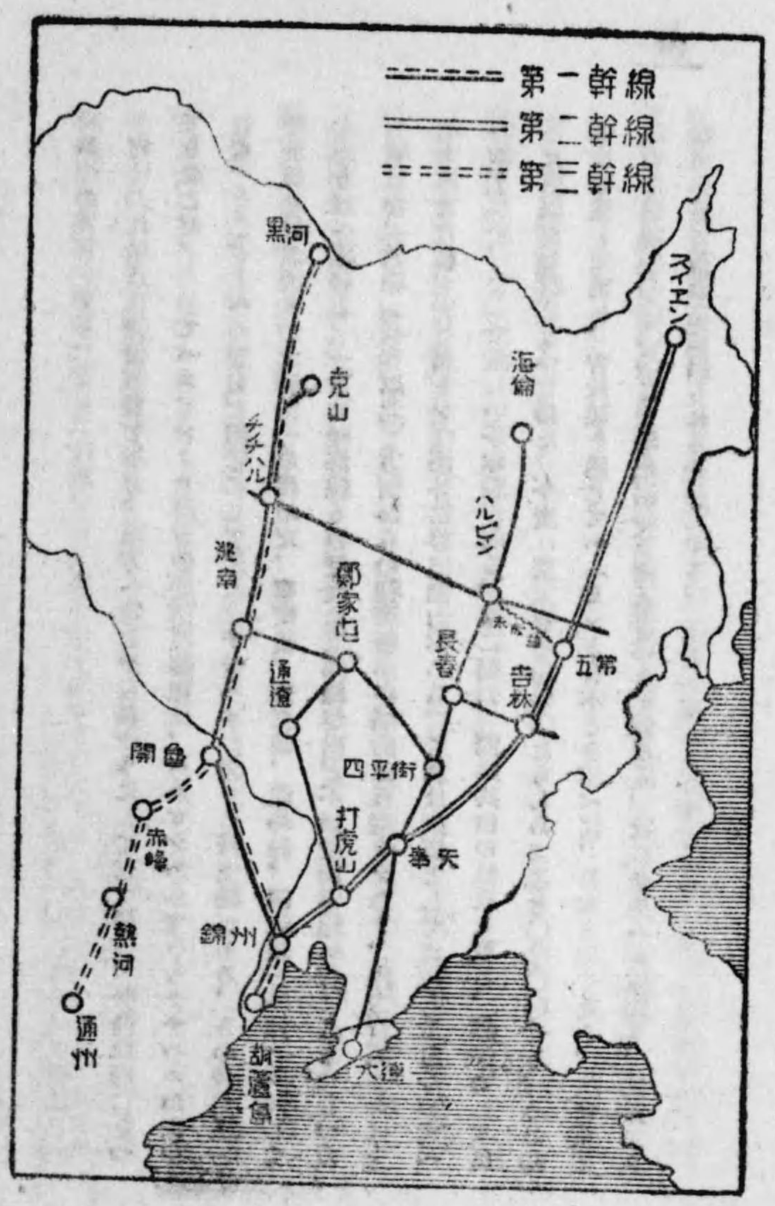
北滿は鐵道關係が非常に面倒だ、普通だと南へ行つては引き合はぬ、これは東支線が南部線の運賃をウンと高くしてた、これは政策的の運賃だ、ソロバンから來たものではない、ハルビンをロシヤが政治經濟の中心としやうとした、且つウラジオを輸出入の中心としやうとした、こう云ふ譯で一寸した引越でも、日本から長春までよりも、長春からハルビンまでが



高かつた。

尙ほ夫れ以外に特定運賃を極め、南方へ物をやらぬやうにして來て居る、勞農政府になつても同じだ、そしてハルビンより西方の所謂西部線は、ハルビンからするもチチハルからするも、ウラジオへの運賃を同じにして居た。チチハルの先きに齊克線がある、あの齊克線と呼海線を結ぶ邊りが北滿第一の產地だ、事變後、齊克線、洮昂線、四洮線と滿鐵と共同して大連方面へ連絡し、一方は呼海線も事變後は東部線が殆ど不通故南部線へ行くことになつた。

特產物、北滿（長春以北）方面からの特產物が年額約五百萬トンあり、內二百萬トンは土地で消費され、三百萬トンは海外に移出能力がある、これは鐵道としては誰しも自分の處へ引張りたい、そこで激しい爭奪戰が起る、常に割引、割戻其他の政策を取る、滿鐵としては東支南線が邪魔になつて居た、今度は東支線を〇〇〇ならしめて之を〇〇〇〇せる、その爲め拉哈線を完成し、吉敦線を通じてハルビンと日本とを結べば、日本と近くなる、次に東支線の東部線〇〇〇〇に、松花江の下流と吉林とを續ける、次にチチハル方面も、洮南より錦州を經て葫蘆島に出られるやうにする。






輸出の關係、雜穀は朝鮮へも行く、滿洲大豆は獨乙へ行く、潰して油を搾る、豆粕は日本へ行く、之等は大部分浦鹽經由なりしが、今は東支東部線が不通だ、開通して居ても日本の不景氣の爲め、豆粕工場(油坊)は休止狀態だ、製粉は治安維持が出來ぬために地方に行かず、此處(ハルビン)丈へ供給の爲め二三やつてるに過ぎぬ、メリケン粉は此地方へは入らぬ、メリケン粉は世界的のもので、どこへでも動くが、ハルビンにはまだ分らぬ。

小麥は北滿のものが世界第一だ、今まではロシヤのもの、今は北滿が第一だ、此處のパンは實に美味だ、現在三井三菱あたりも日本へ出す、然し小麥は作不作非常に激し、雨が多いので今年は駄目だ、輸出はこれ位だ。

取引としては、豆、小豆、豌豆、製油原料、粟、黍。

輸入の關係、今まで浦鹽を經るものは皆大量貨物だ、麻袋、鐵板類、器械類、砂糖等、その他日本からは橘柑、玉葱(北海產)、北海道の海產物等。

以上の外の日本で云ふ雜貨類は殆ど大連經由だ、最近は小包輸送される雜貨類が非常に多い、小包は運賃が遠近に依り同じ、且つ支那側の稅關を大體免れて居た、日本側の手心で、

少し許り税金をかけて大部分は無税だつた、其他鐵道貨物も税關の關係で餘り無法な税金を取られなかつた、其他銀行其の他の原因に依り、南を通つて來たことが多い、ウラジォから も少しは入つたが、税關が知らぬ故課税嚴重だつた、その爲め大部分は南方から入つて來た。

輸入商品はハルビンで如何に捌けたか、現に日本商店が繁華に見える、これは國家として喜ぶべからず、互に日本人が共食ひしてるに過ぎぬ、今までハルビンの日本人は三千九百人であつたが、現今では六千人近く居る、小商人は四千人足らずの需要者相手が六千人となつた、又軍隊も增へた、女郎屋等も繁昌してる、それで取引商が增へた、視察者も大分增へて來た、そこで小商人が急に復活した、然しこれは日本人の共食ひの商賣だ、一般の輸出入の商業は非常に疲弊して居る、地方が不安の爲め、需要が來ぬ。

ハルビンが北滿の中心たる所以は、こゝが交通の要點だからだ、銀行等もこゝが中心で各方面に連絡がある、輸出はハルビンに事務所があれば、沿線各地どこでも取引が出來た、故に中心となつた、輸入の方もこゝに來てこゝから皆はけて行く。

事變前はこちらから大阪へ行つて居つた、こゝの日本人から云へば日本貨物の信用を落し



てよくなかつた、大阪から云へば川口商人（支那人）を大事にして居た、日本貨物に對する惡聲も一つは川口の支那商人の惡いためであつた、又一方川口商人のある爲め、大阪商人にはこちらの商人の信用其他が分らなかつた。

滿洲國が支那を外國と扱へば、結局大阪との取引は將來盛となる。

税金は從來は日本人は治外法權國民だとして拂はぬ、然し市の税金は拂つて居た、相當高いが日本に比すれば安い、地方に行けば拂はなくてもいゝが、萬事その土地の世話になつてる故、拂つて居たのが多い。

銀行は今まで特産物に對してはよく金融をした、直ぐ金に換へられるものだからだ。

支那人の金融はどうか、日本の金融業者も支那側に金融したかつたが、土地の權利が不確定で、事故のため損をする危險多き故、今まではあまりせぬ、商業上の金融も擔保があればする。

從來日本人からの不平は、日本の銀行は日本人に對しては酷で、支那人には寛大だと云ふにあつた。

ヤビール一圓五十錢は仕方がないとして、日本ビール二圓五十錢はどうだ、更に何の拍子か間違つて、宮崎君が獨逸ビールと云ひ、僕がミュンヘンと云ふたら、本當に獨逸ビールの栓を拔いて來た、幾らだと思ふ、驚いてはいかん、一本六圓也だ、又果物はいかゞと云ふので、何の苦もなくウンと合點いたら、リンゴ四ツ五ツ葡萄三房許りの一皿が來た、臍の下に力を入れて聞いて呉れよ、この一皿が金十二圓也だ、どこを押せばそう云ふ値が出るのだらう、もうビールやリンゴを見るのも嫌やになつた、退却、轉じてフアンタイゼーキヤヴアレーを見る、今度は案内人ワロージヤーが笑ひ事じやないと云ふので、うまく交渉してウォツカ及簡單な食事を金六圓也で注文した、之で安心して食べ切らないやうにチビチビやり乍ら見る、このキアヴアレーは中々立派だ、踊る、踊る、夜を徹して躍る、國衰へて踊り依然たるロシヤの人々が幸福そうでもあり、可愛相でもある、宮崎君嘆して曰く、この心の底から踊りを樂しむロシヤ人に幸福を與へてやりたいなア、午前三時宿に歸る。

ハルビンと云ふ處は面白い處だ、日露支三國の勢力が落ち合つて渦を卷いて居る、そして其の勢力の一進一退が、色々な空氣を釀し出す、初めロシヤ人が全盛を極めたが、革命以後段々



支那人が威張り出して巾を利かせた、處が昨年秋の滿洲事變以來日本人が頓に元氣を出して、猫も杓子も肩で風を切つて居る、キヤヴアレーで日本の勞働者や藝者がダンスをやつてるのを見ると少々汗顏の至りでもある。

**十月十三日**

午前九時宿を出で長春領事邸を訪ひしも不在、取次の方に謹んで在哈中の御厚志を謝すると共に、御健在を祈る旨を傳達せられんことを乞ひ、飛行場に至り九時四十五分長春に向け出發す。

朝日に映ゆるハルビンよ、町の彼方溢るゝ松花江よ、　、　、別れを惜しみつゝ一直線に南下す、松花江の大氾濫を右に見渡す、天空一碧、溢るゝ水地平線に沒す、高度早くも六百、左方太陽燦として輝き、部落の庭に橙色の物乾しあり、九時五十五分、右手遙かに東支南線列車の南行するを見る、戰沒兵士の遺骨を乘せたる列車だ、十時二分、五百米、

移民問題、農業移民として土着民との競爭は出來ぬ、先日三重縣の方からハルビン附近で蔬菜溫室をやつて見たいがどうかと聞かれたが、今迄の方法を機械力でやるとか、副業としてやるとか、何とか違つた形(智識)に於てやれば、可能のやうに思はれると答へて置いた。

此處に入つて來る雜貨は殆ど日本品だ、今までは支那方面から支那物綿絲布など入つて居た、從來は日本品よりも多かつた、値段の關係から、これからは輸入稅——支那を外國扱ひして關稅をかければ——の關係で日本品がよくならう、こゝでは綿絲を輸入して家內工業的の仕事が大分出來つゝある、然し機械工業はまだ大規模になるかは問題だと思ふ。』

六時更に民會を訪ふ、**長濱政一郎氏**說明の任に當る。

『事變當時は色々心配した、鮮人に二三犧牲者が出來た、然し此の程度で濟んだのは、內地の方々の御盡力の賜であり、又軍部の御力で感謝に堪へません。

民會は平常內地の町村役場の仕事をして居ります、土木はないが敎育衞生救護等をやつて居る、自治體と同じく評議員があります、公課金は甲種(俸給生活者)、乙種(營業者)、雜種(特殊關係の人々)に別れ、歲入約三萬圓、國庫補助七千圓、其他雜收入三千圓、合計四萬圓、



歲出は敎育費二萬圓、衞生費千圓、社會救護費八百圓乃至千圓、其他主なるもの人件費約一萬圓であります、市長に當るのが民會長、議員は評議員と呼び、公課半年以上完納者から選擧します。

此の民會堂は二十一萬圓で作つたのですが、今は困つて居ります、在留日本人は今は六千人以上あり、仕事は增へました、中產以下が多く、日々十人位づゝ仕事の相談に來ます、職業紹介所もないけれど、出來る丈世話して居ります。

主權が變つて仕事はやりよくなりました、懸案中の商租權(永代租借權、商工農を含む)は解決しました、昨年までは仕事をやらすと云ふて居つてもやらせなかつた、第一浮き上つたのが東拓會社です、數百萬圓が息を吹き返した。

市政籌備署(市役所)とは沒交涉です、こゝから稅金をかける、日本人にも課して居るが日本人は多く納めない、國籍法の制定の仕方では納めるやうにならう、從來は領事の考へで違つて居た、大橋領事は納めなくていゝと云ふ態度であつた。』

夕食後、ロシヤ街を廻り、十時すぎ森君と朝日キヤバレーに行き宮崎君と一緒になる、ロシ

ヤビール一圓五十錢は仕方がないとして、日本ビール二圓五十錢はどうだ、更に何の拍子か間違つて、宮崎君が獨逸ビールと云ひ、僕がミュンヘンと云ふたら、本當に獨逸ビールの栓を抜いて來た、幾らだと思ふ、驚いてはいかん、一本六圓也だ、又果物はいかゞと云ふので、何の苦もなくウンと合點いたら、リンゴ四ツ五ツ葡萄三房許りの一皿が來た、臍の下に力を入れて聞いて呉れよ、この一皿が金十二圓也だ、どこを押せばそう云ふ値が出るのだらう、もうビールやリンゴを見るのも嫌やになつた、退却、轉じてアンタイゼーキヤヴアレーを見る、今度は案内人ワロージヤーが笑ひ事じやないと云ふので、うまく交渉してウォツカ及簡單な食事を金六圓也で注文した、之で安心して食べ切らないやうにチビチビやり乍ら見る、このキアヴアレーは中々立派だ、踊る、踊る、夜を徹して躍る、國衰へて踊り依然たるロシヤの人々が幸福そうでもあり、可愛相でもある、宮崎君嘆して曰く、この心の底から踊りを樂しむロシヤ人に幸福を與へてやりたいなア、午前三時宿に歸る。

ハルビンと云ふ處は面白い處だ、日露支三國の勢力が落ち合つて渦を卷いて居る、そして其の勢力の一進一退が、色々な空氣を釀し出す、初めロシヤ人が全盛を極めたが、革命以後段々



支那人が威張り出して巾を利かせた、處が昨年秋の滿洲事變以來日本人が頓に元氣を出して、猫も杓子も肩で風を切つて居る、キヤヴアレーで日本の勞働者や藝者がダンスをやつてるのを見ると少々汗顏の至りでもある。

**十月十三日**

午前九時宿を出で貴賓室長邸を訪ひしも長官不在、取次の方に謹んで在哈中の御厚志を謝すると共に、御健在を祈る旨を傳達せられんことを乞ひ、飛行場に至り九時四十五分長春に向け出發す。

朝日に映ゆるハルビンよ、町の彼方溢るゝ松花江よ、　　、別れを惜しみつゝ一直線に南下す、松花江の大氾濫を右に見渡す、天空一碧、溢るゝ水地平線に沒す、高度早くも六百、左方太陽燦として輝き、部落の庭に橙色の物乾しあり、九時五十五分、右手遙かに東支南線列車の南行するを見る、戰沒兵士の遺骨を乘せたる列車だ、十時二分、五百米、

機の直下に立派な町見ゆ、雙城子だ、城壁、壕見ゆ、六百米、部落と部落との間、處々に樹木の塊り見ゆ、墓だ、此の地方一帶はハルビン以西と違ひ部落此處彼處に散見する。

十時二十分、左下に兵匪か、馬賊か、保安隊か知らねども、其の數五六百白馬黑馬に跨り石頭城子へ向ふを見る。

十時二十七分、紙片

『第二松花江です、百五十キロ下流で本流に合します、ハルビン長春の中間です。』

縱横曲折目茶苦茶の大河、十時三十五分、動搖やゝ強し、グツと降る毎に心臟がキユウツと緊め付けられる心持ち、閉口、閉口、機下に芋虫の如き汽車、ノロノロ北行す、高度五百五十米、グランと下る、胸から心臟が離れるやうな氣持、十時四十分、列車又北行するを見る、クラーツと下る、參る、右手にやゝ大きい町、十時四十四分、紙片來る

『張家灣デス、匪賊ノ根城デス、先月末頃マデハ盛ニ附近ヲ横行シテ居マシタガ、コーリヤンガ伐採サレルト同時ニ、各所ニ餘リ見受ケラレナクナリツヽアリマス。

今デモ到ル處匪賊ハ居リマス、不時着陸シノラ首ハアリマセン、然シ汽車ヨリハ安全デス、



唯一ノ交通機關ハ飛行機デス。』

飛行機は搖れる、紙片には威かされる、ヒヤヒヤしてると、機の眞下には匪賊數十皆馬に跨り、部落の外れを右往左往して居る、飛行機は搖動しながら馬鹿に早い、匪賊を避ける爲めかも知れん(十時五十分)。

十時五十二分、高度二百五十米、二百米、大地に擦れ擦れに線路上を走る、百八十米、少々不安。

十時五十五分、汽車北行と擦れ擦れ、百七十米、氣持ち惡い、少し冷汗が出る、三百米、四百米、四百五十米、段々氣持ちよくなる、十一時十五分長春着。

時計二十六分を引戻す。

滿蒙旅館に入り、以後の日程に付き例の如く甲論乙駁の委員會開催、二派に分れて調査すべしとの意見出づ、贊成！ 佐藤君及余は即刻疾風の如く出發、十二時三十分長春發にて吉林に向ふ。

チチハルを見て來た眼で眺めると、沿線の風物がまるで開けて居る、滿洲特有の牛に似た豚

が高粱刈り取り後の畑をさまよふて居る、下九臺驛、老母が長い煙管を喰へながらホームを歩く、白襟章、白布卷の巡警が間抜けな姿で飛び廻る、汽車が動き出してから、取急いで發車の合圖をして居る、劒付鐵砲の保安隊が居る。

吉林驛到着、驛前から洋車に乘つて町を進む、いゝ町だと聞いたが、埃と塵でとても汚ない、可なりの道程を行つて松花江岸の滿鐵公所に着く、汽車や馬車は十錢やればいゝと聞いて居たので十錢やるとブツブツ云ひ乍ら歸つて行つた、少々氣の毒な氣がした。

**濱田滿鐵公所長**

『木材の一ケ年取扱額は百萬石位です、筏は三十萬石以内で其以外は吉敦沿線から汽車に依つて出て來ます、今まで此處で取扱つた最高は百二三十萬石です、主たるものは滿鐵の枕木です。』

を其の宿舍に訪ふ、湯上りの打ち寛ろぎたる姿にて面談、

『彼等はあつちこつち順繰りに騒ぐ、此方は宮張海と云ふのがあつちの李海青と云ふ處だ、當方には大刀會、紅槍會もある、双河邊りに根據を構へた、元はなかつた、それが反軍に合



流した、私等は今年の二月から四月までハルビンに居たが紅槍會や大刀會には打突からなかつた、始めは日本兵も吃驚したが今ぢや面白がつて殺す、然し支那兵は全部殺られる、支那兵の歩哨が此の間も六人殺された、當方は治安は非常によくなつた、九月下旬からよくなつた、私の方は第二松花江以南全部、日本の一倍半で奉天、安東、遼河までが警備區域になつて居る、手薄は手薄だ、吉林などは[illegible]で警備して居る、然し五十歩百歩です、少し增せばやりいゝがなくてもやれる。

今度の私の滿洲駐在は日露戰爭より長い、日露戰爭は正味十四ケ月でした、今度鴨綠江の奥の方で　　に戰死者四人出ました、兵は皆元氣です、私の[illegible]はこんなに長い、そして今の二年兵は昨年からずつとやつてるが、飽きたやうな顏をせぬ、死ぬことを何とも思つて居らぬ、大悟徹底、隊長もどちらかと云へば非常に樂だ、だから何だか兵が可愛相です、國論が統一されたことは兵の志氣に非常ないゝ影響です、これでシベリヤ事變のやうに、どうなるか分らぬと云ふので第一線に居つたのでは困る、それが今度は少しも嫌やな顏をせず、こゝには　　しか居れぬ、手薄に乘じて匪賊等も私の宿近くま

で來た、然し動かなければ大丈夫だ、夜になつたらどんなに襲撃されても、貴方達でもどんなに襲撃されても動かぬことですな。

私の　は一番健康がよくて、眞面目です。

私の　の兵は物を買ふのに敬禮して買ひます、それなどは非常に評判がいゝ、來る前に駐剳の教育がしてありました爲めに實に緊張して居ります、あとの[illegible]はそこは私のよりも具合が悪い、と云ふのは突然出征だと云ふので初めの勢がいゝ、そこで馬鹿にしてかゝる、元來東北の兵はおとなしくて勇敢だ、東北、水戸、群馬、信州九州等はいゝ、あともいゝが、上述の地方出の兵は、比較的將校が指揮するのに樂だ。

今のは　が指揮する程の戰爭はない。

昂々溪、チチハルの戰爭は私等も初めてだつた、一ヶ所へ二分間位猛烈に射撃する、顏を擧げられぬ、そこへ飛行機が襲ふ、實に壯快たつた、見て居て氣持がいゝ、砲彈の集中で少さくなつてしまつて、丁度これから歩兵の前進をやらふと云ふとき飛行機で打つ。

一番愉快なのは洮南の張海鵬軍が[illegible]許り來て居る、之は蒙古軍だ、蒙古軍は將校夫人



が皆來て居る、馬に乘つて居る、西洋の女のやうな帽子で、旦那と一緒に馬を進める、出動のときはチャンと長靴をはいて、スタイルはいゝ、宿へ着いても旦那の世話はせぬ、自分は二人位の從卒を連れ、ピストル位持つてる、私も驚いた、軍は全部騎馬だ、偉い綺麗な兵隊が居ると云ふので問題になつたら、いやあれは奥さんだと云ふ譯だ。

向ふの軍隊では馬は自分のものだ、非常に大事にする、戰をするときにも日本の騎兵は百人位、彼等は三千からある、並んで行つても敵が居て、攻撃をするのは日本兵だ、彼等はやる眞似をしてやらぬ、追撃のときは非常な勢ひになる、それで皆奪つて來る、このときは五十人が三百人を追ふ、取る方は非常に喜ぶ、取つたものは皆彼等に呉れてやる。

今こつちに來て居るものは、毎日日本將校が教育して居る、人間ですから注意深くし、仲よくしてやれば餘程親しんで來ますな。

昨年事變前から十月末までに冬營準備をした、其頃は[illegible]許りでした、準備をすつかりしてしまつたが、政府の腹は決らず、冬營準備にゝ　以上使つてはならぬと云ふ、これには弱つたですね、然しその頃は緊縮政策時代だつたから無理もない、私は軍隊に對して

常々矢釜しく云ふてる、雨さへ降らねば自動車も使ふな、いくら臨時費でも無駄をするな、其の代り兵の暖房設備、夏の日覆、食物等は注意して居る。」

夜、滿鐵本多靜氏の案内で夕食を共にす、余は同郷の出身内田利平君に面會を望む、本多氏の斡旋で漸く連絡が取れ、間もなく内田君も見える、内田君は碓氷郡岩野谷村の人、今は吉林省公署警衛隊補佐官として陸軍少佐の待遇を受けて居る、**内田君の話**

『滿洲國財政總長吉林省長熙洽氏が明治四十一二年頃士官候補生となつて日本に來た、自分は其の時騎兵第十五聯隊に居つて熙洽氏の軍服の着せ代へ其他一切の世話をした、其時の茶飲み話に、今に國に歸つて時を得たときには、又自分も御手傳ひしたいと云ふたことが二十三四年後に實現したのです、今も尙ほ省長は師弟の關係を忘れず、自分を丁重にして呉れます、今は家族も一緒に連れて來てます、明年あたり長男もこちらへ呼んで働かせる心算です、今は輔佐官として少佐の待遇です、周圍の方々も省長の關係を考慮して大事にして呉れます、坐骨神經を病んだがもう大丈夫です、吉林警備隊關係　　、こゝの軍人としては警衛隊は約　　です、鐵道の方は鐵道警衛隊が居ります。



故郷の方の人々で就職等の希望は、まだ自分の手で解決出來ないが、當地方へ視察に御見えの方々に對しては、出來る丈のことはしたいと思ひます、私は當地に永住の覺悟ですが、日本人であることゝ在郷軍人であることゝは常に忘れずに居ります。』

**滿鐵本多勝氏**

『木材一ケ年三百萬石、滿洲全體の木材六十二億石内四十八億石が吉林にあります、年三百萬石づゝ伐つて植えて行けば、三億石あれば循環出來る、それが四十八億石あるのだから、殆ど無盡藏だ。

樹齡は大きなものあり、二百二三十年位が最高です、夫れ以上は自然淘汰されます。

吉林中心の木材は松花江と牡丹江の上流の木材です、東支鐵道の東部線、朝鮮の鴨綠江の上流あたりからも出ます、樺甸縣、濛古縣あたりが、松花江上流の林場として有名です、これは森恪さんが二百萬圓の資金で開放せんとしたものだとの事、排日論の爲め進捗せず、大倉系と王子製紙系との混戰があつた地方です。

永衡官銀號の抑へた林場にいゝのがあります、吉林大洋が不換紙幣になりそうだつたので、

發行保證の財産としていゝ林場許り抑へた、之を今でも開放せよと云ふ聲が盛になります。

敦化まで入らなければ吉林に入つたとは云へませぬ。

木材の利用は枕木です、滿鐵は年四十萬挺（四挺が一石）を使ひます、滿洲國の鐵道を管理することになれば百四五十萬挺を要します。

製材の中心は拉法（ラフ）、蛟河などです。

吉林の町に五十六軒の材木屋がある、殆ど滿鐵の枕木許り取扱つて居ります、之に合格しないものを支那の鐵道に賣つて居りました、滿鐵は檢査が嚴重なので、百本納めるには二百三十本位を要します、木材はクルミ、赤松などです。

こゝの吉林鐵道は支那の手で作つたものです、その枕木は滿鐵の檢査にはねられたものを使つて居ります。

パルプ、製紙用人絹用が出來ます。

樹の種類は針葉材、濶葉材、總てのものがあります。

吉長線が丸太までも割引運賃（今までは製材丈）を課すれば內地へも入り得ます、但し內



地で木材に關稅を課すれば問題です。

大豆、雜穀等は五常平野がある丈です。

煙草はこゝは有名な產地です、これは支那人の嗜好に適して居ます、臭ひが强いが作るときに工風すればいゝ。

玉葱が非常にいゝ、敦化、龍井村あたり實に粒の揃つた玉葱が出來る、長春を控へて將來有望である、今は北海道から來て居る。

ホップ（ビールの苦味）世界にこゝ程いゝ適地はない由、ビールは開ければ開ける程飲むから有望た。

亞麻、蘇子、油を取る。

高粱は吉林が止りだ、こゝは海拔二百三十米、これより奥は高粱は駄目です。

移民、松花江は吉林を中心として四月の下旬から五月の五日までに解氷する、解方に武解と文解とある、武解と云ふのは上流から先に解ける、文解と云ふのは下流から先に解ける、古老は武解の歳は順調だが、文解の歳は變調だと云ひ傳へて居る、成る程上流が南だから武

解の方が順當な筈だ、それで作物は五月から九月迄に實つて收穫してしまはなければならぬ、北海道の赤毛と云ふ稻は此の邊に適當する、後の七ヶ月の募方で移民の成功不成功が極まる、この邊は木材の關係上樵が出來る、炭が出來る、雪は二尺乃至三四尺位、木材は冬伐る、夏を嫌ふ、そして氷の上を橇で運ぶ、向ふの岸から一本づゝ流す、之を管流と云ふ、そして適當の處へ來て編筏をする、その筏が今年は匪賊に止められた、三百萬石の中、筏と鐵道と半分つゞ運ぶ、それに煙草を作つて置けば女子供の仕事は充分だ。

從來支那人や朝鮮人は作つたら決して肥料はやらぬ、實際二三十年間は肥料はなくても出來るらしい、然し將來を思へば肥料を供するの必要はあらう、一部分なれば必ず之を返して置く必要はある。

それに組合制度の研究、作つたものを纒めて賣る方法を研究すべし、買ふ場合も又然り、私はこの組合制度の實施が必要なりと思ふ。

學校病院は政府でも面倒を見る必要あり、寺子屋式學校がいゝ、師匠は僧侶、佛教關係の僧侶がいゝと思ふ、御經を一年許り習はせて、あと一年許り色々準備させて當方へ寄こせ、



葬式も出せれば先生も出來る。

こゝの學校は現在滿鐵關係日本人兒童百五十人と支那人の極くいゝ處を入れて居る、支那人の學校は六十幾つある。

移民が來るのなら矢張り東北地方の人々が來て貰ひ度い、且つ團體生活の出來るやうな素養が欲しい、吉林は最も日本らしい、吉會線が通れば北海道よりも寧ろいゝ、國防上の意味なき移民は先づこゝへ連れて來い、夏は朝三時に夜明け、暗くなるのは午後八時だ、作物の實る時水があつて時間が長い、降雨量は一年八百粍、東京は千五百粍、北海道は千四百五十粍、冬地下六尺まで凍る、これは耕作の必要を少からしめます。

北滿方面の作物よりも東滿が有利だ、餘計のものを賣るのに、港へやるには吉林からすれば、一車に付いて百圓違ふ、つまり百圓丈收入が多いことになる。

米は吉林米とて有名なものです。

石炭、百十二ヶ所登錄されて居るが、今知られて居るのは營城子炭、奶子炭（これは二尺三尺六尺の層）等。

金、三十六ヶ所屆けてある、有名なるは夾皮溝、卵大の金塊も出ることがあるとか。
鐵、九ヶ所、其他銅、鉛、マグネシューム。
吉林は割合に富裕な處です、滿洲政府要人は大部分こゝの出身です、熙洽は年俸二萬元だと云ふが、月二萬元の收入あらん、兎に角こゝには金持ちが多い。
交通は新京と吉林とを自動車道路で連絡する計畫あり、完成の上は一時半で往來出來る、道路の發達は急務です、匪賊討伐の爲め警察道路を作る要あらん。
こゝでは道の代りに馬を使ふ、重いのは十七頭から馬をつけて居る、馬の値段は乘れる馬が一匹四十圓、駄馬はもつと安い。』
東京旅館と云ふ素晴らしい名前の宿に泊る、然し建築は一階建の支那式だ、聞けば最近まで病院だつた由、佐藤君と二人で寢臺を並べて寢た具合は入院患者と云ふ恰好。
吉林の夜は靜寂そのものだ、窓を排して仰げば、澄みたる月、皎々として冲天に輝く、あゝこの月をあの悠々たる大江（松花江）の上に眺めれば又特別だらうなア、などゝ思ふと東京の空が偲ばれる。



## 十月十四日

朝、內田利平氏夫妻息女相携へて旅館に訪ふ、余喜んで之を迎へ、內田氏へは、お國の爲め滿洲國のため自愛自重を祈り、又家族各位には向寒の砌り切に健康に注意せられんこと望む。
發車まで約一時間、內田氏の案內にて自動車を驅り、市街を見物す、汚なけれども何となく落付きあり、松花江岸に出づ、天日麗らか、大江悠々として、西より東へ裏S字形を畫く、江中に名物筏橫はり、渡船動く、風光明眉、吾が京都の感。
九時、內田夫妻息女、停車場に見送り、土產物さへ頂く。
車中にて特務機關神田大尉に會ふ、カーキ色の青年團服、中折れ帽、長靴、顎に長髯を撫す、滿洲各地を跋涉して殆と至らざる處なき由、第一線に活躍する人物の一。
河灣子驛、此處は此の間から最も危險多かつた土地、驛舍に銃彈の痕點々、然し今は餘程住民も歸つて來た、これから二里も入れは食ふものは何にもない、鹽がない、豆の青い處を取つ

て食つて居た、九月十七日頃討伐した、食ふものは亞麻丈、鹽、豚なし、人も殆ど居なかつた、今は餘程歸つて來た。

卡倫（カルン）驛から關東廳の警官六十名許り乘り込む、聞けば張家燒鍋に鮮農二百名の米の取入れ保護に行つて來た一隊（十二日間）、歸途十家堡子で騎馬匪賊三十名に遭遇交戰し馬二頭を倒し馬賊一名重傷、當方駄馬一頭死し車夫一名重傷との事、彼等は語る、

『米は籾の儘持ち歸りました、糧食は持つて行つたが二三日でなくなり、あとは穫つた米を玄米のまゝ煮て食べました、吾々が行つたので馬賊は逃げました、そして十支里以外で包圍體勢にあつた、十二日間風呂には入れませんでした、寢るには毛布を持つて行きました。』

車内の風景、一等車乘客十人の内八人までは日本人、十二時半長春着、車内で知り合つた畫家と彫刻家に連れられ、城内に行き古墨を買つて來る。

取急ぎ宮崎、森、岡本三君の後を追つて滿洲政府に行く、總務廳長阪谷希一氏其他の政府要人に會ふ。

**阪谷希一氏（後れたので財政問題を聞き洩す）**



『治安の問題、知らしむるが必要かどうか、分らなくてもよくなつて來れば——自然いゝと云ふ風にすればいゝか、私は自然彼等が衣食に安定すれば、よくはないかと思ふ、こゝに革命本部を作ると云ふなら、宣傳部も必要だが、こゝは日本と微妙に一致した王道を基とする國故、宣傳はよして自然によくやることがいゝと私は思ふ。

移民問題、滿洲國とすれば、日本人官吏の頭と滿洲國官吏の頭とが中々六ケ敷い、この國人は日本の指導を仰がうとする、然し山東、河北の人間が澤山居る、そして向ふと常に聯絡がある、これをお前達は來るな、日本から丈はよいと云へるか、これが中々六ケ敷い。

も一つは移民がこゝに出來るか、どうしてもやると云ふのと、大農式（ファーマー）でなければ駄目だと云ふのと二つある。

鐵道の將來、これは新國家開發の鍵です、これに付ては今申上げるのは避けたい、〇〇〇〇〇〇、これは今後に付て現はれて來ると思ふ。

豫算は一千五百萬圓の豫備費を置いて、必要のものは豫備費から出して行く。

現在の滿洲國の軍隊は十二萬乃至十三萬ある、これは將來軍政部でも成るべく裁兵せんと

する考へだと思ふ、軍政部の費用は月二百五十萬圓年額三千萬圓を限度として居る。

外交の問題、ロシヤに對し承認を求むる爲め動く必要ありや、これは總長や大橋君の意見も知つてるが、吾々も贊成して居る、ロシヤにどこまでも○○○○○○○○○○○○○○○○○、滿洲國を固めて行く上からは、意思相通ずるやうにすることが必要だ、治安の問題もロシヤと張學良との關係が明瞭となれば、餘程やりよくなると思ふ。

統制經濟の問題、滿洲國の當局としては、如何に考へ居るか、これは滿洲國內には成るべく必要なる限度に於て日本人が入る、南洋委任統治の如くすれば、皆日本人にとられるぞと張學良あたりは宣傳する、これは可能か不可能か大きな問題だ、今は○○○○○して、吾々が必要の程度にリードする、石炭其他種々世間で問題になつてるものをどうするかは中々問題だ、然し綿や小麥などはまだ〳〵色々研究する餘地がある、吾々は今委員會を作らうとして居る、然し滿洲國の中に滿洲國の調査局を全部包容することは不可能だ、たゞ準備丈はして居る。』

**星野直樹氏**(財政部總務司長)



『吾々としては○○の經濟を無視したくないと注意して居る、其の一は九月十五日に支那との間に關稅の障壁を作つた、將來支那の商品に對しても關稅を取る、それで日支がイクォルオポチュニチーの立場になつた、これは大局から見て○○の商業上の立場が大變堅くなつて來た。

稅は地方稅も取つてゐる、モエン、シヤエン(?)其他雜稅を取つてる、縣治の費用は國から出して居る。

稅收入は奉天省で事變前に八百萬元で滿洲國全部で其の倍の千六百萬圓だ。』

**阪谷希一氏**

『執政の地位、執政の地位の長からんことを望む、政治の責任は執政自身が負はれる、事實上は國務總理及各部總長は行政大臣として執政を輔弼して居る、其の意味から云へば執政自ら色々云はれることは六ケ敷しからう、超然たる立場に居る譯です、外國に對してはチーフ、エギゼキューチヴと稱して居ります、舊清朝の人々は復辟なり又は大統領ともしたいと思ふだらう、然しこれは六ケ敷い、又事實上は何の必要もない、こゝで滿洲國となつても各省の

考へは各省をしてやらしむる、中央銀行を作る、前は各省の官銀號は自分のもの、今度中央に集めることになると、丁度廢藩置縣の行はれざる日本のやうなもので、急激に統一したがると面倒が起る。

合衆國のときのやうにデモクラチツクの民族がやつたのなら、ステーツと云ふものが強い、ユーナイテツトステーツ、オブ、マンチュリーと云ふことも一つつ案かも知れぬ、今は一の中央集權の形となつて居る、之を批評する人間は支那はエゴイズムで出來てる、この國を統一することは無理だと云ふものもある。

國籍法、戸籍法、段々と考ふべき問題だ、今直ぐに日本なんかの秩序立つたものを、持つて來るのは無理だ。』

**星野直樹氏**

『附屬地では犯人が附屬地外へ逃避して困ると云ふが、裏から云へば附屬地などがあるからいかんのだといふ、犯罪の件は割合にうまく行つて居る、脫稅の如きは日本より反つてうまく行つてる、例へば印紙稅の如きは日本より餘程眞面目にやつてる、支那の商人は必ず正確



にやつてる、犯罪は法域が違ふから互に逃げ込まれれば困る、寧ろ附屬地に逃げ込むものが多いのではないか。

まあ、大きく〇〇〇置いて、あとは向ふにやらせる。

今は新稅はない、稅の不平はない、たゞ自分の處は匪賊が多いから、負けてくれと云ふのはある、下げたのは隨分あります。

稅の種類は出產稅（出荷稅）のやうに、こゝには交通稅系統のものが多い、出て行くときに抑へて取るもの。

これで相當の期を經て、安全だと極れば割合に早くよくなると思ふ。

實力から云へば奉天省五、吉林省三、黑龍江省二だ、而かも豫算を要求するときは各々十宛要求するといふので困る。

どうしても明に出來ぬのは秘密費（要人〇〇〇）です、總ては大將がやる、大將を怒らすと皆動かぬ、大將を摑んで置けばいゝ、これは止むを得ぬと思ふ、大體豫算の觀念なし、先づ請負だ。

支出は總務廳主計處、收入は財政部です。

この國は〇〇〇國家です、だから組織は實に立派です、そこで吾々は現在の役所をどんな風に抑へるかが問題である、そこで今年は治安の維持の外は一切相手にせず、と云ふ腹を極めて、他の一切は殆ど抑へてしまつた、そして抑へて浮いた金は全部治安維持に打ち込んで終ふ、と云ふ爲めに態々千五百萬圓の豫備金を置いたのです。

今の組織が問題です、省、縣とあるが縣は國家の機關です、そうすれば地方稅は取れぬ譯だ、實際は縣は自治團體と同じやうにやつて居る。

各地方の收入支出の關係は、收入から支出を除いて殘つたものを中央へ送つて居る、殘らぬものは其儘です、現在中央の統制下にある地方は〇〇〇〇です、統制に服せざるものは〇〇〇〇〇〇、この點は豫算編成と大きな問題です、實際は統制下に入れること不可能なものがある、こゝから行くのに一ケ月にかゝる處がある、そう云ふ處は均一な課稅をやつてるか分らぬ。

これ丈は殘して置きたい制度は、働けば殘るやうに出來てる、ある以上に成績を擧げれば、



一割やるとか二割やるとかする、又滯納をすれば罰金が多い、そこで以前は態々取りに行かずに置いて、期限過ぎに行つてうんと取ると云ふ惡辣なやり方をするのもあつた。

國防を日本に御任せすれば、一億二三千萬圓あれば足りる、一億四五千萬圓程度の收入は、もう少し治安が維持出來れば譯はない。

借款返濟の分は外國銀行が預からぬ故、中央銀行に保管してある、外國では取らぬ故今やつては居らぬ。

中央銀行八千萬元の準備金は、元各銀行にあつた金で軍部が抑へて吳れた。』

**横瀨花兄七氏**(農耕科長)

『米の如きは決して日本と打突からぬと思ふ、たゞ考へられることは、朝鮮では金を吳れて產米增加計畫をやつて居るが、あんな無理をしてやるよりも滿洲で作らせて、土地肥料勞銀の安い米を向ふへ持つて行くがいゝと思ふ。

又滿洲丈で云へば養蠶は適して居る、年二回は出來る、然らばどん〳〵やつたらどの位出來るかは人口の密度にも關係あるが、日本の五パーセントは出來やう、これらもコントロー

ルが出來ぬことは無からふ。』

**古海忠之氏**（總務科長兼特別會計課長）

『阿片の專賣、これは十一月十日頃からやる心算です、阿片は熱河にある、熱河の向背は阿片問題にあると云はれる、省首腦部の阿片に依る利益は支那に着くが得か、滿洲國に從ふが得かで極まる譯だ、これは治安の維持と密接な關係がある、財源としては最も優秀だから取る心算だ、そして之を吸食常習者に賣る、此の邊では藥の代りにやつてる。

これらをやるにしても附屬地が實に迷惑だ、これあるが故に阿片の專賣でも何でもうまく行かぬ、煙草の專賣もいゝがこれも附屬地との關係でまづい、砂糖又然り、もう附屬地もいゝ可減に滿洲國に返しては如何か。

阿片の專賣は國際法の問題もある、そこで吾々は〇〇〇、阿片を人道問題として取扱ふ。

**農務課長**

『移民問題は不可能でない、たゞ或る程度の學校、病院、警備もしてやらねばならぬ、こゝは土地が安い、稅金も安い、或る程度の土地を與へて、地代、利子を拂ふ必要がなくなれ



ば、支那人に對抗出來る、支那人は地代や高い利子を拂ふ故、こゝに苦痛がある、土地を與へ安い利子の金を廻してやれば出來る、朝鮮でも日本人丈かたまつてやつてるのは皆うまく行つて居る、結局團體移民でなければなるまい、滿洲國政府の日本人官吏は長春丈で三百人、滿洲國官吏は三千人居る。』

政府を辭し、更に轉じて午後五時大和ホテルに行き、長春民間有力者を以て組織する水曜會の諸氏と面談す、大原君其他諸賢の斡旋なり、出席者左の如し。

在鄉軍人長春分會長　四戸友太郎氏
長春商工會議所會頭　永原岩雄氏
長春地方事務所長　楢岡茂氏
長春地方委員會議長　勘崎仙英氏
長春取引所長　奥平廣敏氏
中央銀行顧問辯護士　大原萬千百氏

**四戸氏**

『治安維持の問題、兵力が足らぬ、要するに金の問題だ、それさへ皆さんの力で、或る程度の兵力は必要ならんとの意見があればいゝと思ふ、今うまく上手に軍隊に使へば犠牲は少ないと思ふ、もう少し増加の必要があらうと思ひます、此の間ある用件で内地に行つたが、國民の後援の模様は派遣師團を出して居る地方と否とで違ふて居る、一般の氣分が違つて居る、軍部は勿論縣や市の兵事課の熱心は同じだが一般の熱心は違ふ、これは寧ろ一般から廣く平等に兵を出して貰ひ度い。』

**勘崎氏**

『増加は必要だが、それに加へて第一は現在の兵員又は増兵を以て如何にするか、二つの方法がある。

第一は、兵匪にしても學良一派の義勇軍にしても、兵器彈藥がなくなると歸順を申込む、それを許した結果を見ると、兵器彈藥を受けると再び反亂する、だから幾分でも疑ある者は徹底的にやつつけろ、根を絶やして仕舞へ。



第二は、何時までも蠅の如きものを應對して居れぬ、故に各縣の治安に付ては、訓練して金を出して地方的に治安維持に當れ、それが急務だ。

この双方を併用せよ、各地に居る治安維持に當る者をよく訓練して、其村々で團結してやれば其村へは入れぬ、今は半分は兵匪半分は良民なる者が多い、例へば一軒の家に三人の男の子がある、すると一人は兵匪、一人は官兵、一人は農夫といふ風に手分けしてなつてる、こうして置くと兵匪の方からはあの家は仲間だから虐めるな、官兵の方からもあれは仲間だから保護してやれ、と云ふことになる、そして一人丈は食ふことが出來ぬから百姓をやると云ふ建前である。

**大原氏**

『滿洲國の警察並に軍隊に依頼することは不可能だ、結局日本軍並に日本人の手でやる必要がある、或る期間日本人の手でやれ、そして治安がいゝとなれば、これに頼る方が有利だとなつて、引繰返ることが少なくなる、それは現有兵力では不足故、何年間か増兵して日本の手でやれ、財政上の問題あらんも之に對しては滿洲國も何とか考ふべきだ。

私は治安維持の問題を云へば、常に常駐的に何個師團かを置けと考へて居る、又軍隊以外のは屯田兵式にして置け、いざと云へば軍隊となる、平時は百姓をやつて居る。』

**勘崎氏**

『滿洲國人は自ら守ると云ふ點は相當考へて居る、汽車で通つても土藏などには銃眼がある、それを擴大して一村は一村でやるやうにすれば、相當價値があると思ふ、新國家も此點は相當考へてやるべしだ。』

**大原氏**

『その自守觀念は强いとして、現狀ではどれに賴ることが安心か、現政府の云ふ通りにするがいゝと思へば、警固をやるかも知れぬが、今日ではまだ腹が極まらぬから不安なのだ、新國家に安心して賴ると云ふ觀念を起させる爲めに世話をしてやる必要がある、現在では自警は六ヶ敷い。

次に農業移民其他の移民だが、農業移民としては此の間の佳木斯（チャムス）のやうに、武裝移民でなければならぬ、此の間も敎化で熱心な移民がやられた、集團的武裝移民が必要だ、從來色々



やつて見たがうまく行かぬ、產婆もない、醫者もない、どうしても終ひには都會地に集まつて來る、滿洲國人は食ふた許りで滿足する國民だ、結局競爭することは出來ぬ、集團でなければ且つ餘程忍耐力がなければ困難だ、たゞ智識がある故、產物を集めたり、新らしい品物を賣るといふやうなことはよからう。

兎に角、健實な人が欲しい、經濟的に弱い立場にあつても、決心さへあればやり得ると思ふ。』

**永原氏**

『經濟的に考へてそうですね。』

**楢岡氏**

『支那人と同じではいかぬ、これは色々頭で考へて、優秀な技術方法でやらねばならぬ。』

**永原氏**

『一二年の經驗よりすれば、內地が眞に行き詰つて居れば、こつちへ來て不可能ではないと思ふ、優秀な技術、資本を持つて來ればやれる、親が居付けば子はもうやれる、そう悲觀す

る必要はないと思ふ。』

**勘崎氏**

『最近の移民論者は大なる希望を持つて居る、草靴の裏に砂金がついて來る、と云つた調子だ、これは相當注意の必要がある、昨年の八九月頃のこと支那の宿屋に泊つて見た、規定の料金は一夜哈大洋の十錢(日本の四錢乃至五錢)です、オンドルに木のマクラで十錢、それに支那人の上等食物肉饅頭を食つて支那酒を飲んで哈大洋の一圓あれば祝儀まで入れて餘りがある、此の考を以て支那人と伍してやるなら悲觀することはない。

朝鮮への移民も最初はうまく行つた、募集移民、これは貧乏人だ、二三年の間は內地に居る心算で、朝早くから夕方まで一生懸命に働くから必ず成功する、少し成功すると洋服が着たくなる、刻み煙草が嫌になる、終ひには鮮人を使ふて旦那樣になる、これでは失敗する。

今年など大工が來た、初めは食ふ丈でいゝと云つて來る、一ケ月もたつとすぐに不平を云ふ、すぐに監督になりたがる、これでは何の移民でも成功せぬ。

結論を云へば、始めの考へを以て終始せよ、と云ふことだ。』



**四戸氏**

『鹿兒島よりの移民の失敗なども決心が弱いからだ、四百人が百三十人になつたと云ふ話、一つの團體を爲して來たものが少しは我慢したらどうか、實に惜しいことをした、此の間の拓務省の世話した佳木斯への團體移民、これは餘程健實でした。』

**永原氏**

『鹿兒島のはハルビンに來るなり市內見物をして居た、不健實だ、人間と云ふ者は順應性があると思ふ、吾々は農業移民の苦勞はなかつたが、苦勞してる、覺悟があれば出來る。』

**勘崎氏**

『日本人は氣が早すぎる、滿洲國はまだ出來た許りじやないか、支那人が手を擧げて待つてる譯じやないのだ、私は萬寶山に行つて見た、こゝから四里半ある、土地は濕地だ、從來支那人が耕作しないものだ、鮮人の耕作は畦など付けてやるにあらず、耕してバラ撒く、そして米を取る、二百家族位は入れる土地だ、鮮人はどんどん行く、その調査はまだ出來て居ない、それ滿洲國が出來たと云ふと、直ぐワツショワツショやつて來る、悲觀論者も出る譯だ。』

**四戸氏**

『敦化の沿線は鮮人の移民が相當ある、萬寶山や敦化方面は水田地帶としてはいゝ處だ。』

**大原氏**

『僕も二三ケ月の經驗だが、農業移民の方針として、最低自給自足出來ればいゝと云ふ程度の農民をよこせばいゝと云ふ考へだ、ミニマムの希望丈でやつて行く、其の內組織の方を考へる、食つて行く丈と云ふならやれる。』

**勘崎氏**

『教育にしろ衞生にしろ、そう云ふ施設は少なくとも政府の援助を待たねばならぬ。』

**四戸氏**

『武裝移民とすれば在鄕軍人、若い者がいゝ、今度來たのも三十歲以下の者だ、三年間獨身生活を約した。』

**勘崎氏**

『鮮人移民の問題、日本の立場上鮮人移民は積極的にやる必要はない、鮮人が盛に來初めたのは今から七十年前だ、日韓合邦當時間島方面から盛に來た、寺內サンは政治的移民と心得て、之を阻止した、彼等はこの阻止を潛つて、而かも支那官憲の壓迫に堪へつゝ今日の八十萬人になつた、これはいくらでも增し得る、彼等には彼等の國民性がある、全部日本に〇〇〇〇は問題だ、滿洲國人も亦國民性がある、將來何時まで〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇だ、少くとも日本人をこゝへ植えるのが唯一の方法だ。』



**四戸氏**

『大工、商人が都市に入る餘地があるか、資本がなくても技術があり勤勉ならば入れると思ふ。』

**勘崎氏**

『仕事の結果はよろしい、賃銀は二倍でもよろしい、それに甘んじて呉れゝばいゝ、來たときは支那人と一緒でよろしいと云ふが、少し經つと直ぐ監督になりたがる、今は三圓位の給金をとる、彼等の生活は忙しい、朝晝夜共に飲食店で食つてる、一日に七十五錢乃至八十錢、一圓位までは支拂ふだらう。』

**大原氏**

『技術を持つた者は當分入り得る。』

**勘崎氏**

『始めは支那宿に一日二十錢位で生活してる、それでも勤勉な人は支那語も研究して、幾分貯蓄して來年は家族を呼ぼうなど云ふ者もある、眞面目の者なら現在の賃銀でもやれる、牛肉は上等ではないが安い、米も安い、支那で出來る野菜、米、牛肉を食べてたら困らぬ、都市でも支那人と同じ生活をするなら一ケ月十五圓はかゝるまい。

木綿織物などは今の處見當付かぬ、私は二十年になるが女中がモスの半エリを掛けてるのを見たことがない、着物でも外所行きのときは銘仙を着る、雨でも降ると車に乘る。』

**四戸氏、永原氏**

『滿洲人に對して木綿を入れ得るか、一時入つた、將來入り得ると思ふ、從來取引關係が不安で賣り込みに來なかつた、支那人の女の着る縞物は相當入る、木綿も絹物も入る、縞の研究が必要だ、一時大分入つたのだが、二三年前から排日排貨で止まつてしまつた。』

**奥平氏**



『輸入品は關稅に付て日本丈タリフをどうすると云ふことが問題だ、滿洲までブロックに入れて統制出來るかは隨分問題だ、私等としては結局手心を可然やつて貰ひ度い、餘り酷いのは困るが、そこがうま味のある處と思ふ。』

**大原氏**

『今の連中では其の頭はない。』

**奥平氏**

『移民問題は長く此處に居た人は、知つてれば知つてる程、憶病になる、これは仕方がない、其の代り失敗はない、考へて貰ひ度い、事情を知つてる丈卑怯になつて居る、然しどうしてもやらねばならぬと云ふ信念には燃えて居る。』

**樹岡氏**

『外の人夫などやつて、うまく行かぬ者が農業移民で行くわけには行かぬ、何か技術なり資本なりを持つて來ねばならぬ。』

**奥平氏**

『裁兵の問題、根本問題を云へば戸籍法のない滿洲に浮浪の徒があるのは當然だ、根本的には兵器を取り上げる外はない、或る時期が來て戸籍法が出來れば、それも可能だらう、現在軍人等が武裝解除に應ぜぬのは、生命より大切なのは兵器だからだ、これがなければ生きて行けぬからだ、根本問題としては武器を取上げて、戸籍法の上で武器を明にせよ、これは根本論、行きすぎてるが根本的にはそう思ふ。

取り上げた者にはどうする、衣食の道を與へるのがいゝが、どうするか、食はせる方法としては新政府が道路の新設をやつて馬賊を土工に使へと云ふ說もあるが、中々心棒出來ない、又或る人は馬賊の頭目に下請けさせて、頭を撥ねさせて部下を使はせると云ふが、果してどうか、過渡時代としては、繩張りを極めて日本の親分のやうに博打でもやらしてはどうか、王道論は看板にして行くとすれば。

通貨は金か銀か、私は銀建てゞいゝと思ふ、議論に於ては金建てがいゝ、兵亂の巷にあつて財界の根本を破壞するのはよくない、暫く銀でやりたい、準備が出來れば金になるのは日本人としては歡迎です。』



**永原氏**

『議論政策を重く見るものは金建て、實際論は銀建てだ。』

**奥平氏**

『どうしても銀でなくてはならぬと云ふものもある。』

**永原氏**

『政策論の目標では關稅同盟、更に進んでは一體を爲すと云ふ點から金建論、たゞ暫時と云ふ意味で銀建論を取る。』

**奥平氏**

『金建に贊成する意見も持つて居る、中國と絶緣するには非常にいゝ方法だ。

日本銀行の銀行券は支那人は金に代るバンクノートだと思つてる、それが眞實なのだが此點日本人と違つて居る、若し此處へ來て兌換をやれば皆取り付けられる、それを思へば金本位と云ふことも隨分問題だ、支那人は貨幣に對する智識は非常に進んで居る、補助硬貨は今關東州內丈にある、其他では小額紙幣のみだ。』

水曜會六時頃終了。大原君、宮崎君、磯子君其他と共にロシヤ料理を食ひ、歡談數刻、更に新京會館ダンスホールを見る、經營者もダンサーも客も皆日本人だ、相當盛だ、十時歸る、大原君と馬車に同乘、明月皎として街路を照す、友と共に車上に語る、一高當時の感激蘇へる。

**十月十五日**

朝九時長春發大連に向ふ、驛には大原君、長春滿鐵事務所長、取引所長、小野寺氏其他多數の見送りを受く、天晴れて萬物輝き渡り新都の光彩陸離たり、野山の楊柳黃色に映ゆ、廣野に牛馬豚の點在するを見る、一等車の乘客十四五名、齋藤恒中將、中島諮議其他、內地の旅行より氣分和やかなり、車室展望車の立派なること勿論、ハルビン、チチハル地方の風趣を見た眼には、沿線の樹々相當繁きが嬉し。不圖大原君の話を思ひ出す。

『滿洲國は大きい底の深い處がある、日本のあの島國を、鐵もなく石炭もなく天然資源に惠まれぬあの小島國を、兎も角今日の日本たらしめた日本人、この優秀な日本人が滿洲の富源



を開發出來ぬ筈はない、寒いのが何だ、北緯四十六度にあの人口四十萬の大ハルビンが出來てゐるではないか、優れたる技術と資本と眞劍な撓まざる努力だにあるならば、滿洲の前途は實に大なるものがある。』

と溫厚な大原君が眼を輝かして語つたあの姿が眼の前に見える。

十二時食堂車に行く、客二十餘人、殆ど日本人、食事も內地より立派に調ひたる和食、ボーイは日露混血の美人だ。

十四時三十五分遼陽驛着、日露戰爭當時小學校に居て、頭の中まで浸み込んだこの激戰地、ホームには堂々たる日本憲兵、關東廳警官の活歩するを見る、森嚴なる懷舊の情、附近の風色楊柳黃に映ゆ、沃野の匂ひ强し。

線路の兩側、刈り集めたる高粱、遠く連らる、幾十萬幾百萬の日本軍の展開したるにさも似たり。

十四時五十五分、右手に問題の按山製鐵所、活氣ある煤煙を吐く。

十六時六分、獨り大石橋下車、四五十分營口行列車を待つ、眼に入る日本人、將校の姿美し、

兵士の姿勇ましし、警官の姿嚴めし、女軍の姿わびし、夕陽將に低き山の端に入らんとす、ポプラの並木何となく寂寥、十六時五十五分大石橋發、赤い夕日に烏の大群幾千となく飛ぶ。

十七時二十分、汽車は營口に着く、驛には懐しの友矢島嘉平君、夫人、令息、令孃、一家を擧げて出迎ふ、嬉しさ云はん方なし。

矢島君（鮮銀營口支店長）に伴はれて領事館に荒川領事を訪ふ、領事の談、

『當地は最初は別段のことはなかつた、匪賊の脅威は受けて居た、こゝから北東に靠天と云ふ頭目がある、事件後に歸順して居た、それで治安も維持されてた、處が段々學良政權の手が及んで、靠天の態度が怪しくなつて來た、愈々怪しい捉へろと云つて、やつてしまはぬ中に寢返つた。

所がこちらは此の手薄だ、八月一日の午後五時頃、靠天の行動が怪しいと云ふ情報だ、八九時頃少し後退したらしいとのことであつたが、十二時頃石橋子に來たと云ふ情報が來た、危險だと云ふので警備團や警察を動員し、町からは海軍の派遣を望む電報を打つ、其の夜私は一先づ寢た處が三時半に起された、もう迫つて來てポン、ポンやり出す、滿洲國の飛行機



（水邊警察隊の）が間もなく飛んで來た、朝六時七時頃になつて大石橋からも日本の援軍が來たので、彼等は夜のひきあけに引上げた、敵の遺棄死體十數、日本側は巡査（日本人）一名巡補（支那人）三名戰死した。

二日の十一時には秦皇島から驅逐艦が來た、二三時頃には旅順から驅逐艦が二隻來た、二日夜は各方面でポツポツやつた、王殿忠（滿洲國軍）の迫擊砲は威嚇の爲め盛に發射される、三日四日五日とも毎日不安が續いた、全然砲の音も聞えぬやうになつたのは、こゝ二週間です、それまでは十日置き位に二三回襲擊があつた。

外人拉致事件、あれは元來外人が圖々しいのだ、營口から二十町位、又營口防禦の土塀から五六丁位の處に競馬場がある、こちらでは土塀の外へ出ぬやうにと希望して置いた、然るに土塀外のこの競馬場で馬に乘つて居た、これに對しては滿洲國警官からも英國領事を通じて危險を警告してた、領事も注意した、然るに彼等はこの注意を聞かなかつた、だから仕方がないのだ、すると九月八日だつたか朝六時頃、北覇天、これは大したものではない、四五十名の者の頭目だが、これの部下が來て捉へて連れて行つてしまつた、早速日本側や滿洲國

へ救助を賴んで來たので、日本の海軍や警察も皆骨を折つたが、高粱畑故分らぬ、今は大體居る場所も分つてる、金は女の方に七十萬元、アジヤ石油の店員の方に六十萬元、合せて百五十萬元を要求して來てる、今折衝中だ、英國軍艦が來て居る、手紙が來ると優遇されて居るとある、商品だから大切にする。

貿易に付て、こゝでは滿洲國が輸出稅を取る、支那でも轉口稅を取らうとして居る、どの位の割合になるか不明です、今殆ど取引は成立たず、今滿鐵の石炭が引懸つて居る、古い支那時代の協定を滿鐵が主張するのはどうか、日本が轉口稅をかけろと云ふのは矛盾だ、轉口稅率は一ベース、噸當り十錢、輸入稅になると十ベース、噸當り一圓になる。

雜穀など非常な値下りだ。

品物が出惡いのは關稅のみならず、過爐銀（こゝ特有の信用通貨、これを銀爐が發行す）がうまく動かない、過爐銀と上海兩の相場が立たぬ爲め信用なく、こゝの商人は一寸取引出來ぬ。』

領事館を出で、矢島君と共に支那料理屋に行く、其處には既に御老母樣、奧樣、令息、令孃、



方先着して待つて居て下さる。

矢島一家と共に樂しく食事をとり、矢島君宅へ引上ぐ、年來兄弟もたゞならざる間柄なれば、話盡くるを知らず、やがて風呂に入り、頭から一切を洗ひ、更に歡談を續く、母堂曰く『もう內地などに歸りたくありません、こちらの方が生活も落付いて居て、暮し心地もいゝです、せま苦しいゴチヤゴチヤした內地などへ歸りたくありません、』と、御元氣の姿喜びに堪へず。

二十三時十五分、名殘りを惜しみつゝ矢島家を辭す、矢島君御夫婦送つて呉れる、明月皎々、夫人曰く『滿洲は空が高く月も遠く見えます』と、如何にも其の通り、白光遠くウラルダイヤの如く輝く、驛につく、矢島君の問合せによれば、この汽車は汽動車で今夜より前後の警備車を廢止した由、夫人頻りに氣味惡がり明朝の出發を進む、けれども明日はどうしても午前中に大連に入る必要あり、强いて御厚意に叛き乘車す、同乘二十餘人、三等車に乘つて匪賊の襲擊を氣遣ふも亦一興、矢島君夫妻に送られて發車す、月光淡く廣野を照し、一道の無氣味流る、車內大多數は支那苦力のやう、當地普通の社會相を見て感轉た切實、あはれ不幸なる民族よ、然かも力强き民族よ、內に數名の日本人、殊に一隅に佇める若き日本の男女、佗びしくも余の

眼を惹く、〇時三十五分大石橋より大連行の寢臺車に乘る、ホッと一息。

**十月十六日**

六時眠り醒む、一天青空、西空に月夢の如く消えんとし、東天旭光燦として輝く、沿線小丘連り楡柳生ひ茂り、村落遠近に散見して風色馴化內地色濃厚なり。

七時大連著、驛頭に大和撫子女學生の一群潑溂として活歩す、宿の車にて大和ホテルに向ふ、街頭市會議員選擧の立看板を見る、愈々浮世に戻つて來た氣持がする、街路整然且つ堂々。

九時半、滿鐵野村正雄君の案內にて視察に出發す。

先づホテル屋上にて市街の大觀、人口四十萬、日本人十萬、外人（ロシヤ人多し）三四千人、氣候快適、內地と差なきを覺ゆ、ホテルは中央廣場に面し地位好適、大島將軍の銅像を眼下に見る。

甘井子石炭積込埠頭を見る、山本總裁時代の建設、總工費千二百五十萬圓、全部電氣裝置、



一日の作業一萬六千四十八トンの記錄を持つ。

歸途、町の建物が立派なので、煉瓦の値段を聞いて見る、一枚八厘、長春は一錢五厘だつた、建築するのに基礎工事もいらぬ、鐵骨もいらぬ、たゞ積み上げればいゝとは羨やましいではないか。

露天市場を見物する、俗名を泥棒市場と云ふ、こゝへ來て見ると家で盗まれたものは大抵あるので此の名前が出來たのだ、凡そ世の中にこれ程汚ない、臭い處はあるまい、世の中のありとあらゆる汚い物を、ありとあらゆる汚なさで並べたのがこの市場だ、品物は浮世にある限りの物は何でもある、頭のない佛像、足のかけた椅子、針のない枕時計、靴でも、キセルでも、洋服でも、暖爐でも、紛然雜然としてある、蛇屋がある、食ひもの屋がある、奇術もあれば說教節のやうなのもある、蠅はウンと居る。

出て來たら、ホッと溜息が出た、

十二時半、滿洲館に到着、理事河本大作、同山崎元幹兩氏に迎へられる。午餐を共にす。

**河本氏**

『こゝから飛行機で鴨綠江まで行く三分の二位の處に太孤山太洋河がある、米五百萬石の水田見込地だ、然し蟹の害が多い。

ジヤガ芋の如きは南洋方面は米國產が入つて居る、これなどは當然滿洲から出し得る。

石炭の如きも當地に廉價なる石炭があるならば、宜しく高價なる內地炭等を廢止して、滿洲石炭を需要家に供給すべきだ。』

**山崎氏**

『內地の商工業者農村の救濟を爲すと云ふが、然らば何故この安い燃料を入れぬか、勞銀が安いと云ふ丈のことなら、こゝのものを主張するのは無理だ、然し勞銀を日本と同じにしても、尙ほ且つコストが下ると云ふ場合には、當然當方の主張を通すべきである、硫安の如きも亦然りである。

警備の問題も警察官よりも軍隊の方が安い、警察官は一人始めから千圓かゝる、外務省は千二三百圓、之は成るべく少ない方がいゝ、鐵道附屬地は關東廳の管轄だと云ふ規則がある、それで警察官を使ひたがる、然し軍隊ならばずつと安く行く。』



**河本氏**

『武藤全權は實にいゝ全權だ、他から動かされるやうな人でない、非常な勉强家だ、先入齋だ、後入齋は困る、ロボツトになれぬ人は後入齋で困る、西鄕南洲はロボツトの標本だ、ロボツトになるには人を信用することが必要だ、信用をしてそして何とも云はずに見て居て、其のいゝ處を取る、皆任せると淀君の三成のやうになる。

治安維持には今の兵力は不足だ、今までは討伐には武力丈を使ふ、處が正規の軍隊なら今の武力で間に合ふが、相手が今のやうな四散するものではどうにもならぬ、軍隊が叩いて四散したものに公安隊を入れる、今はラヂオにしても支那のラヂオ許り、宣傳と治安維持が必要、治安維持の爲めの費用や、警察を組織する費用をやることにする、宣傳と金と軍隊と警察隊とで行く、これがうまく行けばもういゝ、今でも匪賊は下り坂だ、公安隊に金をやればよくなる、兵隊は一ケ月七圓の給金でいゝ、戰爭をしても七圓はかゝる、そして功勞者に多くやるやうにする。

今の日本兵は最少限度のものだ、之等の費用は滿鐵が働いて、國民の負擔をこれまでより

も增さぬやうにする、滿洲の鐵道の經營を受引けてやらう、日本國民の負擔を輕くしやう、これが今後の滿鐵の大方針だ、當分はいかぬ、あらゆる利益を日本が持つて行くと云ふ風に思ふ、滿洲はどこまでも朝鮮と同じやうに日本に迷惑をかけぬやうにしたい、寧ろ日本兵を滿洲へやれば經費が安くなるといふ風にしたいと思ふ、それは鐵道收入だ、直ぐはいかぬ、これが完全に最も進んだ滿鐵のシステムに依り統制されゝば、そして治安が維持されゝば出來る。』

**山崎氏**

『總ての方面に日本の文化が入ること、滿洲の產業に日本の文化を入れること、滿洲とは獨立した一國だが、日本の文化が普遍的に及ぶことが必要だ、鐵道はその先驅であり中心である、そして之を培養する事業が起らねばならぬ。

移民、內地の人心を繫ぐ上には必要だ、然し同時に滿洲人が日本を排斥する材料になる、實際的にどんどん入ることはいゝが、あまり宣傳はいかぬ、やると云ふ方針を立てゝ急ぐな、冬の半年を有效に使はねばならぬ事情あり、これを考へてこの半年は工業的に使ふと云ふ風



にする、生活費は苦力は安いが、然し集團的にやれば非常に安くなる、日本人よ、痺れを切らすな、林檎の芽、これを食ひたい、然し十年二十年待つて、そして出來たら滿洲人に分けてやれ、芽をつむ勿れ。』

**河本、山崎兩氏**

『移民は農業工業總てやらなければならぬ、苦しくても何でもやらなければならぬ、內地の炭業を廢止する必要あるものあらん、失業者出づれば結局はその日本人を滿洲に入れる外はない、然し今までの滿鐵社員のやうにいゝ程度の待遇は中々出來まい。』

**河本氏**

『現在日本人二十萬の內七萬以上は滿鐵關係者だ、當面は資本が先に來てくれ、それから人である、滿鐵の資本を擴大するのが第一だ。』

**山崎氏**

『今事業を始めるのはいゝ、然し滿鐵と充分聯絡をとることが必要だと思ふ、滿鐵は國家的事業だ。』